

諸家系譜

確度の高い系譜だけ全文掲載します。

川畑家系図 ※藤原姓、(西暦年号ハ校訂者ノ注)

氏神 正八幡大菩薩 春日大明神 北山大明神

幕紋 桐葉^{又ハ}木瓜 家ノ字篤代々名乗用之

宇多天皇(仁王59代、諱定省、母式部卿時之親王女)

醍醐天皇(仁王60代)

敦実親王(承平六年(九三六) 丙申七月七日、賜源氏)——

——雅信(一条右大臣)

篤房親王(天慶九年(九四六) 丙午二月二日、賜藤原氏、

母正二位大納言魚名朝臣女)

篤相(正四位右京大夫、税所・川畑・堀切・赤坂・入水・

川上・神田・長山・小川・篠ヶ迫・篠田・重久・妻屋・葦

江・白坂・洲川・浜川・松永・宮司・郡田・吉松・田口・

坂元・最勝寺・神田橋・花堂・羽坂・吉村・瀬戸口・岩田

等之祖)

時中(庭田大納言)

時方(五辻右兵衛佐)

扶義(佐々木大藏介)——成瀬(式部少輔)

兼綱(越前守)——綱家(式部太輔)——光綱(治部太輔)

——貞綱(民部太輔)——綱武(信濃守)——綱明(佐々木源

三)——綱詮(伊豆守)——秀義(源三)

定綱(判官)——重綱

経高(中務)——高重——高信

盛綱(三郎)——信実——実秀(高浜ト号ス)

高綱(四郎)——光綱(二郎)

綱豊(五郎)

篤国(正二位右忠将・母摂津守家信女)

篤仲(正四位左少将・母播摩守有房女)

篤長(刑部太輔・正五位下)——篤忠(民部太輔・正五位下)

篤如(周防守正五位下・治安元年(一〇二二) 辛酉三月二十一

日・大隅国下向正真正八幡・霧島・止上等之大宮司職補任)

篤義(坂上御館・出羽守)——篤信(重武)——篤秀

篤貞(曾野太夫豊前守)

篤近(太郎大夫)——篤満(出羽守)

篤昌(豊前守)——篤房

篤友(伊豆守)——篤国——篤治——篤真

税所葦江ト号ス

篤方

篤武(豊前守)

篤家(重久四郎左衛門尉)

篤定(妻屋源左衛門尉)——篤安(次郎左衛門尉)

出家(蒲生宝寿寺住)

女子(二人)

篤尹(四郎九郎・伊豆介)

篤広(税所助太郎)
篤重(川畑助五郎)
篤国(川上助左衛門尉)——河上越後号吉松治部少輔

篤綱(助太郎)——篤行——篤春——篤孝
篤義(源十郎・入水)
篤秀(国書介)
篤高(七郎左衛門尉・白坂)
出家(止上座主)
篤世(川畑左衛門佐)——篤実(川畑三郎左衛門尉)
篤秀(三郎左衛門尉)——篤本(堀切四郎左衛門尉)
篤宗(五郎三郎)

篤兼(豊前守)——篤時(伊賀介)——篤純(加賀介)

右川畑氏之由緒拳二古譜於頭一書記名字之来由一雖然世
遠年隔、往昔税所氏之苗裔系統委不相知隅州曾於郡清水
ヨリ垂水江令移居去二彼地一后福山江居住ス年間不詳福山居
住之高祖川畑德左衛門篤栄以前伝不レ詳依レ之篤栄為三元祖
一綴二系図一卷一永伝二子子孫一尤可後代之亀鏡者也 于
時天明八年(一七八八)戊申卯月(四月)吉辰、藤原篤
公代、誌レ之

垂水ヨリ福山江移居住

元祖川畑德左衛門篤栄
寛永十八年辛巳九月廿日死去
法名茂林常繁居士
明曆二年丙申二月八日死去
右室繁室妙昌大姉
男子一人佐土原江居住

同氏休左衛門(子孫アリ)
同氏市郎兵衛篤次
(家宝刀二尺一寸備前物、
子子孫譲レ之)
正徳五年乙未八月四日
法名水雲清総居士
行年九十三
元禄十二年己卯九月十一日

右室花窓妙心大姉
同氏九兵衛

同氏伊兵衛篤徳
元禄五年申九月廿四日
法名法山心伝居士
元禄八年亥十月十六日
右室古梅妙林大姉
同氏德左衛門
同徳左衛門
同惣左衛門
同市郎左衛門
同兵左衛門
同善八
女子(城野唯右衛門妻)

女子
女子
同氏龜太郎
同氏兵太
女子
同氏釜次郎
同氏龜助
同氏袈裟次郎

篤祐、川畑兵右衛門
母敷根士竹下孫兵衛女
宝曆六年子八月廿四日
法名果山清徳居士
享保九年辰四月十四日
右室花林元浮大姉
宝曆五年亥十二月朔日
右後室梅本全香大姉
重久氏之女
同氏次郎右衛門
母同前

女子、堅山安左衛門妻
女子、肥後善七妻
同氏兵左衛門
鹿兒島城下町
武林家養子
同氏次右衛門
女子、厚地伝兵衛妻
女子
篤逸、川畑市郎兵衛
母厚地善六女
家宝刀相州物貞宗二尺一寸
右同高田長盛一尺五寸譲子
安永六年西六月廿三日
法名慈山良全居士
行年七十一
宝曆六年子六月十一日
右室松柏妙閑大姉
行年四十二
女子、赤石喜兵衛妻
母同前
篤次、市右衛門
母同前
同氏伊兵衛
母同前
厚地次兵衛智養子
寛保元年西七月八日
女子
繁室妙栄大姉

同氏次郎兵衛
 女子、川井田孝右衛門妻
 女子、川井田喜三次妻
 同氏次郎助

同氏市左衛門
 母竹下助右衛門女
 女子
 川畑兵右衛門妻
 母同
 同氏市郎右衛門
 母同
 女子坂元次吉妻
 女子
 川畑伊兵衛妻
 母竹下助右衛門女
 同氏市十郎
 母同
 同氏兵十郎
 母同
 女子
 母同

同氏市兵衛、母新城
 同氏納右衛門

篤公、始篤則、幼名市十郎后市左衛門又兵右衛門ト号ス
 母厚地善六女、享保二十年乙卯九月二日誕生

法名
 右室

篤公代世上凶年砌諸人救難儀又安永八年亥十月朔日桜
 島燃ニ付救諸人依之難有被仰渡候御書付之写左之通

福山浦町之

兵右衛門

右者去年十月桜島燃ニ付福山江逃来衆中百姓中江白米
 六石三斗余致助勢、先年同町出火之節錢二貫七百文余、
 白米一石五斗六升、家数七十軒余致配当候儀有之兼日以
 入金候、右兵右衛門事為御褒美代々嫡子迄仰書名字被成
 御免鹿兒島町人同前被仰付候、右之通被仰付候条難有承
 知可仕間可申渡候

五月

主馬

右之通篠崎藏左衛門殿御取次ヲ以テ被仰渡御地頭御承知
 之有銘々処殊ニ被申渡相濟候間諸帳面等諸事此例可被申
 渡旨御地頭御差図被成候、子六月五日、福山暖衆中、調
 所次郎兵衛印

右之通被仰渡候カ此写書御旨ヲ被致御承知兵右衛門殿へ
 可被相渡候以上、安永九年子六月八日寄暖松下助左衛門・
 暖指宿五郎次郎・松下五郎衛門・松下清兵衛・松下七左
 衛門浦役人衆中迄有之書付一通

福山浦町、川畑兵右衛門

青銅七百疋

右者凶年ニ付去夏及極難候者共江米錢等差出致合力候段、
 達貴聞奇特以御褒美被思召上候依之右之通被下可候条、
 難有頂戴可為仕候

右如例申渡首尾掛江被可申渡候

十二月

主膳

別紙之通被仰渡候条於所役之相勤難有頂戴可為仕候左候
 テ其首尾可被申出候此段可申渡旨御地頭御差図ニテ候以上、
 郷士年寄所

天明四年辰十二月廿四日、川畑兵右衛門殿

篤陳

女子

弥兵衛初兵次郎

母同前

元文五年申四月十七日誕生

同氏市五郎、早世

宝曆十年辰十月十二日

法名心海了安居士

国分林愛右衛門妻
 母国分林庄左衛門女

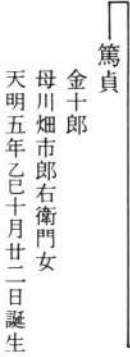
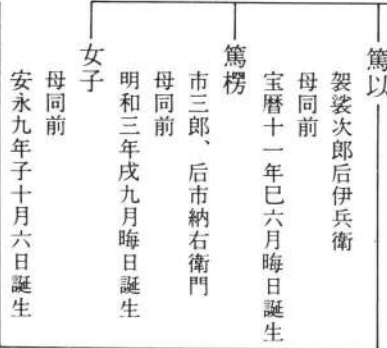
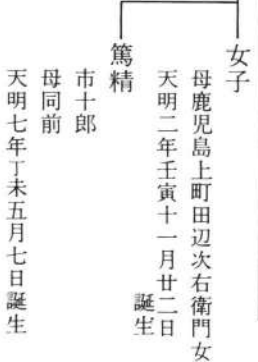
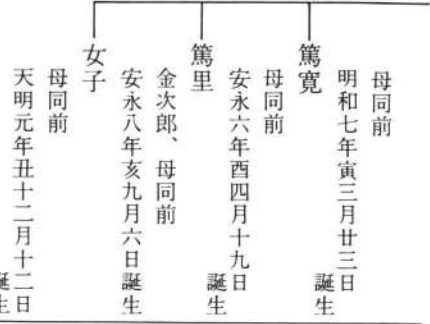
篤見

弥市兵衛

母同前

明和二年酉十二月十五日
 誕生

篤等



。平氏千葉家武石之系図

氏神 嚴島大明神、安芸国佐伯郡

賀茂大明神、山城国
松尾大明神

幕之紋事、月仁星、胤之字代々用名乗

桓武天皇…(二代省略)…高望王

仁王五十代
上総介、仁王五十九代

天武天皇太子
宇多天皇寛平二年
庚戌五月十二日始賜平氏

号柏原天皇

貞盛
陸奥守從五位下
常陸平太

良望
鎮守府將軍
從五位下
号常陸大掾国香

良將
從五位下
將門
平親王

良兼
鎮守府將軍
從五位下
公雅

良文
上総介從五位下
忠頼

良時
村岡五郎
村岡次郎
陸奥守從五位下陸奥守

將恒
武藏守
從五位下
武常
武基—武綱
怙父從 怙父
五位下 官者

忠常
前上総介小二郎
千葉介

賴尊
山辺禪師
中村庄司宗平
土肥二郎実平
土屋三郎宗遠
早川二郎景平
此四家元祖是也

清盛
從一位大政大臣
太宰大貳
安芸守
入道淨海
御母鳥羽院御局
仁安三年戊子十一月十一日出家
治承四年庚子閏一月四日
享年六十二歲薨

教盛
門脇中納言
平宰相
母皇太后權太夫
家隆女旦壇浦入水

賴盛
使刑部卿
正四位上

忠盛
出羽守
從五位下
左馬權守

正衡
正度(慶)
正五位下前越中守

維衡
從五位下常陸守

正盛
從五位下

正盛
從五位下

正盛
從五位下

正盛
從五位下

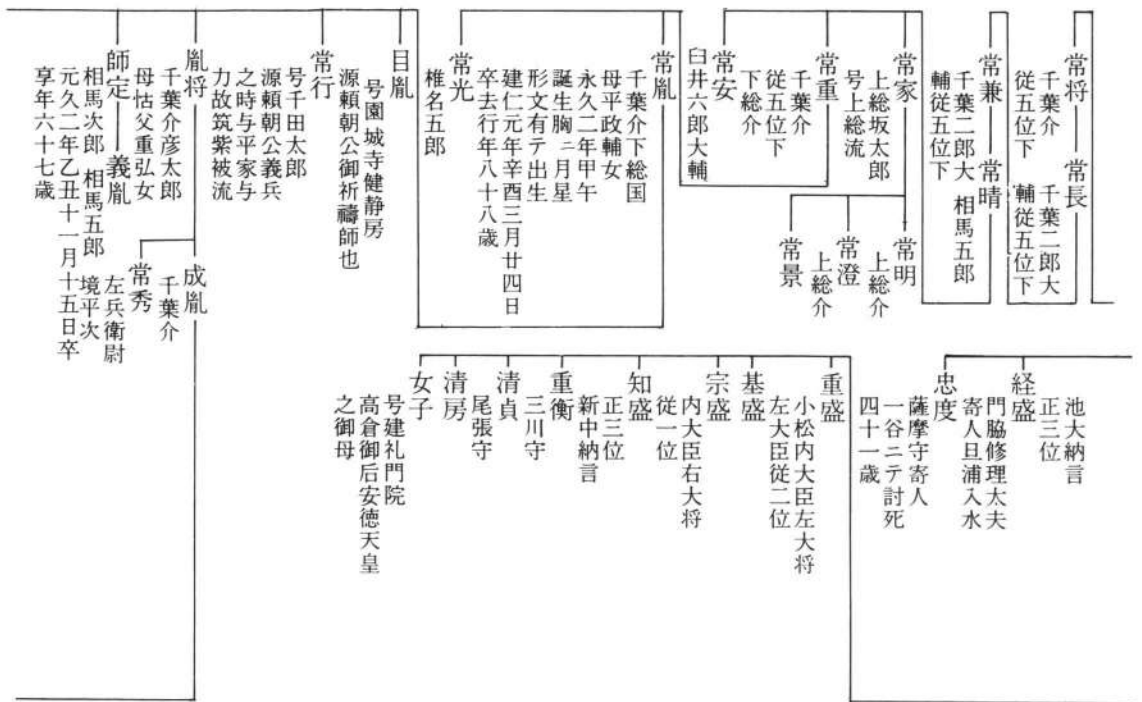
正盛
從五位下

正盛
從五位下

正盛
從五位下

正盛
從五位下

正盛
從五位下



胤治
武石左門助
母平岡弥三郎女
宝治元年丁未二月廿日生
元德二年庚午二月廿日
死歲八十四法名常心

胤增

武石左衛門尉
母木原玄蕃助女
文永六年己十一月十七日生

胤秀

武石太郎
母別府主膳實時女
正応元年戊子生
貞和五年己丑八月八日
死六十二歳法名西岩

胤加

武石次郎

胤昌

武石三郎

女子

坂元源太郎

女子

岡田太郎正定母

女子

胤朝

武石左太夫左輔
応永十一年甲申
四月八日生
延徳
元年己酉六月十日
死八十六歳法名
花心

胤之

武石左門助
正和二年癸丑十一月
七日生
永和三
年丁巳五月廿八日死
法名道泉

胤近

武石左近正
正慶二年癸酉誕生

女子

上田六郎左衛門妻

胤周

武石佐藤兵衛
母川野六郎頼親女
文和三年甲午三月八日生

胤春

武石佐平治

女子

岩切藤兵衛妻

胤清

武石藤左衛門
母石田主水助女
康暦元年己未
八月十九日生

女子

胤門

武石佐藤左衛門
母小牧三郎左衛門
信長女
応永三十二
年乙巳生

胤則

武石左源太

胤公

武石藤太左衛
門
文安五年
戊辰二月十日
生
大永四年
甲申九月十五
日死
七十七

胤高

武石刑部左衛門

胤資

武石藤弥太郎

女子

白坂式部左衛門
定昌妻

胤漢

武石清兵衛(豊後大友戦)

胤盈

武石大内藏介
日州穂北之内公田
五反被成下親貞
経定寛面光宗
忠棟之御坪附有

胤庸

武石清兵衛尉
豊後大友戦後
改丹波介
日州穂北之内
五反被成下
時天正八年三月
吉日、経定・親貞・
光宗・忠棟之御
坪付、天正廿年
七月吉日、田中名
池頭一反被成下
久信・歳宗之御
坪付有、慶長六
年八月廿五日、
福山村知行高五
石、庄内御弓前
之刻、境内為移
重被宛行山越前
入理安伊下野入
抱節御判目録有
文録二年二月吉
日馬越田中名水
力キ一反被下切
紙有之

女子

前原左京重盛妻

女子

女子

村田弥兵衛為安妻

胤衡

武石二郎

胤昔

武石藤兵衛母藤原
親行女、文明十一年
己亥二月廿日生

大守島津勝久公御
人故肝付河内守兼久
公ヲ頼隅州肝付郡始
良居住而同氏兼家
司始良野尻名村之
内一町五反武石胤昔
被成下于時享録二年
己丑五月十日賜之

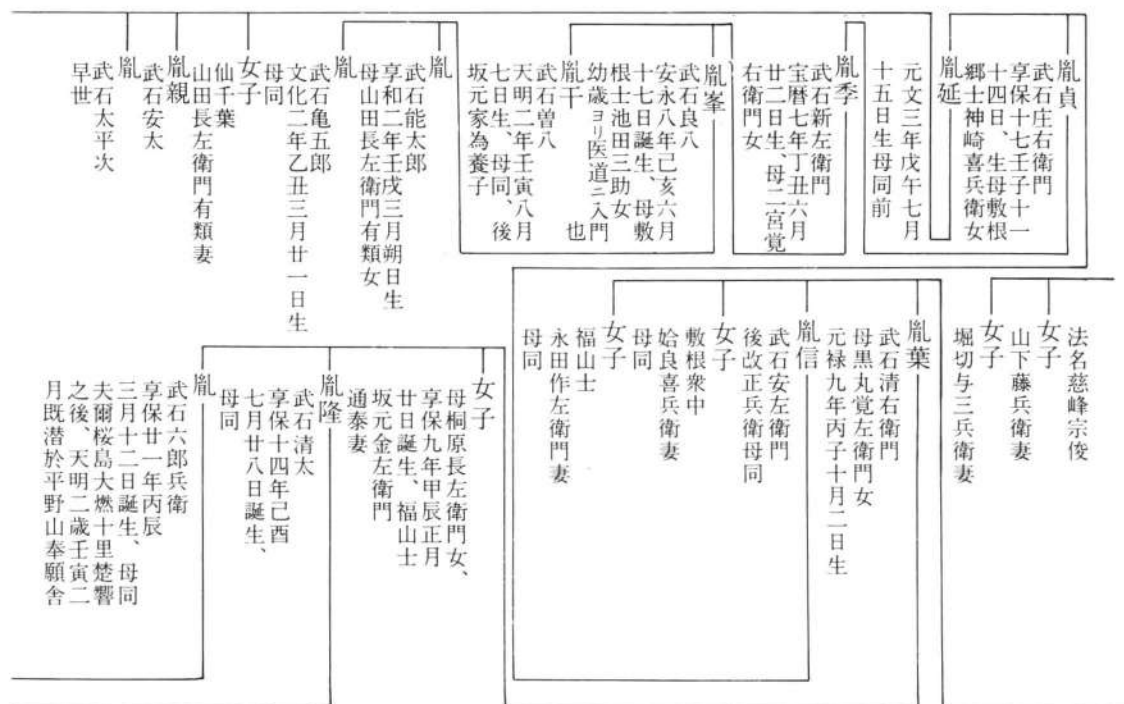
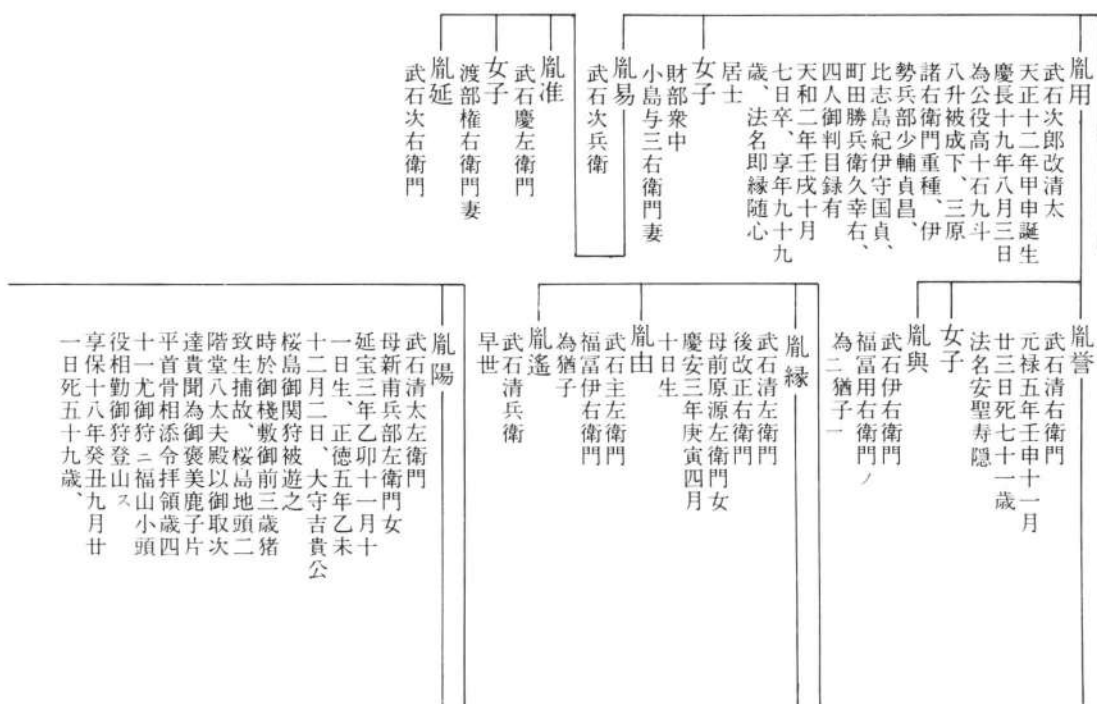
胤康

武石藤弥左衛門号
小宮、母得田采女
息女永正三年丙寅
十月二十三日生
夫武石ヲ改小宮事
始良惣社正若宮
八幡江胤康三七日令
參籠時可号小宮
河内守兼統公江
由依御夢想此趣
令披露号小宮藤
弥左衛門胤康改
于時天文四年乙未
八月十五日

胤寛

藤次郎改藤左衛門
女子

長山丹波守重武妻





前田氏系図 ※桓武平氏の系譜（抄）

高望王（賜平姓）——貞盛——維盛——正度——正盛——忠盛——清盛——宗盛——清宗（号前田）——清祖（伊佐郡牛屎院に下向す）……系図数代不詳：前田又左衛門清精（隅州曾於郡小川院福山郷士、太刀谷山物二尺六寸、軍役用として子孫に伝う）——清請（志摩左衛門尉、慶長十九年（一六一四）八月三日、高三石二斗一升、隅州曾於郡之内、佳例川村浮免、右之知行応じ此

中之公役は、伊勢・三原・比志島・町田在判、大守義久公伊集院幸侃違心……清規（文化十四年丁丑（一八一七）十二月、大守都城へ光越のため、福山筋を通過、御先供を相勤む、十六歳なり、（初は行司役・横目役のち勤番）―重左衛門（薩英戦争に参加、三男清恒は地頭横目並に本横目）

竹之内氏系図 ※阿倍姓（抄）

清明（天文博士）：惟義（十三歳、鳥羽院へ出仕、豊後国を賜う）：惟藏（和泉守、住大口）：惟信（住末吉）：惟榮（住福山）

○ 菌田氏系図 ※ 菌田権兵衛（福山在住以前不詳）（抄）

権兵衛（曾於郡小川院福山居住、高麗渡海・庄内弓箭に参陣す）

宮原氏系図 ※佳例川（抄）

平姓、氏神、嚴島・松尾・賀茂大明神、家之宇、種又は景高望王…貞時（薩・隅・日の追捕使として、薩州阿多郡に居住す、以後加世田の内宮原に住し、宮原を号す）…宮原景種（肥後隈元で戦死）…加賀守（維新公へ奉公）（加賀守末裔、隅州曾於郡福山村の内佳例川に居住す）…小右衛門種次（系譜を作製す）…種善（天保七年丙申（一八三六）十月十七日生、

地頭横目役を相勤む)

。鎌田氏系図 ※藤氏・鎌足の系譜(抄)

通清(源義朝の息正清、平治二年正月、誅殺さる、通清は正清と改め、鎌田を号す)(正清、平治の乱に、義朝に軍忠をたつ、平治二年(一一六〇)尾張国長田庄で誅殺さる)——盛政(義経に従い、摂州一の谷にて戦死)——光政(兄正清、不意に誅殺、其子幼少にて、母は自害す、幼少の子は出家す、光政は讃岐の屋島にて戦死、尾張の志濃と丹波の園田名を預かる)——政佐(初清重、島津忠久に従い、文治二年(一一八六)丙午六月一日、関東を発し、同八月一日、薩摩国山門院に供奉下著す)——清正(建武三年(一一三六)丙子正月二十九日、尊氏、義貞に敗れ、鎮西に落去、菊池武俊迎撃す、清正は貞久公の幕下として尊氏のために粉骨軍忠をたつ、戦死)——清春(建武三年丙子正月二十九日、貞久公に従い、筑前多羅羅浜にて戦死)——春政(筑前多羅羅浜の合戦にて、祖父清正、父清春軍忠をたて戦死す、時吉の庄と長野の庄を賞与さる、五百貫の領地なり)——政武(日州本城の地頭職に補任され、彼の地に居住す、天正十五年(一五八七)丁亥四月十七日、日州高城の根白坂にて戦死)——政秀(国府の士、慶長三年(一五九八)戊戌十一月十八日、高麗番船にて戦死)——政継(政秀の弟として記す、河田氏の庶子で、甥にあたる。政

良が若年のため名代として、庄内逆乱に出陣、戦死)——政良(天正十六年(一五八八)戊子誕生、母は重久越後守の娘、承応二年(一六五三)癸巳十月三日、死去)——政友(慶長十九年(一六一四)甲寅二月一日誕生、母平原喜之助の娘、慶安元年(一六四八)戊子七月、鹿兒島諏方(訪)大明神の祭礼に、政友は居頭役を務め、同姓彌太右衛門政盛・同姓政安・同姓政辰・同姓政広・同姓左衛門政盛首尾よく奉仕す)全く別の筆蹟で、此のたび、鎌田氏系図、まさに修理大夫綱貴公上覧の時に備えて、その所持の系図を糺し合され、相違の処を相改め、去月廿日、上覧に達し相済なり、其写一卷を遣されぬ、子孫至るまで永遠に疎意なく、所持あるべきもの也。寛文十年(一六七〇)庚戌九月二十六日、正長(鎌田又七郎)、鎌田四郎兵衛殿：鎌田政夫に至る。※最も正確度の高い系譜の一つである。

。厚地氏系図

政盛(次兵衛)(安永八年(一七七九)己亥二月九日死去、法名果山全昌居士。母周前、政盛事才智発明、家富栄、揚名、名譽如意満足、珍宝を貯え、子孫に永く伝える者也。嫡子まで鹿兒島町人を仰付られぬ。——政次(伊兵衛)(安永六年(一七七七)丁酉二月九日死去、法名濤山全徳居士、川畑右衛門三男、聾養子となり、当家を相続す。諸事を切り回し、

能く多才にして、子孫繁榮、且御用分承儀、度々仰渡され、奉公申され候。―政倚（寛保三年（一七四三）癸亥三月二十七日誕生、母政盛の長女、祖父厚地次兵衛政盛並に父厚地伊兵衛政次の代より、諸事出精を以て富貴繁榮ス。政倚の代に貴聞に達し、諸御用を承べきの旨、仰渡さる。剩え御城下町人ニ仰渡され、且年寄・帶刀を御免、其後上町年寄を仰付られ、福山へ差置かれ、鹿兒島町用は承るに及ばず、嫡子の代に年寄格仰付られ、帶刀御免、市中の格式、御目通り罷出する儀本役同前に仰付らる。諸御役人衆御証文並に御書付数通頂戴いたし、年号日付委しく別巻にかき載せ、当家の記録として子孫に伝えるものなり。天明四年（一七八四）甲辰十二月、太平布五疋、難儀の諸人に米穀を合力いたし段、貴聞に達し、御家老宮之原主膳（通直）様御取次大野掃部、天明五年（一七八五）乙巳七月、米穀等諸人に合力いたし、役所に配当、天明六年（一七八六）丙午正月、上和泉屋町組入を町奉行所より仰付らる。同年六月、西目筋所々御飯屋造立にて、御入糧、銀六〇貫目、一手に差上げる者は無レ之や仰付られ候。御家老島津豊前様、同年六月廿五日御取次鎌田愛太夫様。同年十月より銀六〇貫目、天明七年（一七八七）丁未三月までに金蔵へ上納相済なり。同年閏十月、太平布十疋、凶年にて極難に及び、米穀を合力いたし、御褒美を頂戴、御家老川上頼母様御取次大野隼人様、天明七年（一七八七）七

月二十六日、伊集院伊膳様より嫡子次郎左衛門父子とも町御奉行所へ御用を仰渡され、八月朔、次郎左衛門麻袴着用にて町奉行所へ御用仰渡れ候。父次郎右衛門の跡に召出され、年寄役を仰渡れ、遠境故に鹿兒島用向承る儀は用捨され、代々年寄家筋帶刀・嫡子年寄格帶刀まで免許、市中の格式、御目通り罷出儀本役同前にて、福山に居住、向後次郎右衛門の相勤候通り、彌々心掛、御用立べく、御家老衆島津和泉様御取次伊集院伊膳様より仰渡る。八月朔、政倚福山地頭新納織部様より御用仰渡され、麻袴着用罷出直に御証文仰付られ、有難く頂戴仕り候。福山地頭江、上町年寄福山居住、厚地次郎右衛門、右是まで段々に心掛け、当御時節がら猶又御用相つとめ、殊に三代引つづき出精いたし候。御取分ヶ此節を以て召出され、其身一代福山郷士仰付られ、衆並の御奉公は差免れ置き候条、向後町方の儀は専ら悴次郎左衛門が御用立候よう出精いたすよう申渡され候。御家老島津和泉殿御取次伊集院伊膳様。右の通り仰付られの御証文並に御書付数通細蜜に別巻に委しく記録す。政倚は祖父三代引続き勤功の訳を以て、一世福山郷士を仰付られ、以後米三千石余を差上げ、大阪替せ、上納差引として上阪を仰付られ、御下国の費用不足の故を以て、金二三〇〇両、銀二〇貫目御用立、二五〇〇両借入れ差上げ、御難洪の御時節柄一層出精、御用を相勤め、奇篤の御取分を以て代々福山郷士に召出され、御銀方掛仰付られ、

子供まで衆並の御奉公を差免れ置く旨、寛政四年（一七九二）壬子十二月十六日、御家老名越右膳殿より御用人松崎次左衛門殿御取次を以て御渡り家内に入れ候。寛政五年（一七九三）十二月二日、御家老名越右膳殿より御預代高橋雄殿より御免御通行の節御用宿所より依^レ願屋敷一園御免にて御用宿を造立仰付らる。同年二月、高持御免。寛政五年六月四日、月毛駒を重豪公に献上、御徒目附、迫田仲兵衛殿御取次を以て、御掛物二幅等伯^〇信筆、七福神、法眼^〇春筆山水、御晒布十疋、七月十二日拝領仰付らる。御札を為す。伊集院平格殿御取次を以て刻み煙草、御菜類など御門毎に献上、度々別冊の通り拝領す。（御馬の儀も四度四疋献上候。）—政春（明和元年（一七六四）甲申六月二十六日誕生、母川畑市郎兵衛娘、天保十年（一八三九）己亥二月二十日、行年七六歳にて死去、法名正泰院儀山道福居士。天明七年（一七八七）丁未朔日、麻袴着用にて、町御奉行所へ御用仰渡され、罷出候処、父政倚事此節召され、出跡年寄役、遠隔地故に：（前文に同じ）御家老島津和泉様、御取次伊集院伊膳様より仰渡れ候。天明八年（一七八八）戊申十月、御金納につき銀一貫目差上げ、寛政三年（一七九一）辛亥七月、御詞の御褒美有^レ之。寛政元年（一七八九）己酉六月二十一日、初めて入部、御目見仰付られ有難存じ奉り候。同年極月、福山町大火之節、父政倚留守により、類焼中へ米を配当、御褒美として、寛政四年（一

七九二）壬子十月、太平布三疋、御家老伊勢播摩様より御用人市来次右衛門御取次を以て仰渡さる。父政倚代々福山郷士仰付られ、拙者の代に相成り、大守齋興公、濃州、勢州、尾州その外東海道筋川の御普請御用金を仰付られ、難渋の御時節に付、銀等差上げるべき旨、御用相勤候処、代々福山郷士年寄格に御附られ、人払いにて、本役等仰付らる。所に於て何篇の儀もすべて役目の場に相附け候。文化十四年（一八一七）丁丑八月朔日、御地頭堀殿衛殿が旅行中のため、坂元平左衛門へ頼置かれ候。別巻に記録有^レ之。天保九年（一八三八）戊戌十月十二日、佐土原公島津^〇守様御成。—政純、（文政五年（一八二二）壬午正月二十五日誕生、母養父政春の娘、松下助左衛門兼邊の二男養子として当家を相続す。天保九年戊戌、金七^{〇〇}両金納仕様、公儀御本丸焼失、三五^〇両を十月二十九日養父代納、天保十年（一八三九）己亥三月一^{〇〇}両、十一月、一^{〇〇}両、天保十一年（一八四^〇）庚子三月、一五^〇両相済、四月十六日、御免、五月八日、代々郷士年寄格、父次兵衛同様勤方致候様、地頭頼娃織部殿より仰らる。天保十五年（一八四四）甲辰七月、戌年御上納金の節差上置、御褒美として太平布一^〇疋、金子二千疋を仰付らる。御家老島津主計様、天保十五年甲辰十二月十四日、福山の内大廻の百姓極^二難渋^一に付、自分の出錢で度々調え寄附致し候処、地頭頼娃織部様、拙宅にて御言葉を、御褒美有^レ之、

御一泊された。弘化二年（一八四五）乙巳四月六日、大守齊興公御成、御進上物御茶百目入、御菓子板折一ツ、御七島物板折。弘化五年（一八四八）戊申二月五日、大守齊興御成、御進上物、御茶錫一ツ六百目入、御菓板折一ツ、御輪島物板料二重、御斉服金千疋、御酒一荷、安政四年（一八五七）丁巳十二月十九日、大守齊彬公の思召により、自己の出銭で以て国分内野銅山の取仕立方を仰付らる。有難く御請申上、安政五年（一八五八）戊午正月より入山、万延元年（一八六〇）庚申九月より御移り申上げ午六月より申九月迄十四度取得、銅の正真吹銅四万八千石八十四斤六合九勺上納致し候。安政七年（一八六〇）庚申正月三日、地頭島津相馬様より大番頭座に於て、郷士年寄助和田甚五兵衛代より本役相勤仰られ候。此代より本役相勤候処慶応三年（一八六七）丁卯七月十二日、役儀御免。文久三年（一八六三）癸亥五月二十五日帰国。同四月九日、国父中将公御輿で御成、同七日、英国人倒死、同二日前の浜戦争、幼少の為、代って出陣、〇〇九日帰国、同八月二日、島津淡路守御一泊、元治元年（一八六四）甲子五月六日、国父中将公御〇御成、慶応元年（一八六五）乙丑十二月、金四〇〇両、御代目の上、同十二月十二日、盛順にて佐土原〇入一泊。同年卯十月十八日、淡路守殿一泊。同四年正月二十七日、金三〇両御金納。明治二年、銅山万機仰付らる。同三年正月、所軍役方江一万七千貫文合力。四五〇〇貫

文、学校江書物取入代以千五貫文、右以合候。――政徳（猪八郎、母右に同じ）

藩主	献納品名	数量	摘要
重豪公	米	三〇〇〇石	安永二年初代次兵衛政盛
"	銀	六〇貫	安永五年二代伊兵衛
"	銀	"	安永八年三代次右衛門
齊宣公	銀	六一貫	天明八歳より寛政元年迄
"	米	三二〇〇石	藩主国際入費補助として
"	金	四八〇〇両	大阪にて
"	銀	二〇貫	文化十四年藩財政難洪のため
齊興公	金	一〇〇〇両	江戸城本丸焼失、諸藩手伝
"	金	七〇〇両	藩主の命で製鍊のもの
齊彬公	銅	四八一八四斤	慶応元年
忠義公	金	四〇〇両	慶応四年
"	金	三〇両	一般に風水害・火災・疫病・厄難救済はもとより窮民救助のため私財奉仕の状況は左の通りである。
重豪公	白米	五石五斗三升	安永八年福山村南園大火人命救助
"	銭	六十六貫文	安永八年十月、桜島噴火、罹災民・島民・牛根郷救助
"	白米	四〇石	安永八年米価騰貴飢餓民救助
"	白米	三斗五升	安永九年正月より同十年七月迄暴風雨襲来につき救助
"	白米	五石三斗四升	

重豪公	白米	六貫七〇〇文	天明三年春より夏迄困窮者を救助
"	白米	十五石	天明四年夏、天然痘流行
"	白米	二斗七升	天明四年七月、孟蘭盆に祖先祭のできがたい者へ
"	白米	一貫四〇〇文	近年凶慌難済者救済
"	白米	十石一斗八升	寛政十年火災救助
"	白米	八十一石五斗六升	天保十五年福山困窮者へ農馬と農具給与
"	白米	十石四升	明治八年福山波止場修築費
齊興公	白米	百十七貫六十文	寄附
錢	錢	三〇円	明治十一年小学校建設費へ寄附
錢	錢	五〇円	明治十三年新島漂着者救助費へ寄附
錢	錢	二円	明治十四年六月、コレラ予防費として寄附
錢	錢	五円	

。横山氏系図 ※北家藤原姓（抄）

忠久公の御供下向、建久三年六月一日、薩州山門院下着畢。

鹿島より鹿の背中に乗りて大和なる、三笠の山に浮雲の宮。

若宮八幡 天押雲命 山城国、春日神社 天児屋根命 大和

国。鹿島神社 武甕槌神、経津主神 常陸国、大織冠鎌足

横山天氣院義高

義解而尋横山家之古譜、建久三年壬子（一一九二）六月一

日、忠久公薩摩守護職蒙_二宣任_一御下国之折、致_二供奉_一山門院下着而称及滞転而後移_二住鹿兒島_一哉。其後横山家代々山伏之家已至_二数代_一。盲_二目生来_一生来而、成把神盲僧、雖_レ然兼備本姓修驗山伏道而本尊奉_三安置_二役行者_一。成_二桜島地神家督_一、其後移_二転福山_一、家督勤之雖_二盲僧_一、本姓山伏而壇林修寺希妙色仮名云_二天上院_一然処、福山居住之折、南方面歴之嗚呼痛哉、盲僧故踏迷道路、高隈山数日迷_二廻山中_一、不_レ得_レ出、現世名残、吟_二琵琶_一、忽然而從_二空中_一、望_二葉遍_一、則鳴糸仏神垂_二憐憫_一給。直彼盲僧猿乘狼遠山遙、道路無障列下高隈之色無何行去去里人之猿狼乘座聞列表其時漸知猿狼変因茲後福山廻狼神社垂跡春日稻荷一字勸請之宮造給、且天氣院以前、世遠細事不詳。不期明開而為天氣院中興元祖、撰_二系図_一一卷求_レ可為_二後代_一、廻・肝付合戦參可、享祿（一五二八）年間桜島住、福山小河院住、慶長三年国分清水住_ス。

本願天上院子孫無怠可奉山宗歌者也。高隈山迷_レ路以後一

往福山居住其頃歟。文祿年間（一五九二）朝鮮御渡海御座船

出来_二付、敷根門倉薬師山_{ヨリ}船材木伐方之处、大蛇出_テ彼木

卷之其外生類数多出_テ色々不思議大變有_レ之、柚子共彼_二山_一

踏_二入_レ得_レ伐_レ木_一之旨達_二上聞_一、大守龍伯公_{ヨリ}修驗之

密法_ヲ以_テ彼山船材木鎮方祈禱蒙_二上意_一、則奉修鞭供_{並_二利}

劍法有_二感應_一、忽異類立退變難鎖材木取下有之薬師丸御船

出。一、御劍 二本 長八寸 一、兵法鞭矢 一具 一、錫

杖 二振 一、直鎗 一本。

右之品就祈禱用供被遊御寄附者也。仍而品物為宝物格護仕可伝子孫者也。但御劔一本、錫杖一振、盲僧家督格護也。天氣院義高より四代目儀住、元禄十二年（一六九九）乙卯二月末より享保元年（一七一六）丙申五月四日、山伏成。地頭横目役並ニ組頭相勤、元文元年（一七三六）丙辰三月別立免許、明和七年（一七七〇）庚寅八月二十八日死、權大僧都法印大越家儀住、天明四年（一七八四）甲辰十月二十三日、天上院義高より九代目儀板氏、天保十五年（一八四四）甲辰十月二十五日生、文久三年（一八六三）癸亥、鹿兒島軍出兵、元治元年（一八六四）甲子、長州征伐出兵、明治二年（一八六九）己巳十月常備兵。十代儀吉、天保六年（一八三五）乙未十月十八日、文久三年（一八六三）癸亥七月、英艦渡来出軍、元治元年（一八六四）甲子十一月、長州籠城ニ付豊前小倉ニ出陣、明治元年（一八六八）戊辰八月、東国奥州追討出兵相勤ス。福山小廻小河原院 横山家系図（小河院と小河原門混同）

。敷根氏系図 ※土岐氏 本領敷根（抄）

源頼光嫡男頼国六男 源国房—光国—光信—光基—光衡—光行—光貞（光行七男）—義時—義基—重基（土岐源内 義基四男）—久基—安基国房（四郎左衛門 賜敷根 後有レ故 走ニ球磨）—頼房（賢太郎婦「古郷」再賜「敷根」）—頼義—義忠—頼忠—忠

賢—重基—基経—貞山—頼次—頼重—頼愛—頼賀（敷根中務少輔 転「敷根」 賜ニ田ノ上城、土岐四郎左衛門尉国房十三代ノ孫）—頼兼（備中守）—頼元（藤左衛門朝鮮歸陣 舟覆死ス）—立頼（中務大輔 賜ニ市成「島津図書頭忠長三男」）—久頼（筑前守御家老光久公賜ニ島津之姓久之字）—久達（市十郎母家久二女 賜庶子敷根氏ヲ号）—久輔—主水—久福（仁十郎主水実ハ綱貴公九男 久輔為聲養子）—久有—右膳—久芳（仁十郎若年寄実ハ仁之介嫡子）—久明
※市成家 本領敷根 元祖土岐四郎左衛門国房元暦元年（一八四四）、賜大隅小河院敷根、後有故住ニ球磨、二代太郎頼房ノ代婦古領敷根、十四代中務大輔頼賀代 文禄四年（一五九五）乙未 去敷根賜田上ノ城（垂水）、十七代中務少輔立頼代慶長四年（一五九九）己亥ニ高隈、同十九年（一六一四）甲寅、転ニ高隈 賜ニ市成ニ以来世々領之。源頼光ノ苗裔土岐左衛門尉光信末流、土岐四郎左衛門尉国房十三代ノ孫 頼賀云云、敷根氏と同一である。

。菊地氏岡本家系図 ※（抄）

政則、菊地兵庫頭左近太夫 九州探題トシテ 肥後国下着、末葉号岡本氏、一姓菊地・福本・永里等也、右岡本家系図雖伝于家文書並ニ武具等、類火ニテ焼失ス、仍而古譜ヲ記、卷頭顯先祖之由来然共也。遠年隔主膳以前数代不詳也。主膳正讃岐守ヲ為ニ先祖一綴之為後代之龜鑑者也。千時明和六（一七六九）

己丑天臘月吉辰隅州清水住万膳氏弘好記之

隅州曾於郡住 岡本主膳正秀次（早死之故弟讃岐守家督ヲ相続也。

此子孫清水川原村ニ居住）——岡本讃岐守秀嗣（慶長十六（一六一一）

辛亥二月二十日太守龍伯公ニ殉死御供 進歩要精居士 法号 太守修理

太夫義久入道龍伯公 慶長十六年辛亥正月二十一日、於国分御城被レ遊

逝去、同二月二十日、於福昌寺葬礼十五人御供之人数二十日朝七ツ時分

於福昌寺前ノ田^テ切腹致御供也、——同氏大炊左衛門秀次（末吉ニ居住

子孫アリ）——岡本帶刀長秀次（元龜二年（一五七二）辛未誕生後改名

岐右衛門、寛永十一年（一六三四）甲戌年七月二十五日 葬城ノ岡、法

号 秋山芳月信士）——同氏与右衛門尉秀次（寛永五年（一六二八）

戊辰 地頭山田民部少輔殿代野元左近將監為養子 野元^之家ヲ連紡也）——

秀房（天和元年（一六八一）辛酉二月朔日 葬 轟ノ上、梅寛花榮

居士 法号、太刀高隈物二尺六寸宝刀、脇差右同 一尺五寸 右同、高

十二石七斗三升五合三勺重格護、右為軍役用伝子子孫者也）——秀応（正

保元年（一六四四）甲申十月十八日、葬 轟ノ上、真宗翁念居士 法

号、鎗一本永之為軍役用伝子子孫、※一七二三年の飯富神社脇社宝殿造

立の折、永慶寺の代表者格として記名あり）——兼高（与左衛門尉始秀

宜、母末吉士前原〇〇、鎧一両、鉄砲二挺永之伝子子孫）※後世の作製

らしく用語、記載型式に疑点が多い）

。井ノ口氏系図 ※（南家藤原伊東之末裔）

氏神 春日大明神 天兒屋根命 和州三笠山、平岡大明神

河内国河内、若宮八幡大菩薩 天御中主命 山城国、幕紋

月ニ星ノ九曜、家之字 祐、鎌足大織冠：武智麻呂（南家、藤

原・伊東・工藤・曾我・相良ノ祖）：乙麻呂——是公——雄友：時理

——維景（狩野）：…二代略：△家次——祐次——※祐経（工藤）△家次——祐

家——祐近（伊東二郎）——祐道（泰）（河津三郎）——祐成（曾我十郎、

兄）時宗（弟・曾我五郎、祐成五歳の時、父祐泰が工藤祐経（武者

所）に討たる。父死後母再縁して曾我姓にかわる。祐成二〇歳の時、

建久四年（一一九三）富士野の狩場で弟時宗と父の仇を討つ、仁田忠

常に討ちとらる。※祐経——祐時（大和守）：…四代略）：祐重——〇

（虎宛刃丸、伊東元祖（日州下向 此末ガ井尻、井ノ口ト分レル）

元祖井ノ口帶刀守清（龍伯公（義久・妙谷寺殿）御代ニ狩屋江御

番トシテ被召移也。七十六歳死去 葬狩谷、法名鳳屋道順上座）——祐守

（井ノ口喜之助入道瑚（祖父八木治部左衛門古之伊集院右衛門大夫ニ相

附 致三奉公、其後慶長六年（一六〇一）辛丑 福山地頭山田民部少

輔殿代 帶刀養子罷成 治五右衛門ノ名ヲ賜ハル 右喜之助ニ改ム、七十

五歳死去、法名順岳宗虎居士、寛文三年（一六六三）癸卯、知行高五

石、山田理安老、伊集院抱節署判 井ノ口帶刀宛ノ知行目録一通、知

行高五石、比志島紀伊守、三原諸右衛門尉、伊勢兵部少輔、町田勝兵

衛尉、御書判目録 一通、右之二通嫡流方（格護スル也）——祐次（次右

衛門、飯牟礼友兵衛養子）——祐次（孫兵衛、轟木家養子）——△祐友

（法名 心屋良忠居士、戸左衛門別家部ヲ立ツ）祐詠（次五右衛門）——

祐衛（伝右衛門 物主役相勤）——〇——祐又（喜三右衛門、母井ノ口吉

兵衛ノ娘）——祐倫（源四郎、山本藤七兵衛嫡子為髻養子連続也）——祐陳（喜左衛門、地頭横目役勤番相勤）……祐真（祐陳ノ弟、高二石四斗余買地、妻岩崎甚兵衛ノ娘）——祐締（吉左衛門、横目勤番役相勤、寛政七年（一七九五）乙卯誕生、天保十三年（一八四二）壬寅九月十三日死去、年六十歳）——祐次（天保二年（一八三一）辛卯二月一日誕生、長姉ハ文政七年（一八二四）誕生、母ハ末吉郷松下助之丞ノ娘、次姉ハ文政九年（一八二六）誕生、母ハ福山郷士 ○脇佐右衛門ノ娘、末吉郷士前原市郎次ノ妻ニナル）

△祐友ニ弟二人アリ祐域、祐運（喜左衛門 別家部立、法名心屋宗安居士）——祐域（法名大今自鑑居士、持高二石九斗余買地）——祐永（吉兵衛、法名積室宗学上座）——○祐訓（久左衛門地頭横目並ニ横目役相勤、法名覺当了前居士、安永六年（一七七七）丁酉八月六日死去）、祐以（祐運ノ子、戸右衛門、別家部ヲ立ツ。兄ノ祐位（慶左衛門）——祐薰（篠原家ヨリ養子）——祐右（山元源衛門二男、為髻養子連続）——祐園（五左衛門）——祐次（戸太夫）——祐次（兄弟三人ノ母ハ角伝兵衛ノ娘）——祐次（母 遠山孝次郎ノ娘、五郎太。○祐訓——祐純（次郎左衛門別家部ヲ立ツ、高一石六斗余買地）（祐貞、祐純ノ兄ニ当ル、母ハ同ジク恒吉郷野神ノ神田半兵衛ノ娘、徳右衛門 行司役・物主役相勤、安永七年（一七七八）戊戌七月十四日死去。法名万山円係居士。五石三斗五升余買地）——祐速（以下省略）

。轟木家系図 ※藤原北家

一、氏神、春日大明神、若宮八幡、阿蘇大明神、一、近衛末裔菊池小名轟木、鎌足——房前——真楯——内麻呂——冬嗣——良房——基経——師輔——兼家——道隆——隆家——経輔——政則（対馬守）——則隆（菊池左近將監九州探題後菊池国菊池郡下着 于時延久二年（一〇七〇）——政隆（西郷）——隆基（山崎）——隆秀（奥松）——隆房（肥田木祖）……原秀……（六代略）……親秀（隅州曾於郡下小川院廻住人、横目役被仰）——轟木経右衛門秀濟……（五代略）……政次（孫右衛門）——政次（権四郎）——政次（権四郎弟家 轟木鉄藏ヨリ養子トシテ本家ニ入ル、権四郎弟毛井ノ口伝右衛門ノ養子ニ行ク）（以下略）

。黒原氏系図 ※藤原北家故ニ轟木系図の則隆迄同じ

則隆 西郷太良 山崎太良（此一姓西郷、小鳥、山崎、村田、蒲生、警固、兵藤、合志、廻、迫田、長野、八代、庁角、堀川、赤星、若宮、小野崎、林、黒田、黒原、黒木、藤田、釜田、伊蘇、城、池田、長瀬、重富、菊池、奥松、真幸、轟木、築地、鷺川、青山、米良、肥田木、須木、名鷺、平野中竹、小川、寒川、曾山、鷺巢、木 本野、浅野、二木、一木、蘭木等也。（此間中絶）黒原筑後守重陳——羽右衛門重長（実ハ上田千左衛門二男猶子ニナル）——種左衛門重治（実ハ古藤式部二男為猶子）——重住（黒原勘兵衛、改則宗、重住改メテ則宗事、重ノ字ハ當時用名乗事御禁止之故、菊池ノ元祖菊池左近將監則隆ノ則以今用之後來御免時者、元ノ重ノ字可名乗乎）——則増（黒原新太良（他

三示現流允許狀、享保六年（一七二一）辛丑十月十八日、東郷藤兵衛重位、黒原勘兵衛宛の文書（以下省略）

。二川氏系図

宗綱（肥前守。弟・広綱、駿河守、大崎山下家ノ祖。弟・兼綱、左兵衛尉、牛根二川家祖）——△宗義（兵庫三郎）——信義（兵庫太郎）——義氏（兵庫藏人）——親義（大和前司。弟・覚阿）——親秀（備後前司。弟・覚栄。弟・義秀、大和次郎左衛門）——親資（備後左衛門尉）——半明（法眼。弟・良能。弟・良意。弟・良證）——賴氏（源左衛門。弟・源有。弟・賴義）——賴重（二川壱岐守。弟・賴元、二川石見守。弟・賴信。弟・賴親、二川治部左衛門。弟・賴安。弟・賴祐）——賴秀（二川六弥太）——賴行（弟・賴次）——賴次——賴明（二川伝右衛門。弟・※賴員、二川六右衛門）——賴信——賴堯（二川伝兵衛）——賴宥（弟・賴国、二川監物。弟・賴兼）——賴角（二川伝兵衛——賴長（二川五次右衛門、安永六年十月）。△宗義（兵庫三郎）——景義（兵庫次郎、進士左衛門尉）——義定（兵庫太郎。弟・景村、兵庫親太郎）——阿崎——親成（弟・親名、薩摩国別府住。弟・良快。弟・覚意、台明寺住。弟・源次。弟・義親。弟・義成、六郎。弟・良栄、出家覚阿）——兼義（大和左衛門尉。弟・義綱、次郎。弟・兼親。弟・成綱、九郎。弟・兼義、十郎）——政義（兵庫太郎）——政久（大和守。弟・親久、伊豆守）——政友（兵庫助）——元政（豊後守）。※賴員（二川六右衛門）——賴秀（二川源左衛門）——賴庸（弟・重賴、三十郎、長浜家ニ着子トナル。弟・賴弘）。

他に養和元年（一一八一）辛丑二月吉日、肥前守宗綱花押の文書写巻通（以仁王拳兵、敗死・敗走、隠匿、助命、配流、下向についての記録）。

氏神、石清水正八幡宮、杵築川上大明神、平野大明神。延享二年（一七四五）乙丑九月四日、政常書之。同九月五日、大崎、山下泰宝院、二川五次右衛門殿。右書付古見得兼故書記ノ有也、安永六年（一七七七）丁酉十月二十八日写之。

。松下氏庶流系図

藤原姓伊集院氏支族。

忠時

三郎兵衛尉、左兵衛尉、初ハ忠義大隅守。
建仁二年壬戌誕生、母昌山二郎重忠息女也。
文永九年壬申四月十日卒、七十一歳、法名道仏、号仁阿彌陀仏一、淨光明寺殿。

忠綱

号二越前島津一、知覧宇宿元祖也。

忠直

三郎左衛門尉、宮里ノ元祖也。

女子

女子

忠繼

号二山田一、式部少輔、他腹。

久経

初久時修理亮、下野守。

嘉録元年乙酉誕生、弘安七年甲申四月廿一日卒、六十歳、法名道忍、号ニ義阿彌陀仏一、淨光明寺殿。

高久

号二中沼一大炊助、他腹、法諱教仏。

<p>忠康 式部太輔、他腹断絶。</p>	<p>忠佐 左衛門尉断絶</p>	<p>久時 号二阿蘇谷一大炊助、依二謀叛一断絶。</p>	<p>忠経 五郎常陸守 大守久経公御同腹。</p>	<p>久氏 七郎早世断絶。</p>	<p>女子 三浦四郎家村室後為レ尼、名二忍覚一。</p>	<p>宗長 号二給黎一、彦三郎左衛門尉、左京亮他腹</p>	<p>忠継 三郎兵衛尉断絶。</p>	<p>忠光 号二町田一、五郎太郎他腹 ——實氏——助久</p>	<p>俊忠 初ハ侍從房聖家也。還俗而繼二忠経之統一也。</p>	<p>久兼 号二伊集院一、彌五郎図書館。 法号一以道貫庵主</p>	<p>忠親 助三郎、内藏人頭。法名道助 文永三年丙寅筑前国異国蒙古渡レ海寄來時日本諸軍勢 会來忠親大十文字ノ大刀、蒙古大將打留、得レ首、 是以蒙古方悉帰二船于異国矣。拳二名於天下一也。 忠親威勇不レ可勝計云云</p>	<p>忠国 内藏人頭、長門守、息子男女四十八人、本腹十二人。</p>
--------------------------	----------------------	----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------	----------------------------------	-----------------------------------	------------------------	---	-------------------------------------	---	--	--

<p>建長二年庚戌十二月十三日誕生。此時伊集院入部也。 元享二年壬戌十月十日卒。七十三。法号無等道忍庵主 妙円寺殿</p>	<p>忠充 号二石原一、二郎三郎。</p>	<p>久實 号二門貫三郎左衛門尉。</p>	<p>道珍 号二今村一右衛門尉、他腹。</p>	<p>女子 觀尤大姉、山田室。</p>	<p>忠貞 号二猪鹿倉一、他腹也。</p>	<p>久氏 大隅守。鎮西探題、今川伊豫入道、有三所卑之狀一日。 黨參尤神妙也、彌可致忠節之狀如件 今川伊豫入道了俊 沙彌書判 応安八年三月廿八日 島津大隅守殿 参</p>	<p>久影 此外忠節之至不可称計者也 法号大道觀了庵主妙円寺殿</p>	<p>義久 号二日置一美作守法名興山、古垣、春成、福山、出二於是ヨリ</p>	<p>忠秀 号二麦生田一兵庫頭有屋田、出二於是ヨリ</p>	<p>南仲和尚 廣濟寺開山</p>	<p>俊久 号二黑葛原一伊豫守</p>	<p>忠治 信濃守断絶</p>	<p>久俊 号二今給黎一長門守</p>
---	---------------------------	---------------------------	-----------------------------	-------------------------	---------------------------	---	---	--	-----------------------------------	-----------------------	-------------------------	---------------------	-------------------------

女子

敬外欽公大姉
大守氏久公御簾中、元久公之御母堂也

久春

号東筑前守

石屋真梁大和尚

福昌寺開山

貞和元年乙酉七月十七日誕生

延文五年庚子十六歲出家

応永元年甲戌四十九歲之時、福昌寺建此時太守

元久公也

同三十年癸卯五月十一日、於丹波国永沢寺遷化七十九歲也

女子

鮫島某室、他腹

忠治

号二舌俊一備前守他腹

三阿彌

他腹

久光

号二主橋一大和守他腹

久義

号二富松一相模守他腹

為吉

号二四本一伊豫守他腹

久教

初忠照讃岐守他腹

女子

正語上座、円通庵住持

景祐

一郎三郎他腹

景久

号二入佐三郎五郎他腹

頼久

内藏人頭彈正大弼

太守氏久公之為レ聲故致二其身一、以尽二忠節於常

契約

右之意趣者雖為天下転變於私大事之時者身之大綱存相互見
統被見統可申候此条偽申候者日本国中大小神祇殊八幡大菩
薩誦方(訪)上下大明神御符於身可罷蒙候
応永六年十二月三十日
此外忠功之至異二于衆人一矣
彈正少弼頼久書判

法号大用道応庵主延慶寺殿

久勝

大田伊豫守

忠氏

南郷遠江守

忠兼

初久兼松下治部左衛
門尉大隅守法名了永

忠政

初久員助左衛門尉

久景

初久紀大隅守

法久

四郎兵衛尉初久近又佐久松下治部左衛門尉大隅守
常陸守法名宗円

久嘉

助五郎

久昌

久平

助七郎

江左衛門尉

久友

助左衛門尉法名道清

女子

久以

助五郎

久武

助三郎

久澄

助右衛門尉但馬守

法諱道円

久栄

助二郎

久次

助三郎

久宣

主殿助

五郎左衛門尉

日州穆佐討死

久治

五郎左衛門尉

久矩

主殿助

久安

内藏允

久次
式部少輔
伊賀守
久次
中務少輔
久為
信濃守

久孝

刑部少輔越中守、日州清武城居住
天正十五年丁亥三月十五日、於二豐後一戰死、法名古巖宗源居士

久明

左近將監、母椎原彦左衛門尉秀時女
五月十五日死、法名才安淨知上座

久宣

平菊善藏内膳正淡路守
天正九年辛巳四月八日誕生、母同
寛文七年丁未十月廿四日死享年八十七
法名悦山了昭居士

女子

平田九郎左衛門尉勝宗妻、母同

女子

指宿清左衛門尉忠政妻、母同

久旧

清兵衛尉刑部少輔、母八川越九郎重林女
延宝四年丙辰八月十八日死、享年八十四、
法名清峯寿心居士

久通

仲右衛門、母同
延宝七年己未十二月廿九日死ス法名通屋宅円

上田七畝

八斗四升

八郎左衛門

森の出八七十二分内

中畠四畝六分

二斗五升二合

肥前

大坪二段八七七分内佳例川北口付内二番

上田三畝廿五歩 四斗六升 舎人佐

堂うた 右同

下田三畝廿四歩 三斗四合 甚三郎

とうへ廿八町之内右同名村内

山畑二段四畝六歩 八斗四升七合七夕 金介

出わな二段八畝之内財部坂出村之内上ノ村

上田五畝九歩 八斗四升八合 宮内兵衛門

渡り口 右同川畑村之内下ノ校

下畠一段二畝 四斗八升 源五左衛門

同所 右同

下畠一段四畝廿歩 五斗八升七合 大炊助

野久尾原 右同

山畑七畝十四歩 二斗二升四合 彌三郎

合五石二合七勺

右知行庄内弓箭之刻増目為移置被宛行者也

慶長六年

山田越前入

八月廿五日

理安印

伊集院下野守

抱節印

松下善藏殿

知行目録

隅州曾於郡之内福山村

高五石三斗六升一合四勺

浮免

おとしセ町十九

右同

右 同 佳例川村

高三石五斗三升八合六勺

右同

下田七畝十八歩

六升一合蒔

右 同 住吉村

高一石一斗

右同

道ノ下セ町一ツ

右同

合十石

下田十歩

三合蒔

主水佐

右之知行応此中之公役高被宛行者也

比志島紀伊守

山屋

山畑十二歩

三合蒔

刑部左衛門

慶長十九年八月三日

国 貞印

伊勢兵衛少輔

田之上

右同

貞 昌印

山畑二畝

一升二合蒔

同 人

三原諸右衛門尉

貞 種

同所

大豆五升六合

町田勝兵衛尉

久 幸

山畑一畝六歩

一升蒔

彌左衛門

松下内膳正殿

山屋

かりやノ内

山畑一畝十歩

一升一合蒔

加

高五石三斗八升

一、佳例川之内浮免

堂田セ町廿三

長里村之内

中田六畝

四升八合蒔

彌 介

一住吉名之内浮免

糶五俵

つかノ内二反六畝ノ内刻合

鎌田

中畠一反二畝廿四步 一升二合蒔

玄蕃他

大豆三俵一斗五合

高三石一斗

粃大豆

惣合三々俵

高十石

慶長十九年八月三日

山田民部少輔○印

松下内膳正殿

一、越中守久孝子四人有嫡子松下左近將監久明二男松下淡路

守久宜二人候、女子母椎原彦左衛門女子ニテ兄弟四人同腹

一、左近將監久明子松下清兵衛久旧子松下三郎左衛門子松下

善左衛門子清左衛門久恭子松下清兵衛久寿福山江居住

一、女子平田九郎左衛門勝宗妻ニ成右九郎左衛門親太郎左衛

門増宗事入来院城主ニテ候處、忠棟入道幸侃逆心為一味之儀

ニテ入来院ノ内、土瀬戸ニテ被仰己手。其後九郎左衛門淡路

守兄弟ヲ移福山江居住之事九郎左衛門勝宗子孫鹿兒島江居住。

一、女子指宿清左衛門忠政妻子孫鹿兒島江居住。

久宣

松下淡路守初正菊善藏内膳正

一、天正九年辛巳四月八日、日州清武生、

一、幼年ニテ左近淡路移兄弟州立薩州吉田○居○地頭本田下

野守殿代伊勢深八殿代迄御奉公申候慶長四年ニ隅州市成江
兄弟同前被召移御奉公。兄左近ハ境目主取被仰付候。

一、慶長四年己亥六月隅州恒吉之城攻ニ兄弟罷立候節御褒美

之切紙被下候。城主伊集院宗左衛門と申す人を始め、敗亡

して城中の軍兵城を棄てて都之城へ逃退其時守護方之大將

島津図書頭忠長、樺山種左衛門久高夫より隅州末吉之城攻

鉄砲取合にて城中軍兵余多討死從甚為庄内役建名声候。

一、慶長六年辛丑隅州福山江可罷移由、理安老より承候付御

地頭山田民部少輔殿代々兄弟同前ニ罷移兄左近持境目主取

被仰付候、兄弟共ニ境目移重ネテ知行御目錄同年ニ給候。

一、同十九年知行御目錄給候事

一、山田民部少輔殿下大隅江御竿入之儀ニ付御越之節附役ニテ

罷越首尾好相勤其時御用

大守陸奥守貴久公御代左衛門尉義久公御代、前名刑部少輔松

下越中守久孝

一、隅州○ニ居住ニテ御奉公相勤隅州帖佐蒲生両所之内ニ知

行被下候其節之御家老忠金・昌宗・經定・意釣・季久御目

録有之候

一、永祿四年辛酉年肝付河内守兼統謀叛隅州屯於族頭廻ニテ御

弓箭之節竹原山陣ニテ戰之時、越中守罷立候ニ付案内ハ隅州

敷根・上之段村之丹波案内者ニテ罷立、彼ノ丹波肝付方之

衆一人討取シニ付、彼丹波私名字之者ニテ敵一人討取候由披露申候ニ付、右丹波江松下名字を免候。家之字ハ孝と申す字ニテ候。松下丹後守其後福山ニテ知行高屋敷被下候。

一、天正八年日州清武之城江被召移、天正十五年迄居住彼地ニテ知行高加納名、熊野名、上別符名、魚居名之内被下其節之御家老光宗・忠棟目錄有之天正十五年丁亥秀吉公〇〇〇〇九州被下向時節三月十五日越中守戦死ス嫡子左近将監二男淡路守事薩州吉田之白根ニ罷越ヲ直ニ彼地江罷レトモ、御地頭

一、越中守嫡子左近将監久明二男正菊久宜女子二人、一人ハ平田九郎左衛門勝宗妻、一人ハ指宿清左衛門忠秋妻。

久孝

松下越中守刑部少輔

大守陸奥守貴久公御代、左衛門尉義久公御代御奉公仕候。

一、薩州〇〇〇〇居住ニテ御奉公相勤候。隅州帖佐・蒲生両所之内知行高御目錄御家老衆忠金・昌宗・経定・意釣・季久より給候。

一、永禄四辛酉年肝付河内守兼統謀叛逆心隅州曾於郡廻御弓箭竹原山陣取合之戦ニ罷立候節隅州曾於郡敷根・上之段丹後案内者ニテ候処彼之丹後肝付手之衆一人討取首を取候故越中守披露申候砌私名字之者仕候由申上其節彼丹波江松下

名字致免許候。家ノ字ハ孝ノ字を免候。松下丹波守其後庄内御弓箭之砌福山江被召移、慶長六年知行高被下候。子孫二家ニ分レ、福山之内佳例川江居住右松下名字者依軍功越中より免名字ニテ候。

一、日州清武御領内之時、天正八年清武之城江被召移知行高加納名、熊野名、上別府名、魚屋名、御目錄被下候。其節之御家老衆光宗・忠棟ニテ候。

一、天正十五年丁亥関白秀吉卿九州御発向之砌、〇〇〇〇同年三月十五日夜越中守事、豊後国清田之郷

一、義久公国分江被成御座候、御屋形御番組ニテ福山ヨリ御番相勤候。

一、江戸江御用物被仰付、船ニテ罷越首尾好帰帆候。

一、福山御牧別当役被仰付、数十年相勤候。

一、淡路守久宜子男女三人、五郎左衛門久粗、女子一人指宿九左衛門忠辰妻ト成、子孫福山ニ居住、内膳正早世子孫無之。母ハ久松源左衛門直為女ニテ、久松氏子孫清水ニ居住。

久粗

五郎左衛門

一、元和元年乙卯三月廿四日、隅州曾於郡福山生

一、寛永十四年丁丑、肥前島原鬼利支丹逆徒等籠城之節罷立、翌年福山江帰陣候。

一、福山野御牧別当役被仰付数十年相勤候^テ寛文十一年辛亥冬御改申上候。免被成候。

一、実名忠之字、久之字名乗候。人御礼ニ付御家御氏族伊集院家之名松下家ニテ代々両字名乗候段申出、無御構ニ付久之実名ニ用候。

一、承応元年御家佐改ニ付、伊集院源助殿ヨリ我々由緒申出被仰渡候ニ付祖父越中守久孝日州清武之城居住然処ニ軍勢攻来^テ落城之刻、系図目録熄矣。其證文・古目録等嫡流松下清兵衛久旧ヨリ差出、翌年松下清兵衛方^江系図相渡^リ候。

御家之系図ハ御記録所^江差上候处、数カ年被召置、清兵衛孫吉左衛門久矩代ニ被延給候。

五郎左衛門久粗^モ家之故右^ハ凡^ニ相濟候。

覚

高十五石〇七夕

右者慶長四年己亥六月隅州恒吉之城攻ニ先祖淡路守罷立候節御褒美之切紙被下慶長六年辛丑年并同九年甲辰知行御目録被如下奉頂戴仕居^リ候此段訖 以上

申十月六日

松下五郎兵衛

戸長衆

*明治五年壬申かとも考えられるが、この筆者（松下五郎兵衛の筆蹟が系図・坪付・目録以外の文章に見られる。

抹消・訂正が散見されるので、確度に注意。

。真部姓長正氏系図

夫長正氏者以真部為姓也、伝曰世世仕于平姓伊地知家所伝之系譜、嘗出^レ箭為烏有矣、回姓氏之原本未^レ知^ニ其所以^一也。今方所^レ存者武珍所^レ讓之證書一通而已、摺^ニ是書^一則吾家嫡派之証不^レ能^レ無^レ足惟世系之不^レ伝曰^ニ之不幸^一乎。吾嘆^ニ惜^一之^ニ甚矣^一。於^レ茲乎、書^ニ此数代之譜^一、以欲^レ補^ニ子孫之渴^一、庶幾繼^ニ吾志^一、繫^ニ子孫之連綿^一、而至^ニ于^一無^レ疆^一至祝々々。元禄十五年龍集壬午晚秋穀旦、不肖孫武敏敬志。

武尚

八郎右衛門

仕^ニ于^一下大隅本城之主伊地知縫殿助重周^ニ于^一時大永三年癸未十二月五日重周戰^ニ死^一日州月野^一、武尚從^レ焉。結^ニ子路之經^一矣。子孫数代在伊地知家。

伊豫守、為^ニ武尚之後嗣^一

女子

伊豫守

武尚戰死^シ、有^ニ一女^一無^レ男故^ニ

武附

左近允、武附者武尚之女嫁^ニ其家^一所^レ生之男也、依^レ之為^ニ嗣^一事詳于嫡子武珍所^レ書之置文。

武珍

織部助、道号松寿齡柏居士、

主君周防介重興賜^ニ長正家之家督^一也。後年有^ニ氏族論^一嫡庶者^ニ上^一時^ニ、主君縫殿助重昌入道蘆津縫殿助重順父子判^ニ断^一之^ニ當家之嫡統武珍如^レ元、其證書且^ニ武珍之置文并載^レ之。左近允長正之家ヲツギ候事等不私於月野^ニ縫殿助殿様打死^一之時

長正八良衛門尉御供ヲ申打死申候也。其時長正申様我ヲ不持男
子ヲ女子ヲ一人持候以此子ニ家ヲツカセ候ヘト申定、長正ヲ打死
申候ヘ共此者儀八郎衛門尉弟ニ家ヲツカセ候。其弟伊与守男子
ヲ不持候間、長正八郎衛門女子之腹ニ左近允出來候間伊与守如
本々御託申上候ヘハ、其時之地頭伊地知下野守致志ト云ワレテ召
成御談合、左近允長正之惣領に罷成、於子々孫々末代ニ左近允
一スチ長正惣領可為也。其時周防守殿様重興公以御分別、長正
之家ヲ左近允ニ被下以御分別、長正之家ヲ左近允ニ被下也。仍為
後代一筆如此候。

長正織部佐
真部 武珍（花押）

先知目重興様長正都督被下候、御相使ハ中馬三河守殿、高木
備中守殿此兩人之證特有
經數年之後長正名高中此事依由諍論已達上聽候、于時蘆公様、
重順様御父子以御談合如先頃猶々家督ヲ被成赦免候下。○
不 白麻候

代之為龜鏡也。褒貶之御裁判中馬狩野介殿御相使ハ伊地知新
介殿、中馬主計助殿此兩人可為候。○若末代モ此沙汰出來者
此狀以○○可宛不易者也御證文如件

中馬狩野介

重親花押

同名主計重時花押

伊新介

平氏重孝花押

長正織部助

武珍花押

于時天正辛卯季五月九日
監右衛門

移ニ居于百引一

武朗

織部善兵衛

元和三年丁巳四月廿八日誕生母千川氏女法諱長流玄慶大姉、
武珍無レ嗣故ニ為ニ養子一実ハ枝本源左衛門法号雲山常連居士嫡子
也。武朗始為ニ大守之臣一為ニ福山士一自是子孫在ニ福山一。天
和元年辛酉歲四月十八日死享年六十五、法号嘉屋慶余居士。

武敏

織部市右衛門

寛永十九年壬午四月廿八日誕生、母有馬軍助女
寛文四年甲辰奉ニ供侍從綱久公之高賀一、在ニ于武州芝郎一、八
月拜ニ賜學利支天影像。同十年庚戌扈從在ニ江戸一十月廿五
日綱久公於芝郎一使ニ十余輩射一、覽レ之、武敏列ニ射手一、忝
賜レ飲延宝三乙卯歲奉レ從ニ大守光久公一、勤ニ仕江府高輪邸一。
時光久公以ニ志和屋左京一、拜ニ領北斗御守一。武敏勤ニ福山暖
役一、回奉レ謁ニ太守綱貴公拾遺吉貴公一、數回。

女子

桐原藤右衛門妻。正保二年乙酉十二月十八日誕生、母同。

義亮

福寿休右衛門。慶安三年庚寅九月六日誕生、母同。

富田後藤養子。

女子

佐竹源左衛門妻、万治元年戊戌四月廿七日誕生、母同。

武明

市十郎、市郎左衛門、市左衛門。寛文十二年壬子五月十七日
誕生、母前田七右衛門女。武明元禄十四辛巳年奉供、大守綱
貴公江戸芝郎勤況奉謁綱貴公吉貴公數回。武明福山衆中組頭
方役勤下。于時正徳二年壬辰七月廿四日死去、享年四十
有一、法号證嶽了明居士

女子

平原清右衛門妻。延宝五年丁巳十一月廿日誕生、母同

武文

市三郎善右衛門

貞享元年甲子十一月廿九日、生母同、

武京

市之進、伊兵衛

元禄八年乙亥霜月廿九日誕生、母坂本右近女、

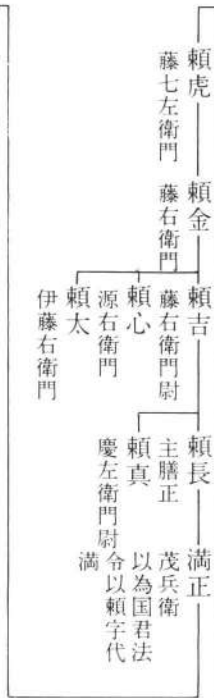
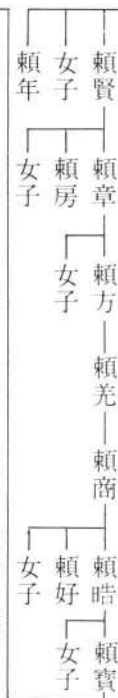
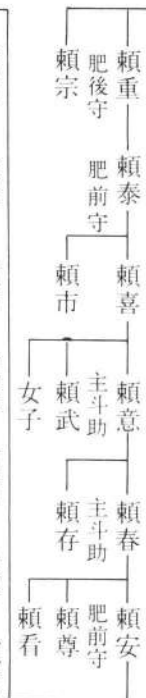
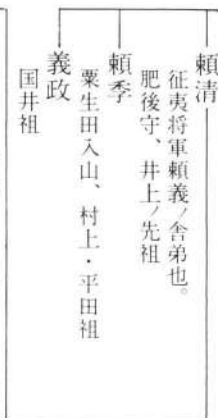
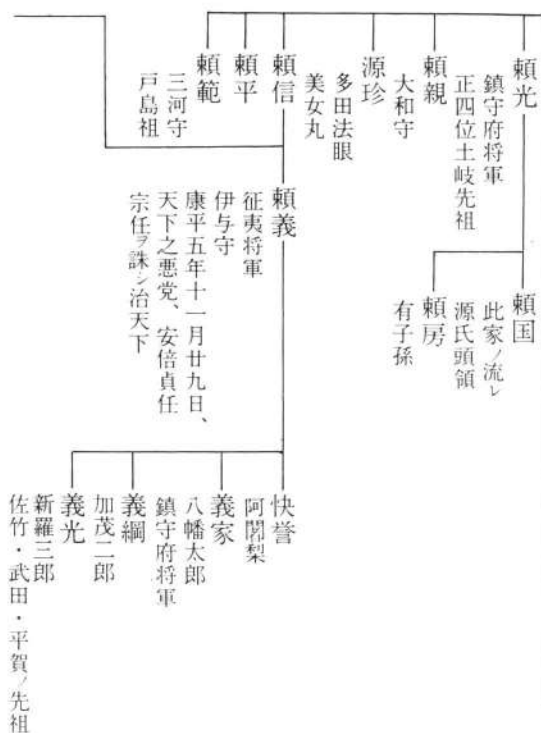
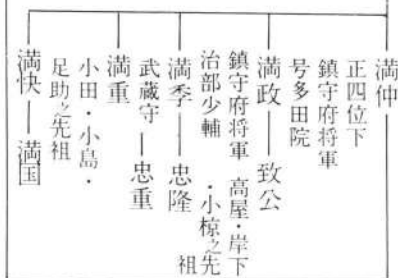
※廻城主の系譜が未発見であることが残念である。支流の
二川家（原本は大崎山下家）のみ現存、川畑家の系譜は
税所家・厚地家を確認できる史料である。

井上之系統図
湊門

清和源氏

清和天皇

貞元親王 兼忠
貞純親王 經基王
五月七日卒 始賜源氏
号桃園親王
鎮守府將軍
号六孫王



満清	喜左衛門、宝曆四年甲戌十一月廿九日卒、行年九十有余、玄道円心上座、妻者享保元申十月初四日死、空玄了心信女、
満方	女子
満子	女子
女子	女子

満房	小河原門名子増右衛門嫡女、澤右衛門後入道而号入道、為満清聲養子、安永九庚子十二月十三日没、行年七十五歳、法名正澤道安信士、小廻下代藏耕取勤、後名主勤
女子	為澤右衛門妻、宝曆九己卯六月廿八日没、行年五十五歳、法名貞實妙誓信女

満純	藤七左衛門、女伊勢、倅長吉、耕取二代勤、小廻御藏耕取勤、小廻・耕作取主名主、行年七十五歳死
満真	茂兵衛、直右衛門、澤右衛門、後入道、号寺澤、行年九十一歳、文化十三年丙子九月廿七日没、法号寿翁良全信士、妻者小廻村西門、圓右衛門女、松ト云、文化十二年三月五日没、行年八十四歳、法名貞玉樹珍信女、初勤小勤、柙方下役耕作主取、福山小廻御藏耕取勤、五か年首尾好相勤、福山御牧野下牧勤、多年此時ヨリ下牧相初マ、齡八十八歳ノ時、トカギ引、賀の宴、妻八十一歳、ノ時百六十八人計リノ客招待

女子	伊勢、文政三年庚辰八十七歳、達者然トモ三カ年計リ盲目、石原田門名子助吉ノ妻トナル、二男二女ヲ設ク
澤助	相続、筆道ヲ好ミ、算法ニ達ス、耕取名主
鶴	福山町竹之下、弥三次妻
方鶴	国分上井村、伝左衛妻
十助	助吉第十左衛門養子トナリ、田中名主附屬

満伴	養女、久里、美ヨシ、童名市之丞、喜左衛門改佐八、又改左衛門、号儀左衛門、母者西門之名頭圓右衛門女、宝曆二年壬申歳十月十二日生、始小廻下代御藏耕取ヲ勤ム、又多年名主ヲ勤ム、安永八年十月朔日、二十八歳之時桜島燃起、新ニ島海中ニ五出来、小廻浜津波度々来、町家ニツ、三ツ打崩サル妻者財部南俣村内帶野々權左衛門弟金右衛門娘、龜ト云ヒ幼時金右衛門病死故母福重門名頭善太江誘来嫁ル、依而善太養育嫁喜左衛門
満盤	自壯年迄老年及好鉄砲、庄内・都城・末吉・高城・勝岡（加久藤？）・山之口・財部・其外垂水・大始良・牛根・敷根・日当山・曾於郡・踊・国分・小浜・加治木、十五夜毎歳行、重富・市成・恒吉ニモ行ク。鉄砲五匁七分、正吉作、於諸所先爭勝負無際限。幼時所士中島市郎右衛門為師子、手習ニ行ク、死去後養子中島權右衛門、習筆算之ニ達ス。儀左衛門壯歳紙漉取、仕立所中用分漉為重寶。又水車並ニサコン太郎等ヲ仕立テ、日々飯粉ヲ白又掛樋ヲ造リ立テ而薪ノ勞ヲ替ヘ重宝トナス
女監	嘉平次又改仁八、宝曆九年九月廿五日生。妻者石原田門名頭助左衛門娘鶴。小廻宗廟産神大王大明神ノ下桐見廻ヲ始テ勤ム
女鶴	小廻村二間瀬門名子嘉左衛門妻
女鶴	小廻村塩屋園門名子喜兵衛弟新助妻設三男五女、嫡女兔毛（赤毛ノコトカ？）、啞、国分下井村長八妻、二女阿久里、小廻湊門名頭長藏弟市郎妻、三女毛知西門名子袈裟市妻、男龜助啞、次男藏助、女久良、女筆、三男德助啞
満堯	直八啞、安永六年西歳生
九八	童名嘉袈裟、母者石原田門名頭助右衛門娘鶴、享和三年五月十三日生、小河原儀左衛門無子故三子ニ申受テ、妻者湊門長藏女、冬、文化六年巳十月三日生

女、伊勢

今村門名頭與左衛門妻

女子、早世

満吉

長吉

女、伊勢

母敷根町、前田休右衛門女

全 前田吉助妻

女、八塩(ヤシオ)

国分本町、古江傳次郎妻

満村

澤市、十一歳時、早世

長蔵

妻、小廻松林門名頭源助女熊

市郎

妻者塩屋園名子新助女

澤次郎

妻敷根仲右衛門女

女、竿

小河原門名頭九八妻

女、冬袈裟

塩屋園門名子勇右衛門妻

女、磯

松林門名子源助妻

八三袈裟

後八十右衛門、妻小河原門名子増右衛門女直子ニ候(共、塩屋園名頭直助無子ニテ貫ウ妻安政六年十一月死、享年三十七歳、

後妻、佳例川、出水スエ(愛之助母)

八十右衛門、明治二十八年六月廿三日逝去、七十七歳法名釋

善嚴信士、※丁丑戦で政府軍艦砲撃により水車被災)スエ

大正七年二月廿日逝去、享年八十六歳、法名釋尼定岸

鉄太郎

後藤吉ト改名、妻田中門名頭十太郎子、十次郎妹

金袈裟

母他腹田中門名頭十助女、全門十次郎妻

佐吉

妻二間瀬門名子仙兵衛、三女アグリ

女、二輪

長蔵

女、雪

女、銀

女、毛利

女、八重

塩屋園門名子勇右衛門妻、初産二十一歳ニテ逝去

万延六年申九月十七日

女、枝

塩屋園門勇右衛門後妻、長命

女、仲

塩屋園袈裟熊(勇右衛門弟)ノ妻

女、熊

十二歳ニテ早世

女、梅

石原田若右衛門ニ嫁ス、長命

女、夏

田中善太郎妻早逝

女、竿

西猪次郎妻、西宗次郎

女、誠

母スエ、二間瀬袈裟太郎ニ嫁ス、国市・善太郎・誠市・久美、

枝ノ三男二女

愛之助

母スエ、明治六年出生、八十右衛門ノ一人息子、父五十五歳、

母四十一歳ノ時ノ子供。

明治、大正、昭和三代ニ亘リ、町役場吏員トシテ約五十年位、就

中、収入役トシテ二十余年間勤務、昭和二十六年、七十八歳テ退

職、明治二十一年、両親及姉一人ト共ニ現在ノ湊ノ住宅ニ転居、

従来湊ノ本宅、北隣リノ塩屋園宅、明治二十八年六月、父八十右

衛門没、愛之助二十二歳ノ時。

昭和三十三年八月十二日歿、享年八十五歳、法名釋惠證、生

来晩年ニ至ル迄焼酎ヲ嗜ム
妻セキ、石原田十助長女、昭和二十五年七月九日歿、
享年七十五歳、法名釋尼妙慶位
愛之助生存中ノ重大事件

明治十年 西南ノ役 明治二十七八年 日清戦争
明治三十七八年 日露戦争 大正三年一月十二日 桜
島大爆発 大正六七年 第一次世界大戦 昭和十二
年 日支事变 昭和十六年 大東亜戦争 昭和二十年
終戦（敗戦）
（愛之助ノ項ハ、慶譲起案及記入）

慶譲

明治二十九年八月三十日生、（履歴詳細別冊）
加治木中学（明治年間、中学は鹿児島県に五校タケ）
海軍兵学校ニ大正二年入学、以来三十年間海軍ニ在籍、昭和二
十年大東亜戦争終結、昭和二十一年七月、最後ノ勤務地上海ヨ
リ帰国後退役（五十歳）
退役時ノ位階勲等、正五位勲二等功四級海軍少将退役後、妻ト
共ニ福山ニ帰郷（両親尚健在中）
無子ニ付、慶季三男八郎養子トシテ入籍、妻、スミエ、福山小
廻広瀬嘉右衛門次女、大正十三年十月十日結婚（大阪ホテル
ニ於テ挙式）

慶季

明治三十二年出生、加治木中学、第七高等学校造士館、
東京帝国大学農芸化学科卒、
東京寺尾源次郎二女弘子ト結婚、寺尾家ノ婿養子トナル
（三男三女）

季展 和子（夭折）
有策 房子

八郎（慶譲ノ養子） 晶子
明治四十四年十月十八日逝去、享年七十歳

慶助

明治三十四年出生、加治木中学卒業
北海道庁土木技師トシ約四十年位勤務
函館ニ居住、妻千恵子トノ間三男三女
敦雄 桂子
徹 悦子
義人 喜美子

（以下省略、本系図ハ慶譲、昭和四十八年三筆写作成）

細山田家系図

平氏神
。加茂大明神 山城国 幕之紋 井桁梶ノ葉
。松尾大明神 同 国 定 紋 五ツ楮葉並細字
。巖島大明神 安芸国 重字代之用

桓武天皇：（十代略）：清盛——宗盛

清宗（平田・前田祖）

能宗（帖佐祖）

宗親（細山田・池袋・隈元祖）——重澄

号細山田修理

嘉禄元乙酉年隅州肝属下
向、其後依勤功肝属之内
一村ヲ領

重宗

組山田乗左衛門
肝付ヨリ同州曾於郡移

重經

細山田但馬
慶長年間曾於郡ヨリ廻ニ移ル
年月不詳

重真

細山田山之充

重連

細山田隱岐、為養子入

重元

細山田五兵衛、実ハ
大神次左衛門弟、延
宝之頃佳例川物主ヲ
勤トシ移ル

重仲

細山田藤彌、実ハ大神伴左衛門弟、
為養子入、系図ノ儀ハ重仲代及類火焼
損依之、細山田元祖重澄ヨリ重宗ニ至
ル迄数十代不詳、

重治（細山田分右衛門、数年勤諸役）

重近（細山田掃部、早死）

重雄（シゲスミ・細山田喜兵衛、重治子孫雖有、重陳ニ猶子相
続ス、末家替代ニ載事不得也、）

重陳（シゲノブ・細山田次右衛門、實ハ武石金左衛門ニ男、武石
次右衛門也。兄ハ武石彌次兵衛、細山田分右衛門重治子孫除多
雖有欲致麓居以重陳細山田家為連統猶子トシテ相統後号親清、
重之字代々雖用名乘重字、公義ニ可致遠慮旨就宣旨今改重ノ字、
細山田高祖清盛之三男右大將内大臣宗盛ノ三男宗親ヲ以テ為ニ元
祖、今改親字、寛延二己巳二月廿二日卒、行年四十二歳、法
名法圓寛海居士、当代ヨリ麓ニ居住ス。親詮（チカトシ
細山田五兵衛後武石弥次右衛門胤長改叔父武石彌次兵衛胤實
直子無之依之為養子幼育成人シテ後号胤清、壯年ヨリ老年ニ続キ
諸役勤、組頭役之内、卒七十歳、寛政九丁巳十二月十七日法
名梅仙竜明居士）

親成

細山田五右衛門
安永四年乙未六月廿九日卒、
三十九歳、法名大湖徳門居士
女子
二宮次右衛門妻

親經

（細山田直之進、幼名武
石弥藤次、安永六年丁酉八月
廿八日生、実ハ武石胤清二男
武石直之進也。母平原清右衛
門娘、叔父親成一子依無凡四
十一年断絶、文化十三年丙子
正月為猶子号親經、文化六年
己巳八月、郡見廻被仰付、年
数満在中就願、文化十三年丙
子七月勤重来已年ヨリ先キ寅年
迄二カ年被仰付、文政元戌寅
年又御郡方ヨリ勤重被仰付、来卯年ヨリ先未年迄五カ年可相勤苦候
得共年数三カ年満候節、二カ年之御證ニ可相成旨、御地頭伊勢雅
樂守殿ヨリ被仰付候。尤御郡奉行宮原五兵衛殿ヨリモ同断）

親賢

母ハ中尾民右衛門親偏、細山田八十二、幼名武石金吉、文化四年
丁卯六月四日生

。橋口家系図

橋口龍昌——橋口民部左衛門
於豊後国戦歿

同氏三左衛門
実ハ齊藤佐渡ノ男子、慶長
年中知行高八石拝領、智養
子、橋口家ヲ相統也

同氏伊佐衛門
男子（齊藤家ニ入ル）
女子（堀之内和泉ノ妻）
同氏藏之助
父ハ溝口佐助民部左衛門戦
歿以後、女房ニ溝口佐助後
家入而出生ノ男子也

同佐左衛門（母、時任市左衛門女）
同鶴右衛門（母同前、松岡家ニ入）
同三右衛門（母同前、別家部立御奉公、且賜屋敷）

橋口伊衛兵兼古
母財部松下彌左衛門女
女子
母同前、前田次兵衛妻
同氏伊右衛門
母同
正照
三左衛門
母、上田少兵衛女
女子
母同、山下氏妻

女子（財部、石塚権左衛門妻、
母津曲伝内女）
正之（之助、後佐左衛門ト
改、母同前）

橋口佐五右衛門——貞右衛門
同佐次右衛門
女子（末吉、岡留源太郎妻）
女子（谷山嘉右衛門妻、母前田金兵衛女）

兼敬（太郎左衛門、母同）
兼給（三兵衛、母同、別家部立）

兼能（善五郎、母大山伊兵衛女）
兼矩（太左衛門、母同）
女子（宮原清藏妻、母同）

兼恭（次郎左衛門、母愛場源五左衛門女）
兼記（伊兵衛、母同前）

女子（敷根河野早左衛門妻、母末吉紙屋清左衛門女）

兼方（次郎太小頭役ヲ相勤、母同）

兼次（太郎右衛門、母同）

兼長（善四郎行司役ヲ相勤、十一月八日誕生不詳、妻橋口次郎太女、慶応二丙寅十二月朔日死ス）

女子

女子（折田八左衛門妻）

兼次（次郎助、七月廿三日生、橋口次郎太二男為養子相続、母谷山嘉衛女）

兼次（善之進、四月四日生、文久二年壬戌六月、前ノ浜戦争、母谷山源左衛門女）

兼（次郎左衛門、二月五日生、母同）

兼（金次郎、七月生、母同）

壽子（慶応二丙寅四月十日生、母同）

兼（善右衛門、八月廿五日生、母松永伊左衛門女）

。和田家系図

（省略）

義政（采女正、元和五年三月廿日、七十二歳死去）

吉忠

良昌（彦五良）

良商（將監）

良泰（小太良、永禄十二年乙巳穆佐飢肥、欠字）

女子（三人）

義満（小兵衛、天正二十年壬辰（欠字）国大守少将忠恒様高麗（欠字）刻以自力罷（欠字）忠切、加治木ノ内（欠字）知行高三（欠字）正保三（欠字）
女子（二人）

女子（薩州、鹿児島住、稲津源左衛門妻）

義政（小兵衛、早逝）

義真（改義源甚三郎、寛永十六年己卯八月十二日、薩隅日（欠字）藤氏朝臣光久公（欠字）之時、福山御一宿致元服、御自筆蹟作兵衛ト御書付ヲ給之畢。其御自筆令頂戴（欠字）兄小兵衛依早逝連続（欠字）

義陳

義次（小兵衛、貞享五（欠字）福山地頭島津豊前、小篠八左衛門家跡）

女子（早死）

女子（鹿児島小浜平（欠字）

義（彌兵衛、寛文十二年（欠字）福山地頭本田六左衛門（欠字）鎌田市兵衛家跡（欠字）

。厚地家系図 ※氏不明苗字ノミ

薩隅日三州之御封ヲ受給建久七年八月一日薩摩江御下向也其後丹後局御下向致供奉薩州郡山江御下着而……以後市来氏領厚地村名字厚地ト改……系図紛失……島津彰久属垂水移リ世々諸役ヲ勤其末葉福山江移住ス元祖厚地庄右衛門以前伝不詳也……

隅州曾於郡小川院福山住元祖

厚地庄右衛門政成

石塔馬立坂有之法名不詳
厚元泰英居士

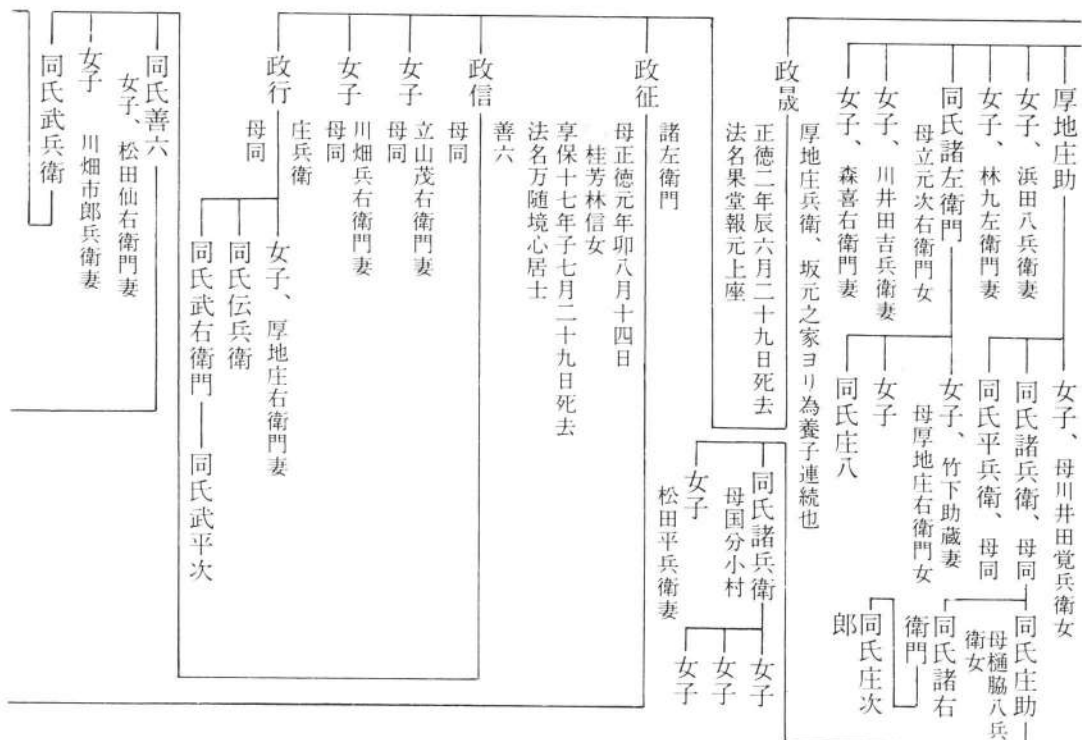
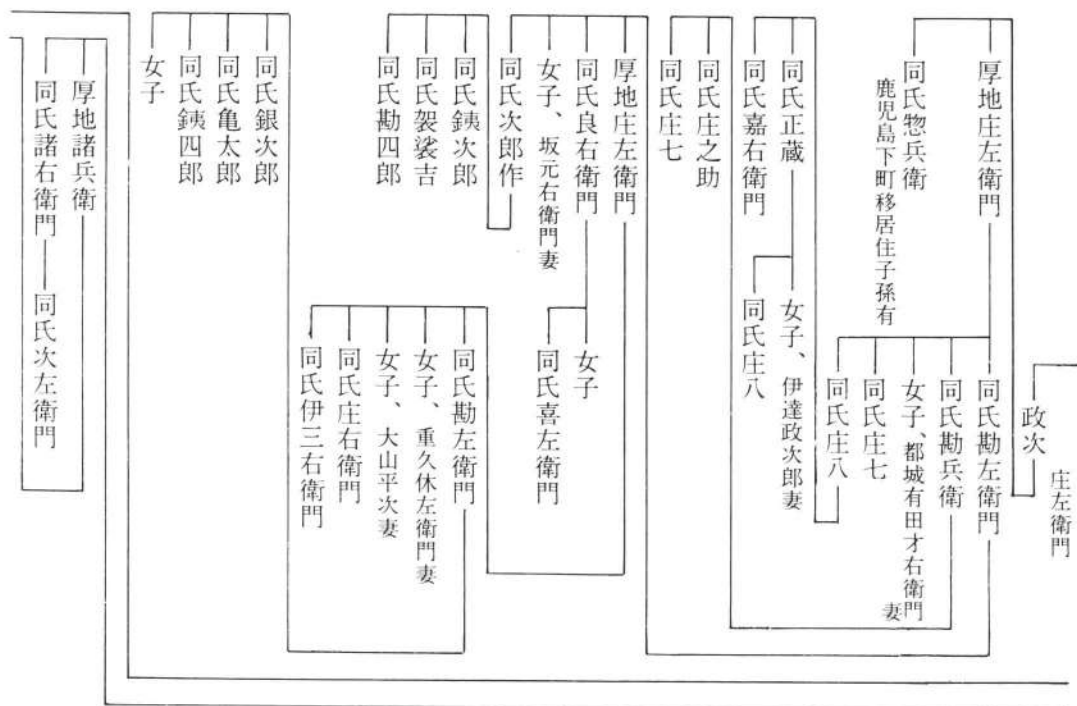
政継

政親

諸左衛門
母泰安妙慶大姉

次郎作

法名祥山榮吉信士



同氏武右衛門

女子

女子

同氏武左衛門

同氏庄次郎

同氏太郎右衛門

同氏幸右衛門

川井田休兵衛為養子

女子、川井田喜右衛門妻

同氏善六

女子

女子

女子、木山吉左衛門妻

母山形市郎左衛門妹

次兵衛

政盛

安永八年己亥二月九日死去、法名果山全昌居士

母同前

政盛事才智發明勝也諸人自現之仍家富榮揚名譽

如意滿足而貯珍宝子孫永伝之者也、此代ヨリ嫡子

迄鹿兒島町人同前被仰付畢

政次

次右衛門、境、森氏ノ家ニ為養子、母同前

政春 庄右衛門、母国分松木、宝曆十年辰三月二十四日

法名大心玄峯信女

同氏庄兵衛

母厚地庄兵衛女

女子、竹下嘉左衛門妻、母同前

女子、厚地諸左衛門妻、母同前

女子、母、境、森次右衛門女、宝曆四年甲戌二月十日、

法名桃岳花栄大姉

伊兵衛

政次

母厚地庄兵衛女、安永六年酉二月二十日死去、法名寿山全德居士

川畑兵右衛門三男為養子当家ヲ相統政次代諸事之志能多才

而子孫繁昌ス且御用分ヲ承儀度々被仰渡御奉公申也

女子、母岡村孫右衛門女

鍋太郎後次郎右衛門

政倚

母政盛嫡女、安永十年辛巳二月十三日、法名香屋清薫大姉

寛保三年癸亥三月二十七日誕生、

祖父厚地次兵衛政盛並父同氏伊兵衛政代ヨリ以諸事之出情富

貴繁榮ス然及政倚代達貴聞諸御用可承之旨被仰渡趣不可勝計

剩御城下町人被仰付且年寄格帶刀御免被仰付置其後其身計上

上町年寄被仰付福山江被差置鹿兒島町用向不及承嫡子代々年

寄格被仰附帶刀御免市中之格式御目通ニ罷出儀本役同前ニ被

仰附諸役人衆御證文並諸御書附數通致頂戴年号日附委ク書載

別卷當家之記録而代々子孫伝之者也天明四年甲辰十二月太平

布五匹去年及難儀

諸人米穀致合力段達貴聞為御褒美致頂戴御家老宮之原主膳樣

御取次大野掃部樣天明五年乙巳七月米穀等諸人江合力於役所

配当天明六年丙午正月上和泉屋町組入被仰附町奉行所ヨリ同

年六月西日筋諸所御飯屋御造立御入糧銀六拾貫目一手ニ差上

者ハ無之哉品能方ニ可被仰附旨段々被仰渡雖辭退及再三故西

日筋御入糧銀御願申上御免被仰附御家老島津豐前樣同年六月

二十五日御取次鎌田愛太夫樣、同年十月ヨリ銀六拾貫目天

明七年末三月迄金藏江上納相濟也、同年閏十月太平布拾匹四

年及極難諸人江米穀致合力段達貴聞為御褒美致頂戴御家老川

上頼母樣御取次大野隼人樣、天明七年丁未七月二十六日伊集

院伊膳樣ヨリ嫡子次郎左衛門父子共町御奉行所江御用被仰渡

同二十九日致參着届申上然処翌八月朔日次郎左衛門麻袴着用

ニテ町御奉行所江御用被仰渡罷出候処父次郎右衛門事此節被

召出跡年寄役被仰附遠境鹿兒島用向承儀令用拾代々年寄家筋

帶刀嫡子年寄格帶刀迄免許市中之格式、御目通罷出儀本役同

前福山居住向後次郎右衛門相勤通彌心掛可御用立御家老衆島

津和泉様御取次伊集院伊膳様ヨリ被仰付候、同年八月朔日次郎右衛門政倚江福山地頭新納織部様ヨリ御用被仰渡麻袴着用ニテ罷出御直ニ御證文被仰附難有頂戴仕候事
福山地頭江

上町年寄福山居住

厚地次郎右衛門

右是迄段々心掛宜其上當御時節柄ニ付テ猶又御用相弁殊三代引続々出候御取次ヲ以此節被召出其一代福山郷土被仰附衆並之御奉公方ハ被差免置候条向後町方之儀ハ專停次郎左衛門御用立候様可為致出候候右御格之通可申渡候御家老島津和泉殿御取次伊集院伊膳殿ヨリ被仰渡候、
右通被仰附御證文並御書附數通細密別卷記録委載之、政倚祖父代ヨリ三代引続勤功之訳ヲ以テ一世福山郷土被仰附置以後米三千石余借上且大坂替為上納差引トシテ上坂被仰附御下国方御不足ノ故自金二千三百兩銀二十貫目御用立御金納付テモニチ五百兩借入差出御難洪御時節柄ヲ汲受一渥致出精御用相勤寄特ノ御取分ヲ以テ代々福山郷土被召出以來御銀方掛被仰附子供マテ衆並ノ御奉公被差免置ノ旨寛政四年子十二月十六日御家老名越右膳殿ヨリ御用人松崎次左衛門殿御取次ヲ以テ被仰渡家内入同五年癸丑五月御免御通行ノ節御用宿所ヨリ依頼屋敷一圓御免而御用宿造立被仰附之旨寛政五年丑十二月二日御家老名越右膳殿ヨリ高橋縫殿御預代御免而造立也同六年寅二月初高持成御免同九年巳正月高直御免、上總介重豪公江寛政五年丑六月四日毛駒奉備献上依御成御徒目附田仲兵衛殿御取次ヲ以テ御内々ニテ御掛物二幅洞白愛信筆七福神法眼洞春筆山水御晒布拾正寅七月十二日拝領被仰付其後御内為御札伊集院平格殿御取次ヲ以テ御刻多葉粉御茶類所産輕キ品々年々御内毎進上御内御反シトシテ度々品々別冊之通拝領被仰附御馬ノ儀モ以後四度ニ四足献上仕御内々而石式身余拝領物被仰附難有頂戴仕候至極可奉存委別冊記之。

女子、早世、法名榮室貞繁大姉、母同

次郎後次郎兵衛早世

政胤

安永七年戊子十月二十日、法名果岳玄心居士、母同

市三郎、後次郎

政命

母同、寛政二年庚戌三月二十八日、国全德豐居士

女子、佐藤岩太郎妻、母同

女子、林庄左衛門妻

母同、寛政九年丁巳六月二日、瑞芳蓮心大姉

女子、早世、母同、寛政六年寅十一月十三日、貞藏

妙節大姉

女子、厚地金右衛門妻

母竹下助兵衛女、安永八年亥九月十日誕生

女子、母田辺治右衛門姪后離別ス、安永五年申十月二日誕生

政春 伊八后次郎左衛門又次兵衛

母川畑市郎兵衛女、明和元年甲申六月二十六日誕生、天保十年己亥二月二十日、行年七十六歳ニテ死去
法名正泰院儀山道福居士

天明七年丁未八月朔日麻袴着用ニテ町御奉行所御用被仰渡罷出候父政倚事此節被召出跡年寄被仰付遠境故鹿兒島用向承儀令用捨代々年寄家筋帶刀嫡子年寄格帶刀迄免許市中之格式御目通ニ罷出儀本役同前福山居住向後政倚相勤通彌心掛可御用立御家老島津和泉様御取次伊集院伊膳様ヨリ被仰渡候、天明八年申十月御金納ニ付銀壹貫目差上寛政三年亥七月御詞ノ御褒美有之、寛政元年西六月二十一日御初入部御目見、同二年戌正月三日御目見被仰付難有奉存御札回如何相濟、同三年亥極月福山町大火之節父政倚依留主類焼中江米配當為御褒美同四年子十月太平布三疋御家老伊勢播摩様ヨリ御用人市來次郎左衛門殿御取次ヲ以テ被仰渡難有頂戴仕也、父政倚代代福山郷土被仰付候所拙者代ニ相成大守齊興公濃州勢州尾州其外東海道筋川之御普請御用金被為蒙仰御難洪之御用節ニ付差上銀等可被仰付段於所何篇之儀都而役目之場相附候様文化十四年丑八月朔日御地頭堀殿殿在旅中被頼置坂元平左衛門殿ヨリ於御宅御直ニ被仰渡難有奉存候事別卷記録有之、
天保九年戌十月十二日佐土原公島津飛彈守様御成

女子、早世、母同、安永五年申十二月二十一日、法名梅含妙香大姉

政方

次吉、後次右衛門、母同、明和八年己卯九月晦日誕生
文政七年申四月別立

政次、鍊三郎早世、母同、安永四年乙未八月六日、
法名智玉禪童子

女子、於辰ト云内実川畑清右衛門妻トナル、母同安永四年
乙未七月十六日誕生、安政三年丙辰二月九日死ス、瑞
雲幹齡祥妙壽大姉

政武

金之助后金右衛門又直左衛門、母同、安永七年戊戌正
月二十二日誕生、浦役横目牧司相勤ス、文政七年申四
月別立御免、文政八年酉十月十四日死ス

政常

釜四郎、早世、母同、天明六年丙午八月十一日誕生
寛政三年辛亥六月三日、智泉柳田童子

政

袈裟次郎后市郎右衛門
母厚地次助女
寛政十二年申十月四日誕生、浦役相勤、
天保五年午二月八日死ス

政

金之助、后小兵衛、母同前、文化五年辰二月誕生
行司役相勤、天保十三年寅四月十四日死ス

政次

次太郎早世、母林清右衛門女茂ト云、天明八年申六月
二十二日誕生、寛政元年己酉十二月四日、霜露梅花禪
童子

女子

天眞流利錢○次油代千五貫文右合力候、文政十二年丑
九月二十一日生、明治三年正月二日死去、年四十二歳

女子

母明治七年戌一月十日卒、文政十二年丑九月二十一日生、
母久留彌兵衛長女。
弘化二年己七月十七日誕生、松下助次郎妻助次郎ハ兼盛ト
云、

政徳

猪八郎、母右二同、嘉永元年申十二月二十七日誕生、慶応
三年卯七月地頭横目被仰付、明治六年己九月死ス、明治元

政次

年辰十一月、御城下警備、同二年己正月御暇、明治元年辰
五月福昌寺江滞陣候処病氣者其月直ニ御暇、明治二年己九
月、常備兵被仰付

女子

熊袈裟、母同、嘉永三年戌十月十一日誕生、嘉永四年亥七
月十四日、幻光釋了禪童子
重ト云、松下兼三室、母右同

。小原家系図 ※平氏三浦氏末

義長

小原太左衛門

藤右衛門尉

良一

貞治二年八月、隅州肝付郡

隅州曾於郡福山住士

高山小原・上原令知行、

号小原

良照

良継

御馬掛并横目役数年務ム

右小原源左衛門名乗実名無之故ニ文化五戊辰歳太簇

大吉天廿日ニ一天奉天照太神謂可月何某謹考然者

良一其嫡子四歳良照ト名之改依之授弓矢智恵

年

表

西 暦	年 号	記 事
六四六	大化 二年	大化改新の詔。
六四九	五年	蘇我臣日向を太宰帥と為す。
六五五	白雉 元年	隼人衆を率いて上京す。
六六五	天智 四年	隼人衆を率いて上京す。
六七三	天武 二年	大隅台明寺創建と伝う。
六八二	十一年	大隅隼人と阿多隼人の天覧相撲。隼人上京し、方物を進貢す。
六八五	十四年	大隅直等、姓を賜い、忌寸となす。
六八六	朱鳥 元年	隼人大隅・阿多魁帥各衆を率い、天武天皇の殯宮にしのびごとし奉る。隼人大隅・阿多魁帥等三百三十七人を賞賜う。
六八九	持統 三年	筑紫大宰栗田真人、隼人百七十四人を進貢す。
六九二	六年	沙門を大隅と阿多とに遣して仏教を伝う。
六九五	九年	隼人大隅を饗す、隼人の相撲を天覧す。
七〇〇	文武 四年	薩末比売・久売・波豆・衣評督衣君県・助督衣君弓自売・肝付難波等肥人を従え竟国（ベキコク）使刑

七〇二	大宝	二年	部真木等を剽刼（おどし取る）す。 唱更・多嶽命に逆う。仍て兵を派して討つ。遂に戸を校して吏を置く。薩摩隼人征討軍士に勲を授く。 唱更国内要害の地に柵を建て、戍を置く。
七〇八	和銅	元年	和銅垂迹説（国分正八幡）。
七〇九		二年	薩摩隼人郡司以下一八八人朝貢す。
七一〇		三年	元日拝朝。隼人等列に在り。隼人等に宴を賜う。諸方の樂を奏せしめ、位を授け、禄を給う。日向国采女を貢し、薩摩国舍人を貢す。日向隼人曾君細麻呂荒俗を教諭するにより、外従五位下を授けられる。 日向国肝付・曾於・大隅・始羅四郡をさいて大隅国を置く。大隅疫病多し。仍て藥を賜う。隼人征討の有功者千二百八十余人に勲を授く。
七一三		六年	豊前の国民二百戸を移して、隼人の民を勸導せしむ。
七一四		七年	薩摩・大隅二国貢進人すでに八歳経、六年を以て相替せん事を請い許さる。
七一六	靈龜	二年	薩摩・隼人二国の隼人、上京し、風俗・歌舞を奏す。
七一七	養老	元年	隼人反乱、国守陽侯史麻呂を殺害、大伴旅人を征隼人大將軍とす。
七二〇		四年	隼人征討將軍以下に勲位を授く。大隅・薩摩の国司の欠は太宰府官人を選びて権に補す。
七二二		六年	日向・大隅・薩摩三国の士卒に復三年を賜う。薩摩・大隅二国の隼人六百二十四人朝貢す。仍て饗を賜い、位禄を授く。隼人帰国。
七二三		七年	
七二五	神龜	二年	新田神社創建と伝う。
七二七		四年	筑紫諸国庚午年籍七百七十卷に官印を押す。
七二九	天平	元年	薩摩隼人等調物を朝貢す。隼人風俗歌舞を奏す。隼人等に位禄を賜う。大隅隼人等調物を貢す。大隅隼人加志君和多利等に位を授けらる。
七三〇		二年	大隅・薩摩両国の百姓いまだ班田せず、田に従つて悉く墾田を許す。
七三二		四年	さきに薩摩国司の季禄を停止せるも今改めて、これを給す。

七三五	七年	大隅・薩摩二国の隼人二百九十六人、入朝して調物を奉る。 大隅・薩摩二国の隼人等方楽を奏して、天覧に供す。 隼人三百八十二人に爵・祿を賜う。
七四〇	十二年	太宰少貳藤原広嗣兵を起して反す。隼人を其の先鋒とす。
七四一	十三年	国分寺・国分尼寺創建の詔。
七四二	十四年	大隅国大地震。
七四三	十五年	懸田永久私有令。襲国平定。天皇石原宮に御し、饗を隼人等に賜い、曾之君・前君・佐須岐君等の位を進め給う。
七四五	十七年	大隅・薩摩両国の公廨、各四万束と定む。
七四六	十八年	日向国風雨、養蚕損傷、調・庸を免す。
七四九	天平勝宝元年	諸国国分寺には寺毎に千町、尼寺には寺毎に四百町の墾田地を許す。大隅・薩摩両国の隼人等御調を奉り、土風の歌舞を奏す。ついで曾之君・前君・曾梶主・岐直等に位を加賜せらる。
七五五	七年	大隅国菱刈村の浪浮九百三十余人、郡家をたてんことを請い許さる。
七六一	天平宝字五年	吉備真備を西海道節度使として、筑前以下日向・大隅・薩摩等八国の船・兵士を検定し、三年の田租を免す。
七六三	七年	天皇閣門（コオモン）に御し、隼人等の樂を聞く。礼部少輔中臣伊加麻呂を大隅守に左遷す。
七六四	八年	大隅・薩摩両国にて、烟雲晦冥（カイメイ）奔電去來す。鹿児島信爾村の海、三島を化成し、埋没する民家六十二区、口八十余人。
七六六	天平神護二年	日向・大隅・薩摩三国大風、桑・麻被害、柵戸の調・庸を免す。 大隅国神造新島、震動やまず。
七六七	神護景雲元年	隼人司の隼人百十六人、有位無位を論ぜず爵一級を賜う。
七六九	三年	和氣清麻呂除名、大隅に配流。大隅・薩摩の隼人俗伎を奏し、薩摩公・加志公・甌隼人・曾公・大住直

八〇九	四年	隼人司に史生二人を置く。
八〇八	三年	隼人司を衛門府に併す。衛門府を廃することにより再び隼人司を置き、兵部省に隸し、佑一員と使部二人とを廃す。定額隼人の欠員は京畿在住の隼人より補充し、衣服・糧料を簡単にし、衛士に準ず。
八〇六	元年	連年水旱・疫病につき、日向・大隅・薩摩に田租を一か年間免す。
八〇五	二十四年	永く大替隼人の風俗歌舞を廃す。
八〇四	二十三年	大隅蒲生駅と薩摩田尻駅との間、薩摩郡櫟野村に一駅を置く。
八〇一	二十年	太宰府に命じ、隼人を進貢することを廃す。隼人交替上京の制ここに断絶す。
八〇〇	十九年	大隅・薩摩両国の百姓墾田を収めて国分田を授く。
七九六	十五年	阿蘇の火口湖かれる。
七九四	十三年	奈良から京都へ遷都。
七九三	十二年	大隅国曾於郡大領曾乃公牛養、隼人を率いて入朝し、外従五位下を授けらる。
七九一	十年	豊後・日向・大隅等飢饉、これを賑給す。
七八八	七年	大隅国曾於郡曾乃峰上に火災上り、雷鳴を伴う。峰下五、六里、沙石積ること二尺。
七八五	四年	日向国百姓課役を避けるため、大隅・薩摩に流亡す。
七八三	二年	大隅・薩摩の隼人等を朝堂に饗し、階を進め、物を賜う。
延暦	二年	日向・薩摩の隼人等を朝堂に饗し、階を進め、物を賜う。
七七八	九年	神護中、大隅海中に噴出せし、神造島を大穴持神と名付けて官社に列す。
七七六	七年	大隅・薩摩の隼人俗伎を奏し、のち大住忌寸・大住直・薩摩公以下八人階を加えられる。
七七五	六年	日向・大隅・薩摩三国大風、桑・麻被害、調・庸を免す。
七七四	三年	中臣習宜阿曾麻呂を大隅守とす。
七七三	二年	隼人の帯剣を停む。日向・大隅・薩摩および壱岐・多嶺等の博士・医師は八年遷替とす。
七七一	元年	和氣清麻呂、大隅より京師に召還す。
宝龜	元年	・大住忌寸等階を加え、他は物を賜う。

八三三	弘仁	四年	大隅・薩摩二国蝗害により未納稻を免す。薩摩・大隅等五国大風、租・調を免除す。
八一四		五年	大隅国曾於郡神造島幣帛の例に預る。
八一五		六年	薩摩国蝗害により調・庸・田租を免す。
八一九		十年	大隅・薩摩・日向・多嶽等の国島は遠国の故、九月の風水を十月後に言上するも差しつかえなしと定めらる。
八二四	天長	元年	多嶽島をやめ、大隅国に属し、能満を詔謨に、益救を熊毛に合せ四郡を二郡となす。
八三六	承和	三年	薩摩国大飢饉。
八四〇		七年	遣唐知乗船、大隅国海畔に着し、南海賊地に戦い、得る所の兵器をもたらず。
八四四		十一年	大隅・薩摩・壱岐等に講師を置く。
八四五		十二年	大隅・薩摩・日向・壱岐・対馬等の博士・医師等、六考を以って期となす。
八四六		十三年	大隅国桑原郡に主政一員を置く。
八五八	天安	二年	日向国高智保神・都農神を従四位上に、霧島神を従四位下に昇格し給う。
八六〇	貞観	二年	大隅国吉多・野神二牧を廃す。
八七四		十五年	天長元年より五十年間、大隅国正税返却帳を徴するに、勘出穀額二百五十一万余束に達す。
八七七	元慶	元年	隼人司に佑一員を置く。
八八四		八年	大隅守時統当世解を修して申請す。貞観十六年より此歳まで公文未勤とあり。
九〇一	延喜	元年	菅原道真、太宰府に左遷さる。延喜式神名帳。
九一〇		十年	隼人大衣を補す。
九二七	延長	五年	宮浦神社、延喜式に掲出。
九三九	天慶	二年	平将門、下野国府を侵す。藤原純友、讃岐・淡路の国府を侵す。
九四〇		三年	藤原秀郷、平貞盛が将門を討つ。
九四一		四年	藤原純友、太宰府を侵す。

九四三	六年	太宰府をして、重ねて管内の神名帳を注進せしむ。
九四五	八年	是歳、性空上人霧島山にて苦行す。
九四六	九年	国分市清水、台明寺の鐘を改鑄。
九四七	元年	大藏氏加治木郡司（異説は寛弘）。天暦年間菅原氏藤崎宮司となる。
九六三	三年	薩摩国分寺鎮守として天満宮を勧請すと伝う。
九六八	元年	伴掾大監兼行薩摩国総追捕使となる。
一、〇二一	元年	税所篤如、正八幡宮ならびに霧島宮司職に補任さる。
一、〇二四	元年	大隅雨水。太宰大監平季基、良宗（弟）と島津庄を開発す。岩川八旗八幡、岩清水八幡より勧請・下向中本尊を盗まる。垂水新城、神貫神社は石清水の分身、手貫神社（上之宮）に敗れる。
一、〇二九	二年	大隅人良孝色革等を右大臣実資に贈る。
一、〇三〇	三年	平季基、島津庄を関白藤原頼通に寄進す。
一、〇三三	六年	佳例川に飯富神社創建。
一、〇三四	七年	新立庄七百六十町成立す。（深川院・財部院・多祢島）。
一、〇三六	九年	高麗人、大隅国に漂流す。よつて救護し、送還す。
一、〇四〇	元年	伴兼貞、肝付郡弁済使職となる。
一、〇四一	二年	大隅国始良庄を正八幡宮に寄進。肝付兼俊、救仁院を領す。
一、〇四三	四年	大隅大介、惟宗某、台明寺山所在の雑木伐採を禁ず。
一、〇五四	二年	是歳、平良宗八幡社を始良に建立す。
一、〇七〇	二年	調所恒範譜中。
一、〇八七	元年	藤原頼光、祢寝院を領す。北俣は島津庄、南俣は太府領。
一、〇八八	二年	是歳、正八幡宮執印僧行賢、父惟宗某の大隅任国下向に従う。
		大隅正八幡宮の神宝損失せるにより、太宰府をして修造せしむ。

一、〇九一	五年	大隅正八幡宮炎上す。
一、一一〇	元永元年	正八幡宮執印僧行賢、吉田院を買得、源為重に譲る。
一、一一二	三年	大隅権大掾建部頼親没す。
一、一一四	永久二年	小松左近将監源宗平宮内に下向す。
一、一二一	保安二年	正宮政所、建部頼清に祢寝南保を領せしむ。
一、一二三	四年	藤原舜清、垂水城、浜之市城をへて蒲生院総領職となる。
一、一三一	天承元年	正宮執印僧行賢、台明寺に田畠を寄進す。
一、一三二	長承元年	正宮宝殿丑寅宮坂麓に二基の石に正八幡の御名出現す。正八幡宮牒。
一、一三五	保延元年	宮永社役支配状。
一、一三八	四年	正八幡宮行玄上人（藤原師実の七男）を補任す。知足院、帖佐郷を正宮に寄附す。
一、一四〇	六年	保延年間より、深川院・財部院・多祢島の三か所は島津莊の新立庄となり、国務に従わず。阿多平四郎忠景、南薩で権勢を振う。
一、一五六	保元元年	保元の乱。
一、一五七	二年	平清盛、太宰大貳となる。
一、一五九	平治元年	大隅国留守所、台明寺に令して、藏人所召物使解に任せ、青葉竹について責む。平治の乱。
一、一六〇	永暦元年	源頼朝、伊豆に流さる。前出雲守源光保および子息備前守光宗を薩摩に配流す。
一、一六二	応保二年	仏子真舜子紀助房、台明寺に桑東郷竹原田を譲与す。
		台明寺住僧檜前篤房の非違を太宰府に訴う。
一、一六七	仁安二年	清盛太政大臣となる。
一、一七五	安元元年	勾当僧安兼、百引村弁済使となる。
一、一七七	治承元年	平判官康頼、丹波少将成経、僧都俊寛等、鬼界島へ流罪。
一、一七九	三年	平重盛死去。

一、一八〇	四年	以仁王、平氏追討の令旨、源頼政挙兵失敗。頼政、仲綱は宇治平等院で討死。木原、菊池、南郷宮司等令旨に応ず。源頼政の孫、宗綱大隅へ流罪、廻村を与えられ、廻氏と号す。
一、一八一	養和元年	平清盛死去。このころ比曾木野、小松神社創建。
一、一八三	寿永二年	平宗盛、安徳天皇を奉じて、太宰府に到る。
一、一八四	元暦元年	正八幡嫡子弥勒寺彦太郎守平、太宰府へ馳参、曾於郡芦谷村を領す。
一、一八五	文治元年	菱刈重信、祢寝南俣地頭職となる。菱刈重弘・重信等、建部清房を訴う。
一、一八六	二年	頼朝、島津庄民を誡め、領家近衛基通の死去により、忠久の地頭職に動揺なからしむ。千葉常胤、島津庄内五郡郡司職となる。
一、一九六	建久七年	平宗実の子、宗衡・盛衡は大口羽月、菱刈重妙に預けられ、羽月小松と号す。島津忠久、山門院に入国と伝う。
一、一九七	八年	薩・隅・日三州の図田帳なる。小河院廻村弟子丸五町三反大、郡司建部宗房所知。
一、一九八	九年	大隅国注進御家人交名等事。国方、小河郡司宗房とあり。
一、二〇三	建仁三年	建部清重、正八幡より祢寝南俣地頭を安堵さる。島津忠久、比企能員のことに連坐して、薩隅日三国の守護職を奪わる。忠久、台明寺に立願す。(忠久の七社参は開聞・新田・止上・正宮・霧島・妻万 ^{佐土原カ崎カ} ・島津稲荷)
一、二〇四	元久元年	正八幡宮地頭掃部頭入道寂忍訴申。(八幡宮寺領帖佐郷・荒田庄・万得名三莊)三人の地頭が補任され、造営の功なり難し。
一、二〇五	二年	菱刈重能、建部清重と祢寝南俣院を争う。
一、二一九	承久元年	源氏滅亡。
一、二四七	宝治元年	京都宿衛22番組に改められる。一番毎に三か月。
一、二四八	二年	高山町後田大窪、六地藏塔。
一、二五七	正嘉元年	大隅守護名越時章裁許下知状。

一、二七二	文永 九年	近衛院所領（深川院百五〇町、財部院百町、多嶺島五百町）、名越時章、肥後信基・信家父子と争う。
一、二七四	十一年	蒙古軍来襲。
一、二七七	建治 三年	一遍上人、正八幡宮に参籠。藤原義祐、正八幡宮政所職、餅田村預所職となる。
一、二八七	弘安 十年	守公神社結番、九番廻大和入道、長法橋跡、毗沙王。
一、二九三	永仁 元年	十番小河郡司入道、左近太夫、庁免三郎。とあり。
一、二九八	六年	幕府、鎮西諸国守護に命じ、管内一之宮に宝劔と神馬とを奉納せしむ。肝付兼藤、地頭代と和与す。
一、三〇五	嘉元 三年	大隅守護北条時直、伊佐敷親弘と祢寝清治との争論を決裁す。
一、三〇九	延慶 二年	肝付兼藤、地頭代官源盛を訴える。
一、三一二	正和 元年	幕府、肝付郡地頭代官実性をして、肝付兼藤に押領地を返えさしむ。
一、三一四	三年	肝付兼村、岸良村弁済使安堵のため上洛す。
一、三二四	正中 元年	伊作庄下地中分。
一、三二五	二年	肝付郡地頭代盛貞、肝付兼藤を殺害、鎮西探題北条英時、地頭代をして押領地を肝付兼尚に返えさしむ。
一、三三三	元弘 三年	北条高時自殺、鎌倉幕府滅亡。島津貞久の庶長子川上頼久の大隅桑東・桑西郷を領知。
一、三三六	延元 元年	肝付兼重、伊東祐広、野辺盛忠と共に兵を挙げ、畠山直顕これを討つ。直顕、結城、友永、楡井、祢寝等をして下財部新宮城を討つ。
一、三三七	二年	肝付兼重等曾於にはいり、重久篤兼等を橘木城に攻める。
一、三三八	三年	南北朝の争乱おこる。三州にも兵乱およぶ。肝付、加治木、税所、姫木氏など島津と抗争す。このころ桜島は曾於郡、江戸期は大隅郡に属す。牛尿氏は太秦姓で大口・羽月を領し、根占7代清成は島津氏久と組んで、肝付・肥後と戦う。牛根の岩崎五郎道綱は根占・建部一族か？ 北朝年号を使用する。幕府、島津頼久に桑東・桑西郷を与う。

一、三三三	興国 三年	吉岡孫次郎、日当山城を奪う。畠山直顕、土持宣榮に檄す。
一、三四八	正平 三年	肝付兼重等橘木城を攻める。
一、三四九	四年	康永年中、大隅正八幡と帖佐の新正八幡と和解（留守康俊と大隅前司忠貞）
一、三五〇	五年	征西將軍懷良親王、薩摩沖に着到。
一、三五二	七年	貞久、重久篤兼等に檄して、大隅守護所に参集せしむ。
		肝付兼重、石井中務丞を大隅に攻める。石井氏援軍を島津氏に請う。
		楡井頼仲、肝付兼重の連合軍、大隅を侵す。よって貞久、重久篤兼に檄す。
一、三五三	八年	島津氏久、姫木弥四郎宛軍忠状。
		畠山直顕、調所、姫木諸氏を招き、其子宗泰をして氏久を攻める。
		氏久、大隅の敵味方の交名を録進して、教書を請う。即ち大隅国佐殿御方凶徒等交名注文（島津貞久譜中）
		小河郡司一族。
一、三五六	十一年	延文年間、菊池肥後守武光、征西將軍と谷山にはいる。
一、三五七	十二年	氏久、正八幡宮に岩河村を寄進す。
一、三五九	十四年	皇山修理亮、大隅にはいり、尊氏と菊池の間隙をぬって戦う。島津貞久方の楡井頼仲と戦い、高城の肥後彦太郎種顕・種久兄弟と連合し戦う。大隅は肥後氏が掌握し、北朝から南朝方畠山直顕、赤崎泰次に大隅岩河内并済職を安堵す。
一、三六一	十六年	康安年中、大隅正八幡と帖佐新正八幡と論争す。
一、三六二	十七年	円城寺中納言法眼を正八幡宮執印職に補す。
一、三六三	十八年	貞久、師久（薩摩守護）、氏久（大隅守護）にそれぞれ分与す。
一、三七六	天授 二年	足利氏、氏久の大隅守護、伊久の薩摩守護を奪い、これを今川了俊に兼務させる。
一、三七七	三年	本田氏親、大隅姫木城、清水城を抜く。
一、三八〇	六年	薩・隅・日の大將今川満範（了俊の子）、末吉城を奪う。

一、三八一	弘和 元年	斯波義將、朝鮮に対する海賊禁遏を大隅守護に命ず。
一、三八三	三年	柵寝熊夜叉丸に大柵寝総弁済使職をつがしむ。
一、三八八	元中 五年	島津孝久、正八幡宮に立願、元久と名を改める。
一、三九二	明德 三年	南北朝和解なる。
一、三九六	応永 三年	総州家師久（薩摩）、奥州家氏久（弟）大隅（守護職をめぐる内紛。
一、四〇四	十一年	伊久（総州家）、元久（奥州家）で激化、元久を日向・大隅の守護職とす。
一、四一二	十九年	幕府、島津元久を日向・大隅の守護職に補す。 島津久豊、樺山教宗に大隅上小河・日向熊野郷などを与う。 守護・地頭急増、伊地知氏下之城（本城）、地頭池袋氏へ（牛根）を譲り、海潟をそえ、のち梶原氏が田之上城にはいる。
一、四一八	二十五年	栗野町恒次田底薬師堂鰐口の銘、大隅小河院大願主良光敬白奉懸祈進廻村、宝福寺金撫とあり。
一、四二四	三十一年	権執印兼御前法橋大和尚位永穩（正宮沢文書）
一、四二五	三十二年	島津久豊卒去。島津忠国薩・隅・日三国の守護となる。
一、四三六	永享 八年	忠国、大慈寺・正八幡宮に領地を寄進し、樺山孝久に日向旧領島津庄牧方地を与う。
一、四四〇	十二年	足利義昭、命により殺害される。
一、四五一	宝徳 三年	筹海国篇、大隅五郡として、菱刈・桑原・曾於・始羅・肝付・大隅・馭謨・能毛・
一、四五七	長祿 元年	伊東、北原両氏戦う。上井・敷根まで大隅正八幡宮神人出撃する。
一、四六〇	寛正 元年	国分宮内沢文書、神領坪付。
一、四七三	文明 五年	肥後氏は大隅高城、廻氏は福山廻城、伊地知氏は垂水本城・海潟・柵原十二町を領す。石井丹波守義忠は垂水城（中俣・海潟を領す）。梶原備前守景豊は田上城。池袋備前守宗政は下之城（新城）に在り（牛根・二川を領す）。島津右膳は敷根を領す。上井は諏訪甚六家で領す。
一、四七五	七年	忠国、正八幡宮・新田宮・国分天満宮・泰平寺などに詣す。

一、四七六	八年	島津国久・季久、忠昌に叛して、大隅宮内、敷根、清水などを攻める。
一、四七七	九年	桜島大噴火、燃島出現す。曾於郡人が国分宮内を攻撃。 帖佐・加治木の兵国分宮内に攻撃。
一、四八五	十七年	このころ島津忠国（大岳公）の家老は一代で二十四名を数える。 垂水・牛根・福山・敷根・上井の豪族は所謂（辺田七）である。
一、四九〇	延徳二年	島津忠廉、国分上井城を攻略す。
一、五一五	永正十二年	將軍義植、忠廉に薩摩国中、浦々の査覈（正確に調査）を命ず。
一、五一六	十三年	正若宮八幡王講之結衆の事、本願弥五郎殿。
一、五一八	十五年	石塚種延、清水楞嚴寺に洪武銭二貫文を寄進す。
一、五一九	十六年	廿三代遊行上人称愚、薩摩来遊。
一、五二〇	十七年	伊集院尾張守、曾於郡城にて叛す。
一、五二一	大永元年	島津忠将（忠良の第2子）誕生。
一、五二二	二年	島津勝久、堅利・小浜・河北などを樺山長久に、野々美谷を北郷忠相に与う。
一、五二三	三年	高城地頭肥後氏陷落。垂水石井氏（大永六年）陷落。梶原氏も陷落。下大隅伊地知氏のみこのころ。
一、五二五	五年	島津勝久、本田兼親に契状を送り、曾於郡を与える。
一、五二七	七年	伊藤尹祐、北原氏と連合、野々美谷を攻め、北郷忠相一族尚久を殺す。
一、五三二	元年	本田親尚、曾於郡を奪い、兼親は清水隼人城に拠り、親尚は小窪、河北、白崎、持松などに拠る。
一、五三七	六年	北郷忠相、一族左京進をして曾於郡を討つ。 勝久、樺山信久を攻む。本田董親・新納忠勝など、勝久に叛して正八幡宮神官を攻む、ために正宮炎上す。
一、五三二	天文元年	「包山樹心」和尚、高山より大廻に移る。（六月十二日、大安寺開山の碑）
一、五三七	六年	忠良、竹山城を陥し、実久・部将肥後盛治を殺す。福山・大迫の二壘を降し、鹿児島にはいる。北郷忠

一、五三八	七年	相は新納忠勝の岩川新城を陥す。
一、五四三	十二年	北郷忠相、新納氏の財部院を復す。
一、五四四	十三年	ポルトガル船種子島漂着、鉄砲伝来。
一、五四六	十五年	島津忠良、市成を肝付兼統に与う。
一、五四八	十七年	世戸口美作守秀辰伊勢詣り、京都上洛近衛殿と面会。
		隅州混乱、守護代本田董親（天文二十年頃は島津貴久）
		本田親和、姫木城に拠り、上井筑前守、清水城を襲う。
		伊集院忠朗、貴久の命により日当山城を抜き、姫木城を攻囲、本田董親・北原兼守を降す。董親・親兼
		父子荘内に敗走。
一、五四九	十八年	フランシスコ・ザビエル、鹿児島に来る。滞在十か月。
		伊集院忠朗、加治木の肝付兼演を降す。兼演、貴久に拝謁、祁答院・入来院・東郷も遣使謝罪す。
一、五五一	二〇年	島津忠良、正八幡宮建立の綸旨を受く、正八幡尊体を勧請のため、樺山玄佐上洛。名僧日秀上人の教化。
一、五五六	弘治二年	蒲生範清（舜清より18代目）菱刈重豊、渋谷良重の援をえて、島津貴久、義弘、忠將の軍を迎撃す。
一、五六一	永禄四年	肝付氏廻城を攻撃、島津忠將戦死、肝付兼統廻城を陥落さす。包山樹心、忠將の菩提寺大安寺を建立。
一、五六二	五年	北原民部少輔、一向宗乱を起す。義弘等横川城（北原民部）を攻略す。菱刈隆秋に与う。
一、五六六	九年	島津義久第15代守護職を襲封。
一、五六七	十年	廻村領主肝付良兼となる。（肝付兼統、志布志にて自害、良兼が継承していた。）
一、五六八	十一年	島津忠良、加世田にて死去。
一、五七〇	元亀元年	島津義久、正八幡宮に社領寄進。
一、五七一	二年	島津貴久死去。肝付氏兵船、鹿児島を襲う。
一、五七二	三年	肝付氏舟師、大隅小村を攻める。島津兵、境・二川にて肝付兵を破る。杵寝重張、肝付氏と絶ち、兵を島津氏に乞う。下大隅（早崎）の守将川畑安芸は遁れ、小浜の守将伊地知重矩は戦死。

一、五七三	天正	元年	肝付氏、大軍をもって末吉を攻む。義久薩隅の兵を以て肝付氏を討つ。島津軍、牛根城を攻む。
一、五七四		二年	肝付氏、牛根を救援、島津忠長等と戦う。牛根城激戦三日にして陥落。伊地知重興、島津氏に降る。肝付兼亮降伏。島津家久・新納忠元と共に大隅牛根早崎にて新戦法を考案し、関狩にて訓練す。降伏の伊地知領分割、高城は鎌田氏、垂水は川田氏、田之上は敷根氏、下之城は伊地知氏、田之上城は梶原氏、伊地知氏、祢寝氏、敷根氏と変わる。
一、五七五		三年	馬立典厩坂に忠将の供養塔建立。(嫡子島津以久) 以久は垂水より日向佐土原領主へ移封(幸久・征久とも号す)
一、五七七		五年	島津三州統一なる。島津義久、鹿児島清水町諏訪神社に参詣。先陣島津周防介、中陣上井氏、後陣伊地知重興。 のち伊地知重興、祢寝重張つづいて死去。
一、五八〇		八年	島津義久、福山牧を創設。鹿屋高牧野より馬を合戦野に移す。別当四人召移さる(松元甚之丞、山下宗徳、谷山和泉、黒岩四郎)。惣陣へ仮屋番設置、(八重尾宗清、八重尾因幡、平原佐渡、井之口盛清、中村喜之助他三名) 竹原山の陣へ仮屋番八人を置く。
一、五八六		十四年	島津、八州を征覇す。右典厩以久、廻村領主となる(以久は忠将の子)。
一、五八七		十五年	豊臣秀吉の島津攻め。伊集院忠棟率先秀吉に降伏。根白坂で島津軍敗退。島津氏、秀吉に降伏。
一、五九二	文禄	元年	島津義久、領内寺社領四百八十六町余を徴発。梅北国兼、田尻但馬守、坂により浅野幸長が討伐および検地に下向す。細川幽斉も義久同道下向検地す。
			秀吉、朝鮮出兵を島津氏にも命ず、新納忠元「二才咄相中」を出す。
			義久、祁答院歳久誅伐の命を受く。歳久、聞きて滝ヶ水にて自尽す。義久、三州の社寺領三分一を徴す。
			梅北国兼等騷擾を起す。
一、五九三		二年	島津久保、唐島にて死去す。
一、五九四		三年	近衛信輔、薩摩に流謫。(秀吉征夷大將軍宣下を渴望・懇請、信輔はその勘気に触れて、坊之津へ流謫)。

一、五九五	四年	石田三成検地の命を受け、大音新介を総奉行とし、薩隅日に奉行を派遣す。 三州の検地終る。
一、五九七 慶長	二年	秀吉検地完了後諸領主を移封す。細川幽斉、廻浦に到着、僧院に一泊す。廻村領主、伊集院忠棟となる。
一、五九八	三年	廻村石高一、四七三石四斗七升九合。平重張、根占より吉利へ移封、敷根中務頼賀、田上を拝領敷根より移る。義久、鹿児島より浜之市、富隈城へ移る。加藤清正、城の石を贈る。近衛信輔来城す。
		秀吉再度朝鮮出兵。義弘再度朝鮮へ出兵。
		豊臣秀吉死去。
一、五九九	四年	福山郷初代地頭民部少輔山田有栄（昌巖）。義久、敷根頼賀（土岐氏の後裔）の弱小を利用、帖佐の益田重富の春花に千石を与え、大隅田上城に移し、垂水より高隈・市成へと転封す。島津忠将の子を頼賀跡に移す。島津以久は垂水領主より日州佐土原へ移封、垂水は孫の忠仍に譲る。
		五大老、忠恒に泗川の行賞として薩摩内直轄地五万石を宛行う。
		島津以久、種子島より垂水移封、一万千石を給う、種子島は種子島久時に反附す。
		島津忠恒（家久）、伏見で伊集院幸侃（忠棟）を手討ちにす。忠棟の子（忠真）庄内で反乱。家久、伊集院忠真を攻め一旦和睦す。（忠真・小伝次等所領十二城に立籠る。庄内の乱なり。
一、六〇〇	五年	関ヶ原合戦。島津は西軍に加担し、福山郷士二十四名、地頭山田昌巖の指揮下にはいる。
一、六〇二	七年	島津忠恒、伏見城より帰国の途中、日向野尻にて伊集院忠真を誅す。（忠真夫人は義弘の妹）守護職継承をめぐり、16代義久の信久派と17代義弘、18代家久派との内紛、信久の父である彰久夫人は義久の二女。忠真の弟小伝次は富隈城で斬殺さる。家久、鶴丸城を構築、領内に外城制をしく（百十四外城）、各外城に地頭仮屋を置く。
一、六〇三	八年	島津氏幕命により、宇喜田秀家を伏見に送る。島津以久、佐土原三万石に封ず。
一、六〇四	九年	義久、あらたに曾於郡隼人城に築城、富隈城より移城す。（在城八年）
一、六〇六	十一年	義弘、帖佐より平松に移る。（栗野より文禄四年に帖佐へ）

一、六〇七	十二年	義弘、平松より加治木に移る。
一、六一〇	十五年	直川智、蕉苗を招来し、大島大和浜に試植し、黒糖凡そ百斤を製造す。
一、六一一	十六年	島津義久、国分にて死去。十五名の家臣団、葬儀後福昌寺前田にて供腹（その一人である岡本讃岐守秀嗣の孫、佳例川城ノ岡に墓あり）
一、六一四	十九年	大阪冬の陣、福山郷士十九名参加す。惣陣、竹原山陣の仮屋を廃止す。敷根頼兼、山之口地頭へ赴任の途中、福山津畑で斬殺さる（斬殺者は福山郷士槐島利右エ門と児玉大藏である。その場で自刃して果てる）。槐島の墓は慶安元年八月三日当二十三才とある。三十三回忌の建立であろうか。
一、六一五	元和元年	幕府一国一城の制を布く。武家法度十三条を頒つ。
一、六二四	寛永元年	寛永の頃、小松神社移築。
一、六二五	二年	はじめて薩摩に甘藷を移植す。
一、六二九	六年	福山地頭吉田次郎兵エ。
一、六三五	十二年	参勤交替はじまる（寛永武家諸法度）、牛馬改めを行い、宗門手札改めの制を定める。
一、六三六	十三年	西念寺創建。島津氏、外城の武具を書上げ報告させる。
一、六三七	十四年	福山は人数千七百三十三人、内男千七人、鉄砲七十一挺、弓二十四張。
一、六三九	十六年	島原の乱。薩藩出兵する。清水地頭山田有栄。
一、六四二	十九年	藩主光久、福山牧、馬追い観閲、地頭仮屋へ一泊す。地頭本田伊与。
一、六四三	二〇年	百姓の米食禁止令を出す。伊地知重順（十一代）、日州倉岡地頭に復帰す。重順は朝鮮の役参加、帰国後、領地を没収され、肥後相良討伐の戦功が水泡に帰っていた。
一、六四四	正保元年	諸郷に切支丹・一向宗横目を申付く。
一、六四五	二年	幕府、糸割符の制を定む。
一、六四六	三年	大和守久章、太守への謀叛の咎にて、大島遠島を命ぜらる。拒否し、谷山清泉寺で自害。百姓の六度狩（公儀狩）を年三度に改む。

一、六五〇	慶安 三年	風水害、虫害の被害甚大。
一、六五二	承応 元年	諸浦、水手屋敷・塩浜を檢地す。即ち船手竿と称す。
一、六五六	明暦 二年	宗門改めの強化。(前年、宗体座・宗体奉行を置く。)
一、六五八	万治 元年	地頭、本田六左工門。垂水領主島津久治、羊を海潟村に放牧す。(前年、伊集院地頭、島津久通、鹿児島・伊集院間に並松を植栽させる。)
一、六五九	二年	一向宗門徒国分衆中、山口四郎兵工誅殺す。田地支配を終り、諸士名寄帳を交附す。(藩内門割制度の実施。)
一、六六一	寛文 元年	檢地により、福山外城、郷士一〇九人、高二千百九十五石四斗。
一、六六二	二年	谷山・栗野・財部・中郷・福山等衆中の一向宗門徒を処分す。島津光久、国分正八幡宮参詣。
一、六六六	六年	金山に他領民を入れるを許さる。垂水の小田喜三次、阿波徳島より甘蔗の種子を得、垂水・市来に植栽す。日向・大隅地震あり。
一、六七〇	十年	新川により国分に新田高五千石を成就す。地頭、桂奎之助。
一、六七二	十三年	高山の用水工事成り、田高二千石を開発す。
一、六七四	延宝 二年	是歳、宗門手札改を施行す。小根占の用水工事成る。廻次郎兵工頼次、宮浦神社へ宝剣二振を奉納(十三年説もあり)。地頭島津豊前。
一、六七五	三年	風水害あり、ついで飢饉となる。是歳、山奉行の内に柚方両名を置く。
一、六七七	五年	帖佐組を新田方・古田方にわけ、国分組の新田高八千七百五十石を帖佐組(與)に附す。飯富神社、社殿再興。佳例川仮屋に薬師堂を建立。
一、六八〇	八年	7代島津久治、島津忠将供養塔再造立。
一、六八二	天和 二年	是歳山奉行の内に新材木方両名を置く。
一、六八三	三年	祢寝清雄分国中田地方差引を命ぜらる。地頭、島津豊前。
		祢寝清雄等、農業書を編集。

一、六八四	貞享 元年	柵寝清雄、頼娃地頭となり、狩夫銀を免じ、用人一人に五百本の柵を植栽さす。
一、六八五	二年	伊東領内より、人体二十三人、家内男女、七十七人、山之口へ欠落。
一、六八七	四年	柵寝清雄、命により一里塚を修補す。
一、六八八	元禄 元年	水戸藩士、佐々宗淳、古書採訪のため薩摩に来る（貞享三年）
一、六九〇	三年	佳例川に山神社建立（不動寺七世権大僧都）。
一、六九二	五年	霧島山噴火、降灰数日におよぶ。
一、六九四	七年	是歳、伊地知重張、文書採訪のため徳之島に渡り、同地に没す。
一、六九八	十一年	地頭島津大蔵。有川新左エ門を祭る有川神社創建（麓、角士田坂）
一、七〇五	宝永 二年	島津光久死去。世子吉貴に部屋栖料三万石を給す。
一、七〇六	三年	尚貞、甘諸苗を種子島久基に贈る。これを種子島石寺野に植栽す。
一、七〇九	六年	是歳、山川児ヶ水の人、前田利右エ門琉球より甘諸を招来し、これを郷里に試植し、ついで世に普及す。
一、七一〇	正徳 元年	出水・大口・高岡街道でける。地頭新納舎人。
一、七一一	二年	清水、郡田川に堰堤を築き、清水・国分・西国分に灌漑す。
一、七一二	三年	藩内、主要街道に一里塚、松並木を植栽す。鹿児島・重富・浜之市・敷根・垂水・新城・花岡（起点照
一、七一三	四年	国神社前）新城麓に18里塚。
一、七一四	五年	前年来一向門徒を自首せしめ、其の数千人におよぶ。肝付久兼死去。
一、七一五	六年	岡町の称を野町と改む。国分宮内原新田工事に着手す。
一、七一六	享保 元年	郡奉行、汾陽盛常。
一、七一七	二年	地頭種子島十左エ門。
一、七一八	三年	国分宮内原新田竣工。霧島山噴火。名僧空順の布教。
一、七一九	四年	霧島山噴火、錫杖院および民家焼失し、田畑埋没す。

一、七七八	三年	肝付兼柄死去す。
一、七二一	六年	吉貴隠居し、繼豊襲封す。吉貴隠居料として国分與藏入より高一万五千石をわかつ。
一、七二二	七年	幕府、諸藩の高万石につき米百石を納めしめ、参勤の期を緩くす（上ケ米制）。
一、七二三	八年	飯富神社宝殿建立。
一、七二五	十年	諸所・役人・與頭・横目に宗門方加役を命ず。
一、七二六	十一年	内検丈量を終る。馬追終了後、駒壺疋、宮浦大明神へ奉納。 島津貴久、馬追い張行のころよりの慣例也（地頭山田利安）。
一、七二六	十三年	今後は駒代として金子百疋に替えて奉納する旨仰付らる。（地頭島津内記）
一、七三一	十六年	諸外城飢饉、笹の実を食料とする。米価下落し、真米五升で百文。 地頭蒲生十郎右エ門。
一、七三二	十七年	佳例川宇氣母智神社創建。西国筋一帯飢饉、薩藩甘藷あるを以て飢民なし。
一、七三三	十八年	柏原浦に六齋市立を免許す。
一、七三四	十九年	出水五万石溝竣工す。
一、七三六	元文 元年	吉貴の需に応じて、琉球より江南竹二株を送り来る。
一、七三七	二年	宗門手札改を行ふ。
一、七四一	寛保 元年	是歳、垂水井河溝竣工す。
一、七四五	延享 二年	是歳、大島貢租に換糖上納を行ふ。砂糖一斤につき米三合六勺を定率とす。島津繼豊・宗信公・重年公 と福山牧の馬追い張行。地頭飯屋に五日滞在。宮浦神社に正一位宣下、官幣奉納となる。
一、七四六	三年	諸出銀の額を半減して、四年間賦課と定め、諸役料等五分引八月以降四年間実施。繼豊隠居し、宗信襲 封。是歳、繼豊隠居料として、国分與の内より高一万五千石をわかつ。諸土重出米の制を定む。
一、七四七	四年	脇元の六齋市立を免許す。吉貴死去。重出米・出銀を免じ、諸役料等の五分引を中止す。
一、七四八	寛延 元年	小陣ヶ丘、牟礼大明神創建。古江街道の海道町に六地藏塔。

一、七四九	二年	山下藤太左エ門牧場の碑、福地へ、惣津ヶ丘（一、七四九）へ、小陣ヶ丘（一、八〇二）と移築している。
一、七五〇	三年	水手屋敷一畝につき、棕櫚一本植付と定む。大風水害。加治木家島津久門（重年）宗家を嗣ぐ。又重出米復活す。重年の長子善次郎（重豪）加治木家を嗣ぐ。
一、七五二	三年	皆吉統安等実学党十人を処罰す。
一、七五三	二年	宝曆 宮浦神社へ正一位宣下、従二位卜部兼雄筆の勅額下賜さる。
一、七五四	三年	美濃・尾張・伊勢川々普請（木曾川治水工事）手伝の幕命を受く。
一、七五五	四年	木曾川治水工事着工、工事掛藩吏永吉惣兵工自刃、病死者続出85名におよぶ。地頭北郷助太夫。
一、七五六	五年	木曾川治水工事竣工、総奉行平田正輔自刃す。
一、七六一	六年	是歳、徳之島飢饉、鹿児島および琉球より米を送るも、飢死三千人におよぶ。
一、七六二	十一年	幕府国目付京極高直・青山成存、鹿児島に到り、封内・琉球地図および地誌要略二冊をこれに呈す。
一、七六三	十二年	是冬前年来徳之島飢饉につき、三間切古未進反上物を棄損し、甘蔗植付を命ず。
一、七六四	十一年	是歳、緊縮を令し、また出銀・重出米の賦課を達す。
一、七六五	十二年	江戸芝藩邸・守殿ともに類焼し、幕府より金二万両の貸附を受く。
一、七六六	元年	厚地次兵工政盛、藩主へ献金。
一、七六七	二年	是歳、肥後に拔馬あるを以て、山野の袴川内・石井川内に辺路番を置く。
一、七六八	四年	今後、三・四か年間の人別牛馬船出等の出銀を達す。
一、七六九	五年	藩主重年、福山地頭飯屋に一泊す。重豪、南山俗語考の編集に着手す。是歳、大島に白糖製造を始めしむ。
一、七七〇	六年	七年間の嚴重倭約を達す。四年間重出米一升五合賦課を達す。
一、七七一	七年	重豪、吾平山上陵の神殿を修造し、神霊を勧請す。
一、七七二	八年	重豪、郡山遜志等をして君道を編せしむ。

一、七七〇	七年	地頭高橋縫殿。
一、七七一	八年	医官、田村藍水、琉球産物志十五巻を編集す。
一、七七二	安永元年	重豪、家中言語・容貌の粗野なるを戒む。商人招致のため居附・縁組等勝手次第と令す。是秋、宗門手札改めを施行す。
一、七七三	二年	聖堂および武芸稽古所の創建を令す。医学館建設に着手、重豪、田村藍水と小野蘭山の門を医学養成所たらしむ。
一、七七四	三年	是歳、重豪、成形実録（成形図説の前身）の編集に着手せしむ。厚地次兵エ、藩主重豪へ米三千石献納。
一、七七六	五年	琉球王撰政読谷山王子朝英来鹿。 明年以降、藩内再度の七年間儉約を命ず。 厚地政次、藩主重豪へ銀60貫目献納。
一、七七八	七年	郡奉行堀仁右エ門に納戸銀余計を以て、田畑・塩浜を開発せしむ。 重豪三女茂姫（広大院）、徳川豊千代（家齋）へ縁與達せらる。 諸所の役人・下役人に令し、講の宗門疑わしきは申し出でしむ。 浦抱諸所浦役の内に宗門方加役を命ず、是歳、城下に織局を設く。 是歳、国分與より更に高一万石を納戸方に入れる（前回と併せて二万石）。大島に煙草流行し、大島代官煙草作を禁ず。大島・喜界島・徳之島の三島に砂糖惣買入れを達すという。
一、七七九	八年	諸所嘯・役人・與頭・横目の宗門方加役を各二人に増す。 納戸方新田開発を中止す。農民困窮の故、他領商人の枕・小間物等を齎来するを禁ず。 福山南園失火類焼、厚地次兵エ罹災者救済（米五石五斗三升、錢六十六貫文）。桜島噴火、死者百五十人、家屋五百戸、田畑の被害二万石、牧馬大被害。暴風雨もあり、米価高騰し、飢餓者多数、村内困窮者を厚地家より救済（四石三斗五升）。
一、七八〇	九年	吉田清純没す。桜島近傍二島（新島・燃島合して一島、安永島なり）。恵美須島も噴出す。外城衆中を郷

一、七八一	天明元年	士または外城郷士と改む。福山牧の被害甚大、馬の死傷千余疋。牧の一部を縮少す。藩主重豪、末吉烏帽子野より馬を移す。福地・福沢を開発す。西目方面より、新原・川路原に移住、福沢村を建てる（郷士6戸、農家87か88戸）。是歳、富山売薬商人の封内行商を停止。植物学者佐藤中陵を招聘す。
一、七八二	二年	重豪長子重堯（齊宣）部屋栖料として、五万石方より分つ。
一、七八三	三年	是歳倭約年限七年間延長す。福地村を建てる（牛根・都城士30戸、農家80戸を移住さす）。地頭新納織部。功才を名主と改める。是春前年来米価騰貴し、一升錢百文に至る。城下士民に米を廉売す。外城郷士の称を止め、専ら郷士と称す。是歳、富山売薬商人に越中八尾町人として13人脚の行商免許す。佐藤中陵、鹿児島を辞す。古河古松軒、鹿児島に来る。
一、七八四	四年	天然痘流行、罹患者多数、厚地家窮民を救済す。持留地を抱地と改む。外城を郷、鹿児島近名を近村または近在と改める。城下士を大番と改める。是歳、島津久徴、加治木に毓英館を建てる。風水害、城下にて米を廉売す。福山大廻大火、厚地家救民救済。
一、七八六	六年	大番を小姓興、興頭を小姓番頭と改め、郷士を大番格とす。薩隅風水害、田畑の被害多く、死傷者を出す。
一、七八七	七年	重豪隠居し、齊宣襲封し、重豪なお藩政を介助す。若年寄を談合役・諸役・旅家老と称するを停止す。唐紙模製のため、琉球より新垣仁屋を鹿児島に召し、代々小人に転籍す。陪臣たる家来・下男・下人をすべて家来と称す。是歳、再び富山売薬商人の行商を停止す。吉田喜三次、芹ヶ野金山稼行の免許を受け、後に加治木町人森山太助に譲る。
一、七八八	八年	川路原に稲荷神社建立。福地・福沢の開発軌道にのる。福山牧の立所70余か所、立所毎におすの良馬疋正に對し、めす馬数十頭を置く。厚地政倚、藩主齊宣公へ、金四千八百両余、銀百四十一貫、米三千二百石獻納する。（天明八年より寛政元年まで）
一、七八九	寛政元年	琉球飢饉につき、出米の内五百石の払下げを許す。大島に白糖試製を命ず。富山売薬商人、領内居附人

一、八九一	三年	として合衆行商十六人脚を免許さる。 福山大火、宮浦神社類焼。凶作連年つづく。重豪藩政介助停止の意を示す、斉宣その名目のみのこす。 牟礼野牧を廃止。
一、八九二	四年	重豪、曾繁を招き、記室とす。同心を足輕の旧称に復す。重豪、曾繁に命じ、人参を大隅・日向に植えしむ。白尾国柱、神代山陵考を編集。高山彦九郎薩摩に来る。厚地次郎右エ門、藩主へ財政援助、銀方係へ拔擢さる。久田村火災。夏天然痘流行。重豪、介助を停止す。
一、七九三	五年	金貞（6代目星山仲次）、命により諸国焼物見習に赴き、備前・京都・河内・尾張・近江等を経て、翌年正月鹿兒島に帰る。大島の白糖製造勸奨を中止す。重豪、曾繁・白尾国柱等に成形図説の編輯を命ず。芹ヶ野金山の稼行を休止す。
一、七九四	六年	牧馬神を福地より総津が丘に移す。総陣ヶ丘に華表創建。地頭伊集院六左エ門。曾繁、江戸に至り、農経講義をあらわす。
一、七九五	七年	白尾国柱、寛藩名勝考をあらわす。
一、七九六	八年	今年以降三年間重出米二升を賦課す。
一、七九七	九年	福山大火、大安寺類焼。山本正誼、島津国史編集を主宰す。
一、七九八	十年	福山大火、厚地家、罹災者を救済す。宝暦七年以降当秋までの古未進・飢米を棄捐す。
一、七九九	十一年	地頭高田猛太夫。今年以降、石別三合米を課徴す。富山売薬商人の行商を停止す。
一、八〇〇	十二年	浜之市新田竣工す。安永島に住民を移す。
一、八〇一	享和元年	鹿籠金山不況休山とす。後に山師中願により自稼を許す。借入金銀米銭利息明年以後二朱に引下げに決定す。富山売薬商人の行商を免許す。
一、八〇二	二年	小陣ヶ丘に牧馬神を移す（牧神岡）福山移牧馬神記念碑。
一、八〇四	文化元年	成形図説、一部30巻上梓す。大隅半島（東目）へ薩摩半島（西目）よりの移住（人配）盛行す。
一、八〇五	二年	斉宣、鶴亀問島一冊を作り、藩政改革の意を示す。赤崎貞幹死去。

一、八〇七	四年	勝手方家老新納久命等を貶斥し、樺山久言家老に任ず。秩父季保家老に任ず。
一、八〇八	五年	諸郷鷹場を廃す。人別一匁出銀および牛馬・船出銀を免除す。春秋稲葉（孔子を祭る）を一応廃止す。加治木領主島津久照・久徴を譴責す。秩父季保・樺山久言両家老、自刃を命ぜらる。重豪、再び藩政を介助す。五年間人別一匁出銀賦課を命ず。山本正誼死去。藩主斉宣、厚地家に来遊す。地頭森山三十。五年間嚴重省略（倭約）を達す。
一、八〇九	六年	斉宣隠居し、斉興襲封す。
一、八一〇	七年	幕府天文方、伊能忠敬封内測量に着手。伊能忠敬の測量、総勢20名、志布志より開始、坂部貞兵エの測量班は波見・柏原・池平・串良・鹿屋・福山・都城。重留門の農民仙五郎、藩主より表彰、石碑建立。
一、八一一	八年	地頭森十左エ門。鹿屋高須浦、浦町となり、六磨市立を免許さる。
一、八一二	九年	重豪、大崎・大井・白金の別荘に宇治茶を栽培せしむ。南山俗語考、版に付す。
一、八一三	十年	七年間倭約年限を延長す。
一、八一四	十一年	参勤供立、人数、減少を許さる。白尾国柱、重豪の命で、神代三陵取調書を作る。
一、八一五	十二年	重豪、橋口兼古に命じて、薩摩勝景百図および図考を編集せしめ、幕府に呈す。
一、八一六	十三年	地頭堀殿衛。飯富神社鳥居造立。明年より二年間、重出米城下土一升五合、郷土二升二合の賦課を達す。
一、八一七	十四年	斉宣、総髪して溪山と号す。藩財政難渋、厚地政倚、金千七百両を献金。藩主斉興都城へ下向す、佳例川の士、前田清規（十六才）先導役をつとむ。斉興、串良へ鷹野につき、福山地頭飯屋に米泊。
一、八一八	文政 元年	地頭、田原喜左エ門。
一、八一九	二年	牛根、笠仏首塚（六地藏塔）。大阪銀主等、薩藩に一切貸出しを拒む。
一、八二〇	三年	大廻、羽山神社、松下猪兵エ・藤原兼郷等によって創建さる。福山酢創始者、竹之下松兵エ酢造りを始める。重豪、藩政介助を停止す。
一、八二一	四年	白尾国柱死去。藩主斉興、厚地家へ来遊。鹿児島大火、下町中焼失す。
一、八二三	六年	福沢、稻荷神社再興。

一、八二五	八年	阿久根郷士、山城宇治に赴き、製茶を伝習し、阿久根茶を名産となす。種子島に初めて甘蔗を植栽す。 地頭、島津守右エ門。
一、八二六	九年	重豪、斉彬・奥平昌高とオランダ商館長、参府随行のシーボルトを迎えて会談す。
一、八二七	十年	藩債五百万両に達し、財政困難。桐野大兵エ、製糖を免許され、桜島・垂水で開始す。
一、八二八	十一年	厚地喜左エ門（安永八年）桜島噴火の覚書。当分、地頭と同名故に厚地儀兵エと称す。桜島・垂水・福山に甘蔗を栽培す。斉興、祖父重豪の提唱による藩財政整備計画推進す。末川久備（新城領主）調所笑左エ門を家老に抜擢す、新城家久備には御用達、岩元家の資金援助あり。国分小村新田、浜之市新田、加治木新田等六カ所新田開発す。
一、八二九	十二年	鹿児島城下木屋町を金生町と改め、幕府の免許を受く。
一、八三〇	元年	大島・喜界島・徳之島三島砂糖の惣買入法（専売）に着手。重豪・斉興、調所広郷に朱印の書付を附し、明年以降十年間に金五十万両貯蓄、古債証文回収等を命ず。
一、八三二	三年	重豪米寿を賀す。
一、八三三	四年	地頭、東郷半助。調所広郷、家老側詰兼務に任ず。
一、八三四	五年	立元善太郎誕生。
一、八三六	七年	幕府へ謝恩として金十万両を納める。
一、八三七	八年	米国船モリソン号、佐多岬に来航、石工岩永三五郎、福山宮下の石垣を築く。藩債年賦償還法を江戸に実行す。
一、八三八	九年	地頭、頼娃織部。
一、八三九	十年	立山嘉兵エ誕生。筑後松崎より技師を招聘し、生ろお石の絞りを試みる。出水郷士を長崎に派遣、楮の植栽の伝習を受けしむ。諸所に一向宗門徒を検挙す。
一、八四〇	十一年	財政改革成功し、諸宮繕用途二百万両・藩庫金五十万両を貯蓄す。
一、八四二	十三年	上見部下りを廃し、納枿を改正す。

一、八四三	十四年	三国名勝図会上梓す。
一、八四四	弘化元年	厚地政純、村内困窮者を救済。フランス東洋艦隊、那覇港に入港す。
一、八四五	二年	藩主斉興、福山厚地家へ来泊す。飯富神社鳥居造立。国分小村新田工事に着手す。
一、八四八	嘉永元年	福沢吉野開田、斉興、福山厚地次兵エ宅に来泊、福山牧を視察（東目20郷を巡見し、各所に砲術練習を聞す）。地頭、島津藏人。調所広郷死去、二階堂行健に事務継承。
一、八四九	二年	斉興、東目諸郷を巡見す。高野長英、鹿児島に到る。嘉永朋党の処分相つき、山田清安等自刃を命ぜらる。
一、八五一	四年	斉興隠居、斉彬襲封。土佐漂民ジョン万次郎米船より琉球麻文仁に上陸す。
一、八五二	五年	斉彬、常平倉の法大意を訓諭す。土風矯正と勤儉の布令を出す。砲術訓練開始。砲術と蒸気船建造等の伝習生徒を長崎に派遣す。勸農等条令八章を諭告す。
一、八五三	六年	江戸の鋳物師西村道弥を招聘し、鋳製法を伝えしむ。幕府に稟して、大船十二隻、蒸気船三隻の建造の許可を請い、日の丸の船章を建議す。斉彬、封内東目を巡見し、翌月帰城。斉彬、国分清水、日吉山王社に参詣。領内警備隊の編成。
一、八五四	安政元年	桜島と牛根で大船四隻建造に着手。帖佐鉄山に石見鋼吹きを招聘す。地頭島津藤馬。
一、八五五	二年	斉彬かさねて節儉を布告。初めて鹿児島に西洋通事を置く。
一、八五六	三年	斉彬養女敬子（篤姫）、近衛忠熙養女として、将軍家定に嫁す。
一、八五七	四年	小陣ヶ丘石灯籠寄進。薩摩藩江戸築地屋敷で国産品売捌開始。
一、八五八	五年	田中省三誕生。幕府伝習船鹿児島港へ入港。鹿児島鶴丸城より国分舞鶴城へ、藩庁疎開案あり。斉彬急逝す。安政の大獄。忠徳、暁姫の甥養子として襲封し、斉興これを介助す。八木玄悦、蘭医ポンペの著書を翻譯し、散花小言を編す。川辺郡農民と郷士等、苛政と一向宗弾圧に抵抗す。
一、八五九	六年	地頭、諏訪数馬。茂久、大久保利通等に、誠忠士の面々へとして手書を授け、勤王の深意を告ぐ、よって一同感激して脱藩を中止す。

一、八六〇	万延	元年	桜田門事変。桜島の噴火つづく。
一資八六一	文久	元年	忠教、宗家に復帰して久光と改名す。久光、国事周旋を決意し、家老島津久徴を斥け、喜入久高を家老とす。平野国臣、鹿児島に到り、久光に尊攘英断録を呈す。
一、八六二		二年	伏見寺田屋事件。武蔵生麦事件。犬田布騒動。地頭、三原藤五郎。池之谷福山牧の廃牧はじまる。
一、八六三		三年	薩英戦争。忠義、厚地次兵エ宅に来遊。福山牧廃止。
一、八六四	元治	元年	禁門の変。地頭、二階堂源太夫（正月）。地頭、堀四郎左エ門（九月）。忠義、厚地次兵エ宅に来遊。
一、八六五	慶応	元年	列国艦隊摂海進入につき、大身分以下諸士・郷士・野町まで富裕者に用金を課す。厚地政純、忠義へ四百両献金。
一、八六六		二年	西郷隆盛、大久保利通、小松清廉、坂本龍馬の媒介によって、木戸孝充等と議し、薩長連合を約す。米価高騰錢百文で米一合五勺。農民一揆、幕末ピークとなる。
一、八六七		三年	王政復古大号令渙発。
一、八六八	明治	元年	藩主久光、富豪と門閥諸家に貸上金を促す。厚地政純金三十両献納す。このころ米一升五錢、藩役場を廃合、役人を減じ、一門以下の大身に家政の緊縮を命ず。大坂にて藩債六万両借上げる。神仏分離を藩内に布告し、ついで寺院を廃合す。戊辰の役、凱旋兵士等門閥打破と藩政の根本的改革を藩庁に迫る。
一、八六九		二年	小松清廉、私領を返上、一所持たるの家格を辞さんことを請う。門閥諸家、これに倣う。噯・與頭・横目を廃し、小隊長以下を置き、諸郷常備隊を編成す。諸郷居住の郷士ならびに同格を伝事方附士とす。藩内寺領没収、私領返上を許可。藩士を士族・卒と改め、農・工・商を平民とす。武士の商業・日傭を禁止。旧私領家来を藩の直臣とし、外城衆中を城下士同様に昇格す。和泉和助、人力車を発明。上州より製糸指南人を雇入れる。厚地政純、軍役費を寄附（三年？）島津家と藩内士民祖先の祭祀を神式に改める。
一、八七〇		三年	士族自裁の風を止め、公裁を受けしむ。抱地を自作地と改称し、その反別を四町以下に制限し、また他郷自作地を禁ず。郷士持高兼併の弊を戒む。祖法改正を布告す。検地、高二七七九石六斗六升三合、人

一、八七三	<p>六年</p> <p>員四九〇三人、戸数九九八戸。田地地租は米納、畑方は石代納とする。平民の苗字の称を許可す。鹿児島藩では明治8年にも布告し、催促する。検地実施、城下屋敷と近在田畑より着手す。</p> <p>洋学局を廃し、本学校ならびに小学第一・第二両校を建つ。高見馬場郷校を第一郷校とす。忠義、両小學校を視察。垂水學校を外城第一郷校、指宿正明館を同二郷校とす。藩士拝借金利率を一割に引上げる。三升重出米を廃す。諸士拝借金八割を棄捐す。薩隅日三国の七県を廢し、鹿児島・都城・美々津の三県を置く。茶の専売を解き、国産會社を設立。山野の開墾を奨励し、20年間免租とす。斷髮・廢刀、戸籍法施行。士族・平民間の通婚許可。鹿児島藩海軍方を廢止。福山は都城県曾於郡福山郷に編入さる。宮浦神社は県社となる。政府は各藩に贖札改所の設置を命じ、取締を強化させる。平民の乗馬を許可。一般農民の米販売許可される。米麦移出許可。田畑勝手作を許可。微禄・無高の鹿児島士族に救助米年額六石を支給す。</p>
一、八七二	<p>五年</p> <p>都城県庁開設、都城県参事桂久武。このころ郡制をしき、郡長・副長・里正・副正・戸長等を置く。附屬長・足輕・船方附を卒とし、附屬を平民に編入し、家来、下人の名称を廢す。士族の他郷自作地の禁を緩和す。都城県所管の大隅国始羅・菱刈両郡と桑原郡の内、栗野・横川両郷を鹿児島県に合併。士族の知行制を廢し、所務米のみを県庁より交付。附士卒を士族に編入する。旧藩以来の雑税の一部を廢す。諸島の貢糖を廢し、石代金納を許す、大蔵当局これを許さず。三島砂糖専売廢止、大島商社設立。学制公布により既設の郷校を以て変則小学校にあてて。郡長を大区戸長と改める。自作地に関する反別制限を廢す。人口調査実施三、三一一万人（男一、六七九万人、女一、六三一万人）。戸籍簿（壬申戸籍）を作成。僕・婢・娼妓解放布告。太陰曆を廢し、太陽曆を採用す（十二月三日をもって明治六年一月一日とする）。福山第45郷校設立に平原篤信尽力す。第一村校佳例川小学校開校。</p>
一、八七三	<p>四年</p> <p>都城・美々津両県を廢し、大隅国を鹿児島県に併せ、日向国一円をもって宮崎県を新設す。福山郷は鹿児島県に編入される。男女6歳以上就学きまる。比曾木野尋常小学校・福沢尋常小学校を開校。徴兵令布告。本県士族出米八升一合米を諸郷に交付し、學校資本と窮士援助費に充当す。石高の称を廢し、反</p>

一、八七四	七年	別賦課に改める。本県族別人口、平民・五六八、六四三人（73.6%）（全国では三一、一〇六、五一四人、98.9%）、士卒・二〇三、七十一人（26.4%）（全国では一、八九五、二七八人、0.6%）、僧侶・神官不詳。各大区に戸長役所を設く。地租改正条例公布。郡治所を廃し、県下に六支庁管区に分つ。戊辰の役従軍者に支給せる軍功禄を賞典録に改む。地券掛を置き、一般地々券発行に着手す。遊芸・興行を厳禁す。朝鮮問題に関する閣議決裂、ついで西郷隆盛等下野。米・酒等の公定価格を廃す。第五国立銀行鹿児島支店開業。華族・士族・平民間の養子縁組許可。福山郵便取扱所開設。磯街道開通す。
一、八七五	八年	各大区に区長を置く。県下主要路線に郵便開通す。無税屋敷地に地租を賦課す。佳例川第一村校創立。福山に区長事務扱所設置（財部・末吉・岩川・市成・恒吉）。 隈之城・垂水・知覧・栗野等に医院の支病院を設く。警察局を設立し、三警察出張所を置く。取締・捕亡を改めて邏卒とす。本学校を变則中学校と改める。旧藩札処分完結す。諸郷々校の初級一級生に正則教育を施す。霧島神宮教会講社設立認可。旧鹿児島藩士族の家禄売買を公認する。正則による小学教育の施行を達す。警察局を鹿児島警察署と改む、邏卒を廃し、警部巡查を置く。全国民に苗字を使用させる。福山波止場修築費を厚地政純寄附。立山善太郎死去（42歳）。学制改正、上等・下等を設ける。本県变則小学校規則を定む、従来の郷校を改称す。
一、八七六	九年	小学校一校に正則を施行し、鶴嶺小学校改称。小学正則講習所、同女子講習所を鹿児島師範学校、同女子師範学校と改称す。地租改正に着手。宮崎県を廃して、鹿児島県に併せ、宮崎支庁を置く。变則中学校を廃し、英語学校と准中学校を設立す。信教の自由を公認す。真宗大谷派別院を鹿児島に設く。西本願寺執事大洲鉄然等来県。大川謙治を招聘し、福山の教育を振興。佳例川第一小学校、福地・福沢・比曾木野小学校に改称す。鹿児島島の形勢不穩、平原篤信のもとに檄がとぶ、私学校に集まれ。
一、八七七	十年	私学校徒、草牟田陸軍火薬庫と磯海軍造船所を襲い、彈藥銃器を奪う。西郷隆盛、率兵上京の途につく。別府晋介、国分に募兵にくる。県庁福山出張所開設（福山・敷根・恒吉・末吉・岩川・財部・百引・市成）福山も官軍上陸地点として兵火にあい、学校等閉鎖。厚地政純・大川謙治学校再建に奔走す。地租

一、八七八	十一年	<p>百分の二十五、民費は地租の五分の一以内に軽減。征討軍第一旅団、垂水に上陸、肝属・曾於地方に進撃、第三旅団は比志島・蒲生・襲山方面に進撃、県庁田之浦出張所を鹿児島市に移し、福山・菱刈・宮之城にも出張所を置く。西郷隆盛自刃、城山陥落す。</p> <p>師範学校附属小学校設立。警視署・派出所を警察署・分署と改称す、福山分署開設。県立鹿児島中学校再建。福山小学校の復興費を厚地政純寄附。佳例川小学校・福地小学校（牛根郷）と改称す。県庁福山出張所廃止。</p>
一、八七九	十二年	<p>郡区轄と郡役所の新設。第四百七十七国立銀行開業。福山郷（福山浦町・福山村・佳例川村・福沢村の四村）。福山と鹿児島間に小型汽船就航（せいよう丸・一五〇、）。</p>
一、八八〇	十三年	<p>第一回県会、町村会施行。国分分署、福山派出所となる。厚地政純、新島漂着者救助援護す。男女両師範学校を合併、鹿児島師範学校と総称す。</p>
一、八八一	十四年	<p>福山酢、内国博覧会で表彰を受く。厚地政純、コレラ予防費を寄附。本県学齡児童就学率、薩摩（6%、大隅7%、日向6%）（女子皆無）。鹿児島新聞創刊。春よりコレラ病発生蔓延す。産馬競進会開催。</p>
一、八八二	十五年	<p>鹿児島測候所創立。学制改正、初等・中等・高等の制定。大川謙治辞職し、厚地政清就任。</p>
一、八八三	十六年	<p>福山尋常高等小学校第一回卒業生を出す。宮崎県を再び設置、日向国南諸県郡を新設。第二回九州沖縄八県連合共進会を鹿児島で開催。学区（一九一）、小学校（七五五）数の制定。</p>
一、八八四	十七年	<p>県下で大暴風家屋倒壊（二万五千四百余戸）、福山被害甚大、移住者多数。飯富神社、境内のモミの木倒れ、社殿再興。戸長役場区画、曾於郡福山郷（福山村・福山浦町・福沢村・佳例川村・牛根郷の内の福地村）。</p>
一、八八五	十八年	<p>福山に浄土真宗の説教所（西念寺）を設く。福山尋常高等小学校長山元盛着任。コレラ流行し、ごろい墓（御前水の下附近）。</p>
一、八八六	十九年	<p>国分分署、国分警察署と改称。師範学校令・中学校令・小学校令・諸学校通則公布。小学校正式に高等小学校と尋常小学校に分つ。学制改正により、高等科・尋常科・簡易科とす。福山小学校は高等・尋常</p>

一、八八七	二十年	<p>を併置、福地・福沢は簡易小学校に改称、大暴風、家屋倒壊千七百五十二戸。未曾有の痘瘡猖獗、翌年にはいつてもやまず。</p> <p>国分警察署福山分署に改称。大隅・伊佐・曾於各郡を二分す、曾於郡が東曾於郡と西曾於郡とに二分す。牛根郷福地村を福山村に編入す。第1期道路開さく計画着手、24年完了予定。島津久光死去。森有礼文部大臣、福山小学校に來校。</p>
一、八八八	二十一年	<p>県立中学造士館を官立高等学校に改称。鹿児島大隊区司令部開設。福山・垂水・古江航路開設（折田汽船）。地租改正後創設された本県農家の崩壊（小作人へ転落）、改正より7年目で、自作33%、自作兼小作53%、純小作14%、2町〜10町までの地主二五、二八〇戸、一〇町以上の地主九六六戸。6歳以上の者（六六四、二五一人中、自分の姓名を書ける者一五〇、九三八人（男一三一、六三七人、女一九、三〇一人）（22.7%）。</p>
一、八八九	二十二年	<p>大日本帝国憲法発布。鹿児島市制実施。町村制実施、福山は西曾於郡福山町として発足。福山尋常高等小学校に御真影を下賜さる。敷根・亀割峠・牧之原間に国道開通。福山郷を福山村に改め、福山村他4ヶ村を大字に改め、戸長役場を村役場に改める。村長、厚地政徳。</p>
一、八九〇	二十三年	<p>第1回帝国議會。県下にコレラ流行（福山も罹患者多数）。教育勅語発布。小学校令の改正。市町村区画改正、西曾於郡福山村（福山・福山浦・福沢・佳例川・福地）。村長、松下織之介。</p>
一、八九一	二十四年	<p>露国皇太子ニコラス親王殿下、ギリシア第2皇子ジョージ殿下鹿児島に來航。</p>
一、八九二	二十五年	<p>第2期道路開さく計画着手、29年完了予定。福山・岩川間、福山・市成間の県道開通。改正小学校令公布、勅令215号により修業年限4か年となる。福山小学校長、厚地政清辞任し、厚地政種就任す。広島西念寺住職、西寺靈城布教のため來村す。佳例川尋常高等小学校校舍改築。</p>
一、八九三	二十六年	<p>国分警察署福山分署廃止。不況のため失業者続出（日当は土工10〜12銭・職人25〜35銭・米一升10銭）加納久宜知事就任。県立尋常中学校設立。簡易商業学校の設置。鹿児島市女子実業補習学校設置。清国</p>
一、八九四	二十七年	<p>に対する宣戰の詔勅下る。説教所を廃止し、寺院を建立。翌年にかけて赤痢・痘瘡・コレラ猖獗をきわ</p>

一、八九五	二十八年	める。村長、黒丸市助。 日清平和克服につき詔勅を賜う。三国干涉。西寺靈城師、福山永住の決意をかためる。福沢小学校校舎改築。大暴風雨。村長、厚地政清。
一、八九六	二十九年	鹿児島簡易農学校設置。福山村は西曾於郡からわかれて、始良郡に編入する。南諸県郡を大隅国曾於郡に編入。加納知事、県下の柑橘の品種を統一す。鹿児島県尋常中学造士館開校。
一、八九七	三十年	第3期道路開さく計画着手、39年度完了予定。鹿児島県尋常中学校第1分校を東水引村宮内に、第2分校を加治木反土に設置す。大廻に北山神社建立（寺屋敷熊太郎募金）建神社ともよぶ。
一、八九八	三十一年	佳例川尋常高等小学校に補習科（修業年限2か年）を設置す。日本人の平均寿命（24→31年、男42.8歳・女44.3歳）。村長、西大海。
一、八九九	三十二年	大暴風、全壊家屋一万六千余戸。福山酢株式会社組織となる。中学校令改正（尋常の名称を廃止）、実業学校令、高等女学校令公布。福山尋常高等小学校、工費八千円で、校舎改築、落成式に加納久宜知事参列す。国鉄肥薩線、鹿児島口より着工、八代口は34年着工。
一、九〇〇	三十三年	鹿児島県農学校を鹿屋に移転、県立鹿屋農学校と改称す。県立農事試験場開設。始良郡産牛馬組合設立。県農会に模範果樹園を開設させる。福山小に高等科・補習科（2か年制）を設置。千頭清臣知事就任。
一、九〇一	三十四年	鹿児島・国分（現在の隼人駅）間鉄道開通す。福山尋常高等小学校は補習科を廃止す。佳例川尋常高等小学校は補習科を高等科（2年制）に変更。小学校令改正により6年制となる。
一、九〇二	三十五年	鹿児島県立高等女学校設立。福山村報徳会設立（幹事厚地政種）。鹿児島・福山港間に小型旅客船就航す。村長、河原定利退任、中島貞広村長就任。
一、九〇三	三十六年	愛国婦人会鹿児島支部成立。女子徒弟興業学校を鹿児島市立興業学校と改称す。国分（現在の隼人駅）、吉松間鉄道開通（客車5人掛、ござ椅子、ランプ）。麓の角士田に有川神社を創建。乗合自動車営業取締規則制定。
一、九〇四	三十七年	露国に対する宣戦の大詔渙発さる。簡易商業学校を鹿児島市立商業学校と改める。鹿児島・谷山間乗合

一、九〇五	三十八年	自動車営業。西念寺西寺靈城師死去、宮之城信教寺、野崎流天師兼務。竈門神社改築。国定教科書実施、「イエ・スシ」、「ハタ・タコ・コマ」(43年)、「ハナ・ハト・マメ・マス」(大正8年)、「サイタ・サイタ・サクラガサイタ」(昭和8年)。
一、九〇六	三十九年	福山村愛国婦人会結成、福山村青年団結成。日露講和条約調印。国有林三八八町四反三畝余歩を比曾木野地区に払下げ、内一畝二十九歩を小学校学林地とす。軍人カーキ色服着用、巻煙草はまれ(5銭)発売(大正2年から軍人専用化)。鹿児島築港竣工式。
一、九〇七	四十年	県立鹿児島中学校を県立鹿児島第一中学校と改称し、県立鹿児島中学校分校を独立せしめて県立鹿児島第二中学校と称す。村長、中島貞広退任、中尾直一郎村長就任。
一、九〇八	四十一年	県営牧之原種畜場開設。小学校令改正(尋常科を6年・高等科を2年制に改正)。福山小学校女子補習学校を併設。佳例川小学校、前田より現在地へ移転。第4期道路開さく計画着手、45年度完了予定。
一、九〇九	四十二年	閑院宮載仁親王、宮崎へ向う途中、牧之原で休憩。義務教育4年から6年に延長さる。福山小学校、川路原より現在地へ移転。国分駅(現在の隼人駅)人力車営業開始。巡查派出所を交番と改称。八代・人吉間鉄道開通す。県立商船学校設立。鹿児島高等農林学校設立。
一、九一〇	四十三年	県立志布志中学校設立。八代・鹿児島間鉄道全線開通。鉄道開通唱歌。
一、九一一	四十四年	佐多街道、福山に開通、宮浦神社附近に乗合馬車の駅設置さる。福山小首席訓導、厚地政種辞職。伊勢小松神社村社に昇格。宇気母智社を飯富神社に合祀す。松下兼精、はじめて温州みかんを植える(42年?)。福山小校長平井政治着任。福沢小現在地に移転。福山酢製造組合発足(19業者・製造高3千石)。村長、中尾直一郎退任、中尾親記村長就任。
一、九一二	大正 元年	牧之原分教場設立、福沢小校舎建築着工。
一、九一三	大正 二年	明治天皇崩御、大正天皇踐祚。大隅鉄道株式会社設立。全国水力発電出力が火力をこえる。福山青年夜学舎創設。福山小敷地拡張校舎一棟増築(工費一万八千余円)。牛馬のせり市場、池坪坂之上から十文字へ移転。川内線、鹿児島・東市来間開通す。

一、九一四	三年	桜島大爆発（大隅と地続きになる）。川内線鉄道全通す。第一次世界大戦に日本参戦。夏秋風水害。無限責任福山信用購買組合設立。村長、中尾親記退任、厚地金次郎村長就任。
一、九一五	四年	風水害。大隅鉄道、高須・鹿屋間開通す。田中省三衆議院議員に当選（大島郡区）。福山小に御真影を下賜。
一、九一六	五年	風水害。福山小に皇后陛下の御真影を下賜。久留豊彦顕彰碑（馬匹政良・牧之原山田屋敷）
一、九一七	六年	風水害。佳例川・福地・福沢小に補習学校附設（県下77校）。佳例川・比曽木野・福地小に御真影を下賜さる。田中省三、大阪市会議員に当選し、県立鹿児島工業創立に4万円寄附。厚地金次郎村長再選。
一、九一八	七年	県立感化院牧之原学校設立。福山信用購買生産組合農業倉庫認可（県下74組合）。田中省三、私財（25万円余）を寄附し、私立福山中学校を設立（県下の中学校6校）。福山小校長平井政治依願退職す、後任丸山清一校長就任。市町村義務教育費国庫負担法公布。富山県に米騒動（一道三十七県におよぶ、八月七日、米一升五十銭突破）。村長、厚地金次郎死去、中尾親記村長就任。
一、九一九	八年	第一次世界大戦講和条約調印なる。福山町婦人会結成。宮之城西念寺靈祥、西念寺12世住職を継承す。宇都吉之助、隼人・国分間に旅客自動車運行（10年？）
一、九二〇	九年	鹿児島第二師範学校・県立出水中学校・県立工業学校開校。国勢調査（人口、九、一一〇人・一、八五七戸）。
一、九二一	十年	栗野・山野間鉄道開通。みかん園芸組合設立。福山・隼人間乗合自動車運行開始。
一、九二二	十一年	田中省三別荘（現在福山町公民館）竣工。福山信用購買生産組合、中央会鹿児島支部より表彰を受く。福山村女子青年団結成。福山中学校校舎増築（工費一万六千三百円）。村長、厚地金次郎死去、中尾親記退任、松下兼精村長就任。
一、九二三	十二年	県立鹿屋中学校開校。川辺・薩摩・出水・伊佐・始良・肝付各郡立高等女学校および宮之城蚕業学校を県に移管す。川内・米之津間鉄道開通。大隅鉄道古江・串良間開通。郡制廃止を実施。女子補習学校学校則を変更、福山村立福山実業補習学校に改称す。

一、九二四	十三年	日本水電株式会社、南九州水力電気株式会社を合併し、本県に進出。本県実業補習学校教員養成所設置。始良郡東襲山村・清水村・国分村で大小作争議（指導者のちの通信大臣富吉栄二等）厚地政種の頌徳碑建立。福山町信用購買生産組合、中央会鹿児島支部より表彰を受く。私立福山中学校より出火、校舎2棟全焼、小廻の人家64戸類焼す。
一、九二五	十四年	笠之原水道組合水道敷設工事開始。鹿児島県全部を鹿児島連隊区管轄に編入す。県庁新築落成式。国勢調査（人口九二七八人）。陸軍現役将校学校配属令公布。福山村少年少女団結成。田中省三死去（66歳）。立山嘉兵エ、消防ポンプ自動車を寄贈。末吉高等女学校を県に移管。宮之城線川内・宮之城間開通す。大正天皇崩御今上天皇踐祚。村長、松下兼精退任、入来大兵衛就任。
一、九二六	昭和元年	米之津・八代間開通し、鹿児島・八代線を鹿児島本線、旧鹿児島線を肥薩線と改称す。始良郡立加治木工業学校を県に移管す。垂水柑橘研究場開設。立山嘉兵エ死去。金融恐慌深刻化。特別高等警察課新設。今上陛下大島名瀬御入港。
一、九二七	二年	郷土部隊、中国山東半島へ出征。田中省三記念碑建立。福地小、茅ぶきから瓦ぶき校舎に改築。
一、九二八	三年	世界経済恐慌。町制実施、福山村より福山町となる（人口一、四一九人）。始良郡国分町に全国農民組合鹿児島県連合第一回大会開催。県茶業模範場を県農事試験場知覧分場とす。初代町長入来太兵衛。
一、九二九	四年	ロンドン軍縮会議、財部全権の随員として、湊慶讓出席。大豊作で米価大暴落、大正6年以来の安値、新潟では米一升と煙草敷島一個分。失業者30数万人をこえる。国勢調査（人口九、一九三人）。第百四十七銀行、薩摩銀行を買収、7年に海江田銀行を買収す。小村新田開拓工事竣工。労働党始良支部の結成。指宿線西鹿児島・五位野間開通す。
一、九三〇	五年	二川開墾地工事竣工。聖上陛下下行幸、伊敷練兵場にて御親閲。牧之原郵便局開設。飯富神社、境内拡張、宝殿を小板葺とす。満洲事変おこる。
一、九三一	六年	不況対策審議会・農山漁村経済更生委員会設置。都城・隼人間鉄道開通（現国分駅が国分駅となり、旧国分駅は西国分駅と改称したが、異議があり、隼人駅とさらに改称）。宇気母智神社境内拡張、社殿改築、
一、九三二	七年	

一、九三三	八年	瓦葺とす。ロスアンゼルスオリンピック大会に石原田愿、水泳選手として出場。 ポンカン・レモンの栽培はじまる。町長、入来太兵衛。
一、九三四	九年	福山町国防婦人会結成。立山嘉太郎、福山小奉安殿を寄贈（千七百円）。霧島山（霧島・牧園・栗野の三村）国立公園（全国三か所）に指定さる。指宿線指宿まで開通。
一、九三五	十年	市村慶三知事転任、早川三郎知事就任。政府、大隅鉄道を買収す。大元帥陛下、鹿児島御上陸、大本営に着御、国分平野（隼人獅子之丘）を中心に特別大演習。国分・垂水間に国鉄バス運行開始（12年?）。 巡査部長派出所となる。国勢調査（人口、九、一九三人、一、九三六戸）
一、九三六	十一年	ベルリンオリンピック大会に石原田愿、水泳選手として出場、千五百円で4着入賞。二・二六事件。曾於郡大崎村、町制を施行。鹿屋海軍航空隊発足。早川三郎知事転任、中村安次郎知事就任。鹿児島市営バス木炭車運転開始。左翼文化団体関係者等一斉検挙さる。
一、九三七	十二年	日華事変ぼつ発。西郷南洲銅像除幕式。紀元二千六百年奉祝県記念事業委員会発足。国民精神総動員実行委員会発足。県立農道館（阿久根町）に満洲農業移民鹿児島訓練所設置。国鉄宮之城線（川内・薩摩大口間）および山野線（水俣・栗野間）全通。飯富神社拝殿瓦葺に改築。福山水害、麓城山より山津波、家屋流失、死者13人。福山・牧之原に青年学校発足。町長、松下茂一。
一、九三八	十三年	県自作農創設奨励規則公布。中村安次郎知事転任、藏重久知事就任。国鉄古江線（志布志・古江間）全線開通。台風来襲、大隅九か町村大風水害。町長中尾廉。
一、九三九	十四年	第2次世界大戦ぼつ発。国民徴用令公布。
一、九四〇	十五年	大政翼賛会市町村支部設立。県指定史蹟、神武天皇御駐蹕地伝説地（宮ノ浦）。比曽木野小学校全校焼。国勢調査。各学校長に野生の苧麻（纖維原料）の採集、どんぐり（軍事塗料・飼料）の採集・供出を指示す。紀元二千六百年式典を鹿児島市で挙行。藤野恵知事転任、新井善太郎知事就任。
一、九四一	十六年	太平洋戦争おこる。牧之原国民学校独立。宇都助市、牛馬改良顕彰碑（牧之原山田屋敷）。尋常小学校を改め、国民学校発足。県下一斉第一回防空訓練実施。県立師範学校附属小学校で初めて給食開始。県下

一、九四二	十七年	増産学徒報国隊出動。台風来襲。市町村区画制定、福山町は福山・福沢・福地・佳例川に分ける。新井善太郎知事転任、薄田美朝知事就任。翼賛壮年団結成。全国衣料切符制となる。食塩配給制となる。国分町大野原に海軍飛行場着工。台風来襲。県食糧営団設立。町長中尾廉。
一、九四三	十八年	溝辺十三塚海軍飛行場着工、各戸より強制的に奉仕（十九年夏完成）。竹槍訓練実施。学徒戦時動員体制確立。文部省、国民教育戦時非常措置要綱発表。学徒徴兵延期停止に伴い、第一回学徒兵入隊。徴兵令改正（徴兵適齢一年引下げ）。台風来襲。薄田美朝知事転出、柴山博知事就任。
一、九四四	十九年	労力不足、肥料不足、みかん園荒廃す。垂水海軍航空隊発足。第二垂水丸転覆沈没。兵役法改正（満十八歳より）。桜島熔岩道路省営バス開通。
一、九四五	二十年	私立福山中学校県立に移官さる。本県立木伐採奨励規程公布（木造船舶その他民需用（著名な街道並木も姿を消す。砂糖家庭用配給停止。米B29、広島市・長崎市に原爆投下。ポツダム宣言受諾。柴山博退官、拓植文雄知事就任。拓植文雄退官、龍野喜一郎知事就任。福山小学校の講堂・校舎全焼。国勢調査（人口一一、一二一人、三、一七三戸）。枕崎台風による被害甚大、選挙法改正、婦人参政権。米のやみ値、公定価格の一三二倍に高騰す。
一、九四六	二十一年	桜島火山活動、部落民避難、噴出熔岩黒神部落の8割を埋没、牛根地方降灰のため農作物被害甚大。大隅開発、曾於期成同盟発足。憲法改正。天皇人間宣言。復員・外地邦人引揚開始。本町今次戦争の戦死者250名、復員軍人878名、一般引揚者1290名。県下食糧危機にそなえて大根葉、南瓜、甘藷莖葉など18種を乾燥食品に選定、県民に指示。本県失業者15万人と発表。緊急農地開拓事業着手、食糧不足で海岸線一帯に塩焚き流行（主食との交換用）。龍野喜一郎知事転任、重成格知事就任。NHK鹿児島第一回のど自慢大会および街頭録音実施。豊平金二町長。
一、九四七	二十二年	農地改革（第一次農地買収）。市町村長公選、田中省吾町長就任。学制改革、六・三・三制実施。新制による福山中、牧之原中、比曽木野分校、福地分校を創立（本校23校・分校70校）。福山・牧之原青年学校

一、九四八	二十三年	を併合（翌年廃止）。牧之原地区農道整備。日本国新憲法施行。県下各学校修学旅行復活。福山農業協同組合が福山・牧之原両農協に分離。新制高校発足（県立本校36、分校1、市町村立39、定時6、私立5）。鹿児島市街地土地代高騰す（天文館通り坪一万円）。国民の祝日法公布。ベビーブーム出現（24年までつづく）。比曽木野地区電灯架設。新警察制度発足により、県下30市町村に自治体警察・20か所に国家警察誕生。初の全国高校野球選手権大会開幕。鹿児島・東京間に直通急行列車復活運行。曾於郡財部町、宮崎県編入を決議（あと中止になる）。曾於郡恒吉村議会、初の村長リコール成立。初の県教育委員選挙施行。
一、九四九	二十四年	家庭裁判所発足。初の成人の日。第24回衆議院議員総選挙（本県定員10名）。一ドル360円の単一為替レート実施。鹿児島大学（文理・教育・農・水産各学部）発足。デラ台風来襲、フェイ台風来襲、ジュディ台風来襲。お年玉つき年賀はがき初発行。福地・福沢地区に電灯架設。
一、九五〇	二十五年	国勢調査（人口、一二、一二五人、二、五四一戸）。満年齢を実施。本県失業者数12万名と発表。福山港を商港に指定。千円紙幣発行。キジア台風、九州縦断。警察予備隊鹿屋駐屯部隊発足。
一、九五一	二十六年	県下中学卒業生初の集団就職列車運行。市町村長および市町村議会議員統一選挙、平原一熊町長就任。知事および県議会議員統一選挙、知事に重成格再選。産児制限モデル村として垂水町を指定（厚生省）。ケート台風、マージ台風、ルース台風来襲。福山海岸地区の家屋多数流失。
一、九五二	二十七年	市町村教育委員会発足。ヘルシンキオリンピックピック大会に西拡、水泳選手として出場。皇太子立太子礼。三洲バス、福山港・牧之原間を運行開始。定時制福山高校に鹿児島地方気象台・気象観測所を委嘱さる。シラス・ボラ・コラ対策事業開始。
一、九五三	二十八年	旧田中別荘、福山町に購入。福山高校25 th ブルー竣工。NHKテレビ本放送開始。県下に豪雨禍。
一、九五四	二十九年	台風5号来襲。国分・古江間（50.5 ^{km} ）鉄道新設工事着工（工費24億8千万円）。福山町立公民館設置（小廻、旧田中省吾邸）。福山町営プール建設（工費80万円）。
一、九五五	三十年	肝属郡垂水町（垂水町と新城村の一部合併）発足。曾於郡大隅町（岩川町・恒吉村・月野村を合併）発

一、九五六	三十一年	足。国分町、市制を施行。大隅町、野方村の一部を編入。寺園勝志知事就任。自作農維持創設資金融通法公布施行。県単土地改良事業開始。県単治山事業開始。県下に豪雨禍。陸上自衛隊鹿屋駐屯部隊、国分市に移駐。海上自衛隊鹿屋第二航空隊発足。家庭用燃料プロパンガス（LPG）およびトランジスタラジオ普及はじまる。豊平金二町長就任。
一、九五七	三十二年	比曾木野簡易水道完成。国の新農山漁村建設総合対策事業開始（37年まで）。下牧之原以東に電灯架設。県立福山学園設立（精神薄弱児施設。県畜産会発足。国鉄国分線着工。曾於郡輝北町（百引村および市成村合併）発足。南九州地方に豪雨。台風9号来襲。桜島南岳大爆発。台風12号来襲。任命制による県・市町村の新教育委員会発足。
一、九五八	三十三年	牧之原水道組合設立。文部省教職員勤務評定実施。県下に豪雨。台風7号来襲。台風10号来襲。台風16号来襲。第一回南日本マラソン開催。全国初のカラーテレビ試験放送開始。
一、九五九	三十四年	NHK鹿児島テレビ局開局、初放送。桜島南岳連続爆発。日本銀行、一万円札発行。曾於郡松山村、町制を施行。曾於郡西志布志村町制を施行、有明町となる。天皇・皇后両陛下、本県に行幸。台風常襲地帯指定。垂水町、市制を施行。鹿児島・東京間に特急はやぶさ運行。文部省道德教育実施要綱通達。全国小中高校生を対象に学力テストを実施。
一、九六〇	三十五年	メートル法施行。皇太子御成婚。東海道新幹線起工式。国民年金法施行。県長期農業振興計画（34～38年度）初年度第2次経済自立化運動開始。ラジオ南日本、テレビ放送開始。台風6号来襲。宮浦神社入り口に温泉掘さく（400㍔での温度27度）。比曾木野・牧之原間に鹿児島交通バス運転開始。町長選挙。無任所大臣池田勇人、月給2倍論を発言（所得倍増論のはしり）。豊平金二町長就任。

日本にカラーテレビ放送開始。本県農家一千戸につき、テレビ14台、電気洗濯機11台、オートバイ36台に普及。本県経済振興7か年計画（36～42年）計画策定。国勢調査（人口、一一、七七八人、二、六三七戸）。親子20分間読書運動開始（県立図書館提唱）。県立高等学校入学志願者急増対策委員会発足。県文化財保護条例施行規則公布。

一、九六一	三十六年	比曾木野・福地両中学校を牧之原中学校に統合。台風10・11・12号相ついで来襲。台風18号来襲。鹿児島県園芸共進会開催。県青少年保護育成条例公布。
一、九六二	三十七年	福山港拡張工事3か年計画。初のミカン専用列車九州号運転開始。農業構造改善事業開始。国営国分海岸保全事業着工。集中豪雨。台風13号来襲。国営笠野原畑地かんがい事業および高隈ダム起工式。
一、九六三	三十八年	牧之原農協澱粉工場竣工。町長選挙、平原一熊町長就任。福山町老人会結成、本県財政再建計画完了。日本銀行、新千円札発行。県果樹農業振興審議会設置。寺園勝志知事三選。県農業後継者育成対策協議会設置。農林省宮崎種畜牧場鹿児島支場、大隅町に設置。農村三作運動はじまる。
一、九六四	三十九年	牧之原中学校鉄筋校舎落成および移転。大廻地区台風14号による被害甚大。亀割峠・大廻間舗装工事完成。国鉄大隅線工事着工。福山海岸で真珠養殖開始。台風20号来襲。オリンピック東京大会。東海道新幹線（東京・大阪間）開通。福山高校鉄筋校舎工事着工。宮浦神社の銀杏、県文化財に指定。大口市産婦人科医提唱のオギヤー献金運動全国普及。
一、九六五	四十年	牧之原・検校川間の国道バイパス完成。大廻地区護岸堤防工事着工。国勢調査（人口一二、一二五人）。福山幼稚園を宮浦神社境内に移転。県立図書館、心に火をたく献本運動開始。家庭の日を実施。
一、九六六	四十一年	比曾木野・長谷線道路改良工事（1.4km）竣工。長谷橋竣工。牧之原中学校屋内体育館（790㎡）竣工。佳例川小学校運動場拡張工事。福山高校新校舎竣工。オレンジ学園開園（重症心身障害施設全国4番目）。大隅半島国鉄に急行佐多と都井号運行開始。本県知事暖地てん菜栽培中止を公式表明。財部、末吉両町に鶏のニューカッスル病流行。県下豪雨。祝日法案成立（敬老の日、体育の日、建国記念日）。
一、九六七	四十二年	福山小学校鉄筋校舎着工。町長・町議選挙。平原一熊町長就任。鹿屋市笠之原灌漑通水式。金丸三郎知事当選。県干ばつで、人工降雨実験。本県PTA協議会悪書追放にたちあがる。
一、九六八	四十三年	福山中学校体育館（613㎡）竣工。牧之原幼稚園（178㎡）竣工。老人家庭奉仕員制度実施。海上自衛隊、鹿児島試験所発足。明治百年記念式典。
一、九六九	四十四年	福山小学校鉄筋校舎（1165㎡）竣工。併設福山高校新校舎（497㎡）竣工。集中豪雨により麓宇都部落被害、

一、九七〇	四十五年	人命1を失う。福山幼稚園(180㎡)竣工。
一、九七一	四十六年	国勢調査(人口、八、七八二人)。牧之原小学校新校舎竣工。佳例川小学校新校舎竣工。
一、九七二	四十七年	町長・町議選挙、豊平金二町長。学校給食共同調理場(223㎡)完成。福山学園分教室設置。福山町総合振興計画策定。広域市町圏(国分市外一市八町)設定される。
一、九七三	四十八年	名誉町民第1号(中尾廉)。地域集団自動電話開設(一、一六二戸)。牧之原に中央公民館落成。老人憩いの家開設(牧之原・福山)。第27回太陽国体、福山高校女子ボート部、ナックルファーに優勝。福山小学校開校百周年式典。国鉄大隅線開通。福沢小学校体育館竣工。併設福山高校に産業振興校舎竣工。
一、九七四	四十九年	併設福山高校を県牧之原高等学校と改称す。佳例川小学校と牧之原小学校を統合し、牧之原小学校と呼称す。福山小学校プール竣工。下牧之原団地に公営住宅(十戸)竣工。国分地区消防組合に加入、地籍調査開始。南園地区樹園地スプリンクラー施設(13ha)。中崎林道竣工。牧之原水道組合を解散、町営に移管する。夏・秋キュウリの産地指定を受ける。
一、九七五	五十年	佳例川地区児童スクールバスで通学をはじめむ。牧之原小学校新校舎、樗木段に竣工。豊平金二町長公務出張中に死去、町長選挙、松下昌宜町長。
一、九七六	五十一年	牧之原第2プール(牧之原中学校)竣工。佳例川地区コミュニティセンター竣工。平野林道竣工。町議選挙。磯脇運動公園竣工。農地課を新設する。樗木段に公営住宅(20戸)竣工。比曽木野生活改善センター完成。
一、九七七	五十二年	比曽木野小学校、福地小学校閉校。磯脇川氾濫被害大。牧之原高等学校々舎新築。福地コミュニティセンター完成。樗木段町営住宅完成(一〇戸)。
一、九七八	五十三年	福山小学校体育館完成。大屋敷林道完成。比曽木野・福地・池之谷・国師・川路原・新原有線放送完成。牧之原および磯脇運動公園のナイター施設完成。牧之原支所移転。町営牧之原児童公園完成。福山沖海底に「たぎり」(噴気孔)を潜水艇「はくよう」確認。 四月廿七日、町制五十周年記念式典。

編 集 後 記

昭和51年夏、郷土誌編集集委嘱を受けてから満二年。流汗淋漓の毎日でした。久留景一宛「福山小学世話掛申付候事」明治11年12月4日、鹿児島県。亦東野一二宛「始良郡佳例川小学校雇教員ヲ命ジ月俸四円ヲ給ス」明治31年5月27日、始良郡役所等の辞令。昭和18年12月13日第462號「行事決戦化措置ニ関スル件」などの官報原本を見ながら、時の流れに感慨無量でした。町保存の文献、塩屋園平吉編集委員、鎌田政夫事務局担当の多年に亘り収集された文献等裨益する処大でありました。真実の歴史・生活の唄・昔のてぶりが消えようとしています。是非何らかの方法で記録して置きたいと念じ、編集の御手伝いをいたしました。市来甫編集委員長はじめ諸委員の方々、町当局、町民の皆様、斯文堂印刷KKから絶大な御支援と御協力をいただきましたことを深く感謝いたします。

昭和53年盛夏 (三ツ石)

参考文献

- 鹿児島県史 (鹿児島県)
- 島津国史 (山本正誼著)
- 薩藩史談集 (講話会)
- 鹿児島島の歴史 (高校歴史部会)
- 旧鹿児島藩の門割制度 (小野武夫著)
- 幕末の薩摩 (原口虎雄著)
- 日本庶民生活史料集成 (三一書房)
- 本藩神社誌 (県神職会)
- 郷中教育の研究 (松本彦三郎著)
- 大日本古文書 (東大出版会)
- 九州史料叢書 (竹内理三編)
- 鹿児島県史料集 (鹿児島県)
- 薩藩政要録 (県立図書館)
- 大日本古記録 (岩波書店)
- 薩藩の文化 (鹿児島市)
- 鹿児島教育史 (県立教育研究所)
- 鹿児島百年 (南日本新聞社)

- 郷土人系 (南日本新聞社)
- さつま今昔 (NHK放送局)
- かごしま民俗散歩 (小野重朗)
- 島津斉彬公伝 (鹿児島市役所)
- 西郷 隆盛 (井上清著)
- 西郷 隆盛 (圭室諦成著)
- 大久保利通 (毛利敏彦著)
- 清水村史料 (清水村)
- 栗野町郷土誌 (栗野町)
- 隼人郷土誌 (隼人町)
- 九州の風土と歴史 (川口昭二編)
- 正八幡宮史料 (鹿児島神宮)
- 岩崎行親 (岩崎行義編)
- ふくやま・町勢要覧 (福山町)
- 松下児童会館 (松下兼知編)
- 日本随筆大系 (吉川弘文館)
- 福山町産業の構造とその問題点 (福山町)
- 火山屑土の土地改良について (上鍋久)
- 人物聚書 (吉川弘文館)
- 日本の歴史 (小学館)
- 日本の歴史 (集英社)
- 日本の歴史 (読売新聞社)
- 日本絵巻物全集 (角川書店)
- 俳諧辞典 (明治書院)
- 大隅国御家人について (五味克夫著)
- 日本産業史大系 (東大出版会)
- 日本農業発達史 (中央公論社)
- 三国名勝図会 (南日本出版文化協会)
- 薩隅日地理纂考 (県地方史学会)
- 薩藩沿革地図 (鹿児島市)
- 大隅町誌 (大隅町)
- 国分郷土誌 (国分市)
- 垂水市史 (垂水市)
- 鹿児島県の歴史 (原口虎雄著)
- 薩摩歴史散歩 (中村光至著)
- 全国著名神社案内記 (岡田米夫著)
- 同窓会名簿 (福山高等学校)
- 郷土資料事典 (人文社)
- 創立20周年記念誌 (併設福山高校)
- 福山町郷土誌昭和12刊 (福山町)
- 福山町郷土誌昭和29刊 (岩崎行義著)
- 福山町 親鸞研究ノート (笠原一男著)
- 薩摩の真宗禁制とカヤカベ (桃園恵真編)
- 日本思想大系 (岩波書店)
- 日本歴史地図 (全国教育図書KK)
- 日本地誌(2) (鹿児島県)(二宮書店)
- 日本古典文学全集 (小学館)
- 日本の文学 (至文堂)
- 日本の歴史 (大阪書籍)

福山町郷土誌編集委員会

執筆 者 三ツ石 友三郎

嘱 託 鎌 田 政 夫

編集委員 市 来 甫

塩屋園 平 吉

岡 山 一 二

松 下 栄 盛

木 山 常 一

顧 問 松 下 昌 宜

大 王 久 雄

松 下 兼 知

伊地知 武 治

協力員 宇 都 静

山 形 拾 壱

谷 山 二 夫

今 田 安 治

久米村 才 二

堀 切 盛 嗣

指 宿 栄 二

国 師 親 之

園 田 実 満

昭和五十三年九月十九日 印刷

昭和五十三年十月十八日 発行

〔非売品〕

編集者 福山町郷土誌編集委員会

発行者 鹿児島県始良郡福山町

代表者 松下昌宜

発行所 鹿児島県始良郡福山町

福 山 町 役 場

印刷所 鹿児島市南栄三丁目一番地

斯文堂印刷株式会社

社長 高崎慶一

